

# 坊っちゃん

夏目漱石

一

1 坊っちゃん

親おやめず譲りの無鉄砲むてつぱうで小供の時から損ばかりしている。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰こしを抜ぬかした事がある。なぜそんな無闇むやみをしたと聞く人があ  
るかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の  
一人が冗談じょうだんに、いくら威張いばつても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。  
と囃はやしたからである。小使こつかいに負ぶさつて帰つて来た時、おやじが大きな眼めをして二階  
ぐらいから飛び降りて腰を抜かす奴やつがあるかと云いつたから、この次は抜かさずに飛ん

で見せますと答えた。

親類のものから西洋製のナイフを貰って綺麗な刃を日に翳して、友達に見せていたら、一人が光る事は光るが切れそうもないと云った。切れぬ事があるか、何でも切ってみせると受け合った。そんなら君の指を切ってみると注文したから、何だ指ぐらいこの通りだと右の手の親指の甲をはずに切り込んだ。幸ナイフが小さいのと、親指の骨が堅かったので、今だに親指は手に付いている。しかし創痕は死ぬまで消えぬ。庭を東へ二十歩に行き尽すと、南上がりにいささかばかりの菜園があつて、真中に栗の木が一本立っている。これは命より大事な栗だ。実の熟する時分は起き抜けに背戸を出て落ちた奴を拾ってきて、学校で食う。菜園の西側が山城屋という質屋の庭続きで、この質屋に勘太郎という十三四の倅が居た。勘太郎は無縁弱虫である。弱虫の癖に四つ目垣を乗りこえて、栗を盗みにくる。ある日の夕方折戸の蔭に隠れて、とうとう勘太郎を捕まえてやった。その時勘太郎は逃げ路を失つて、一生懸命に飛びかかってきた。向うは二つばかり年上である。弱虫だが力は強い。鉢の開いた頭を、こつちの胸へ宛ててぐいぐい押し拍子に、勘太郎の頭がすべつて、おれの袷の袖の中にはいった。邪魔になつて手が使えぬから、無暗に手を振つたら、袖の中にある勘太郎の頭が、右左へぐらぐら靡いた。しまいに苦しがつて袖の中から、おれの二の腕へ食い

付いた。痛かったから勘太郎を垣根へ押しつけておいて、足捌あしがらをかけて向うへ倒たおしてやった。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩くずして、自分の領分へ真逆まっさかさま様に落ちて、ぐうと云った。勘太郎が落ちるときに、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になった。その晩母が山城屋に詫わびに行つたついでに袷の片袖も取り返して来た。

この外いたずらは大分やった。大工の兼公かねこうと肴屋さかなやの角かくをつれて、茂作もさくの人参にんじん島ばたけをあらした事がある。人参の芽が出揃でそろわぬ処ところへ藁わらが一面に敷しいてあつたから、その上で三人が半日相撲すもうをとりつづけに取つたら、人参がみんな踏ふみつぶされてしまった。古川ふるかわの持つている田圃たんぼの井戸いどを埋うめて尻しりを持ち込まれた事もある。太たい孟宗もうそうの節を抜いて、深く埋めた中から水が湧わき出て、そこいらの稲いねにみずがかかる仕掛しかけであつた。その時分はどんな仕掛か知らぬから、石や棒ぼうちぎれをぎゅうぎゅう井戸の中へ挿さし込んで、水が出なくなつたのを見届まけて、うちへ帰つて飯を食つていたら、古川が真赤まっかになつて怒鳴どなり込んで来た。たしか罰金ばつぎんを出して済すんだようである。

おやじはちつともおれを可愛かわいがつてくれなかつた。母は兄ひいきばかり鼻ひにしていた。この兄はやに色が白くつて、芝居しばいの真似まねをして女形おんながたになるのが好きだつた。おれを見る度にこいつはどうせ碌ろくなものにはならないと、おやじが云つた。乱暴で乱暴で行く

先が案じられると母が云った。なるほど碌なものにはならない。ご覧の通りの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲役ちようえきに行かないで生きているばかりである。

母が病気で死ぬ二三日にさんち前所で宙返りをしてへっつい角で、肋骨あばらぼねを撲うつて大いに痛かった。母が大層おこ怒つて、お前のようなものの顔は見たくないと云うから、親類へ泊りとまに行つていた。するととうとう死んだと云う報知しらせが来た。そう早く死ぬとは思わなかつた。そんな大病なら、もう少し大人おとなしくすればよかつたと思つて帰つて来た。そうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれのために、おつかさんが早く死んだんだと云つた。口惜くやしかつたから、兄の横つ面を張つて大變叱しかられた。

母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮くらしていた。おやじは何にもせぬ男で、人の顔さえ見れば貴様は駄目だめだ駄目だと口癖のように云つていた。何が駄目なんだか今に分らない。妙なみょうおやじがあつたもんだ。兄は実業家になるとか云つてしきりに英語を勉強べんけんしていた。元來女のような性分で、ずるいから、仲がよくなかつた。十日に一いっぺん遍ぐらいの割で喧嘩けんかをしていた。ある時将棋しょうぎをさしたら卑怯ひきょうな待駒まちこまをして、人が困ると嬉うれしそうに冷やかした。あんまり腹が立つたから、手に在つた飛車を眉間みけんへ擲たきつけてやった。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやじに言付いけた。おやじがおれを勘当かんと

すると言い出した。

その時はもう仕方がないと観念して先方の云う通り勘当されるつもりでいたら、十年來召し使っている清という下女が、泣きながらおやじに詫ま<sup>あや</sup>つて、ようやくおやじの怒りが解けた。それにもかかわらずあまりおやじを怖<sup>こわ</sup>いとは思わなかった。かえつてこの清と云う下女に気の毒であつた。この下女はもと由緒のあるものだったそうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公<sup>ほうこう</sup>までするようになったのだと聞いている。だから婆さんである。この婆さんがどういふ因縁<sup>いんえん</sup>か、おれを非常に可愛がつてくれた。不思議なものである。母も死ぬ三日前に愛想<sup>あいぞ</sup>をつかした——おやじも年中持て余している——町内では乱暴者の悪太郎と爪弾<sup>つまはじ</sup>きをする——このおれを無暗に珍重<sup>ちんじゆう</sup>してくれ<sup>た</sup>。おれは到底人に好かれる性でないとあきらめていたから、他人から木の端<sup>はし</sup>のように取り扱<sup>あつか</sup>われるのは何とも思わない、かえつてこの清のようにちやほやしてくれるのを不審<sup>ふしん</sup>に考<sup>あ</sup>へた。清は時々台所で人の居ない時に「あなたは真<sup>ま</sup>つ直<sup>すぐ</sup>でよいご気性だ」と賞<sup>ほ</sup>める事が時々あつた。しかしおれには清の云う意味が分からなかつた。好<sup>い</sup>い気性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだろうと思つた。清がこんな事を云う度におれはお世辞は嫌<sup>きら</sup>いだと答えるのが常であつた。すると婆さんはそれだから好<sup>い</sup>いご気性ですと云つては、嬉しそうにおれの顔を眺<sup>なが</sup>めている。自分の力でおれを製造し

て誇ほこつてるように見える。少々気味がわるかった。

母が死んでから清はいよいよおれを可愛がった。時々ときどきは小供心になぜあんなに可愛がるのかと不審に思った。つまらない、廃よせばいいのにと思った。気の毒だと思った。それでも清は可愛がる。折々は自分の小遣こづかいで金鏢きんつばや紅梅焼こうばいやきを買かつてくれる。寒い夜などはひそかに蕎麦粉そばこを仕入れておいて、いつの間にか寝ねている枕元まくらもとへ蕎麦湯を持つて来てくれる。時には鍋焼餛飩なべやきうどんさえ買かつてくれた。ただ食い物ばかりではない。靴足袋くつたびももらった。鉛筆えんぴつも貰もらった、帳面も貰もらった。これはずつと後の事であるが金を三円ばかり貸してくれた事さえある。何も貸せと云った訳ではない。向うで部屋へ持つて来てお小遣こづかいがなくてお困りでしょう、お使いなさいと云つてくれたんだ。おれは無論入らないと云つたが、是非使えと云うから、借りておいた。実は大変嬉しかった。その三円を蝦蟇口がまぐちへ入れて、懐ふところへ入れたなり便所へ行つたら、すぼりと後架こうかの中へ落おとしてしまった。仕方がないから、のそのそ出てきて実はこれこれだと清に話したところところが、清は早速竹の棒さかを捜さがして来て、取とつて上げますと云った。しばらくすると井戸端いどはたでざあざあ音がするから、出てみたら竹の先へ蝦蟇口がまぐちの紐ひもを引き懸かけたのを水で洗すすっていた。それから口をあけて老円札いちえんさつを改めたら茶色になつて模様が消えかかっていた。清は火鉢で乾かわかして、これでいいでしょうと出した。ちよつとかいでみて臭くさいやと云

つたら、それじゃお出しなさい、取り換えて来て上げますからと、どこでどう胡魔化したか札の代りに銀貨を三円持つて来た。この三円は何に使ったか忘れてしまった。今に返すよと云ったぎり、返さない。今となつては十倍にして返してやりたくても返せない。

清が物をくれる時には必ずおやじも兄も居ない時に限る。おれは何が嫌いだと云つて人に隠れて自分だけ得をするほど嫌いな事はない。兄とは無論仲がよくないけれども、兄に隠して清から菓子や色鉛筆を貰いたくはない。なぜ、おれ一人にくれて、兄さんには遣らないのかと清に聞く事がある。すると清は澄したものでお兄様はお父様を買つてお上げなさるから構いませんと云う。これは不公平である。おやじは頑固だけれども、そんな依怙鼻負はせぬ男だ。しかし清の眼から見るとそう見えるのだから。全く愛に溺れていたに違いない。元は身分のあるものでも教育のない婆さんだから仕方がない。単にこればかりではない。鼻負目は恐ろしいものだ。清はおれをもつて将来立身出世して立派なものになると思い込んでいた。その癖勉強をする兄は色ばかり白くつて、とても役には立たないと一人できめてしまった。こんな婆さんに逢つては叶わない。自分の好きなものは必ずえらい人物になつて、嫌いなひとはきつと落ち振れるものと信じている。おれはその時から別段何になると云う了見もなかった。しか

し清がなるなると云うものだから、やっぱり何かに成れるんだろうと思っていた。今から考えると馬鹿馬鹿しい。ある時などは清にどんなものになるだろうと聞いてみた事がある。ところが清にも別段の考えもなかったようだ。ただ手車へ乗って、立派な玄関のある家をこしらえるに相違ないと云った。

それから清はおれがうちでも持つて独立したら、一所になる気でいた。どうか置いて下さいと何遍も繰り返して頼んだ。おれも何だかうちが持てるような気がして、うん置いてやると返事だけはしておいた。ところがこの女はなかなか想像の強い女で、あなたはどこが好き、麴町ですか麻布ですか、お庭へぶらんこをおこしらえ遊ばせ、西洋間は一つでたくさんですなどと勝手な計画を独りで並べていた。その時は家なんか欲しくも何ともなかった。西洋館も日本建も全く不用であったから、そんなものは欲しくないと、いつでも清に答えた。すると、あなたは欲がすくなくって、心が奇麗だと云ってまた賞めた。清は何と云っても賞めてくれる。

母が死んでから五六年の間はこの状態で暮っていた。おやじには叱られる。兄とは喧嘩をする。清には菓子を貰う、時々賞められる。別に望みもない。これでたくさんだと思っていた。ほかの小供も一概にこんなものだろうと思っていた。ただ清が何かにつけて、あなたはお可哀想だ、不仕合だと無暗に云うものだから、それじゃ可哀想



で不仕合せなんだろうと思つた。その外に苦になる事は少しもなかつた。ただおやじが小遣いをくれないには閉口した。

母が死んでから六年目の正月におやじも卒中で亡くなつた。その年の四月におれはある私立の中学校を卒業する。六月に兄は商業学校を卒業した。兄は何とか会社の九州の支店に口があつて行かなければならん。おれは東京でまだ学問をしなければならぬ。兄は家を買つて財産を片付けて任地へ出立すると云い出した。おれはどうでもするがよかろうと返事をした。どうせ兄の厄介になる気はない。世話をしてくれるにしたところで、喧嘩をするから、向うでも何とか云い出すに極つてゐる。なまじい保護を受ければこそ、こんな兄に頭を下げなければならぬ。牛乳配達をしても食つてられると覚悟をした。兄はそれから道具屋を呼んで来て、先祖代々の瓦落多を二束三文に売つた。家屋敷はある人の周旋である金満家に譲つた。この方は大分金になつたようだが、詳しい事は一向知らぬ。おれは一ヶ月以前から、しばらく前途の方向のつくまで神田の小川町へ下宿してゐた。清は十何年居たうちが人手に渡るのを大いに残念がつたが、自分のものでないから、仕様がなかつた。あなたがもう少し年をとつていらつしやれば、ここがご相続が出来ますものとしきりに口説いてゐた。もう少し年をとつて相続が出来るものなら、今でも相続が出来るはずだ。婆さんは何も知らない

から年さえ取れば兄の家がもらえると信じている。

兄とおれはかように分れたが、困ったのは清の行く先である。兄は無論連れて行ける身分でなし、清も兄の尻にくっついて九州下りまで出掛ける気は毛頭なし、と云つてこの時のおれは四畳半の安下宿に籠つて、それすらもいざとなれば直ちに引き払わねばならぬ始末だ。どうする事も出来ん。清に聞いてみた。どこかへ奉公でもする気かねと云つたらあなたがおうちを持つて、奥さまをお貰いになるまでは、仕方がないから、甥おひの厄介になりましようとうやうやく決心した返事をした。この甥は裁判所の書記でまず今日には差支さしつかえなく暮していたから、今までも清に来るなら来いと二三度勧めたのだが、清はたとい下女奉公はしても年来住み馴れた家の方がいいと云つて応じなかつた。しかし今の場合知らぬ屋敷へ奉公易ほうこうがえをして入らぬ気兼きがねを仕直すより、甥の厄介になる方がましだと思つたのだらう。それにしても早くうちを持つての、妻さいを貰もらえの、来て世話をするのと云う。親身しんみの甥よりも他人のおれの方が好きなのだらう。

九州へ立つ二日前兄が下宿へ来て金を六百円出してこれを資本にして商買しょうばいをするなり、学資にして勉強をするなり、どうでも随意ずいに使うがいい、その代りあとは構わないと云つた。兄にしては感心なやり方だ、何の六百円ぐらい貰わんでも困りはせんと思つたが、例に似ぬ淡泊たんぱくな処置が気に入ったから、礼を云つて貰つておいた。兄は

それから五十円出してこれをついでに清に渡してくれと云ったから、異議なく引き受けた。二日立って新橋の停車場ていしやばで分れたぎり兄にはその後一遍も逢わない。

おれは六百円の使用方法について寝ながら考えた。商買をしたって面倒めんどくさくって旨うまく出来るものじゃなし、ことに六百円の金で商買らしい商買がやれる訳でもなからう。よしやれるとしても、今のようじゃ人の前へ出て教育を受けたと威張れないからつまり損になるばかりだ。資本などはどうでもいいから、これを学資にして勉強してやろう。六百円を三に割って一年に二百円ずつ使えば三年間は勉強が出来る。三年間一生懸命にやれば何か出来る。それからこの学校へはいろいろと考えたが、学問は生来しょうらいどれもこれも好きでない。ことに語学とか文学とか云うものは真平まっぺいご免めんだ。新体詩などと来ては二十行あるうちで一行も分らない。どうせ嫌いなものなら何をやっても同じ事だと思つたが、幸い物理学校の前を通り掛かつたら生徒募集の広告が出ていたから、何も縁だと思つて規則書をもらつてすぐ入学の手續きをしてしまった。今考えるとこれも親譲りの無鉄砲おこから起つた失策だ。

三年間さんねんまあ人並ひとなみに勉強はしたが別段たちのいい方でもないから、席順はいつでも下から勘定かんじようする方が便利であつた。しかし不思議なもので、三年立つたらとうとう卒業してしまつた。自分でも可笑おかしいと思つたが苦情を云う訳もないから大人しく卒業し

ておいた。

卒業してから八日目に校長が呼びに来たから、何か用だろうと思って、出掛けて行ったら、四国辺のある中学校で数学の教師が入る。月給は四十円だが、行ってはどうだという相談である。おれは三年間学問はしたが実を云うと教師になる気も、田舎へ行く考えも何もなかった。もつとも教師以外に何をしようと言うあてもなかったから、この相談を受けた時、行きましようと言席せきに返事をした。これも親譲りの無鉄砲が祟たつたのである。

引き受けた以上は赴任ふにんせねばならぬ。この三年間は四畳半に蟄居ちつきよして小言はただの一度も聞いた事がない。喧嘩もせず済んだ。おれの生涯のうちでは比較的呑気な時節であった。しかしこうなると四畳半も引き払わなければならぬ。生れてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所に鎌倉かまくらへ遠足した時ばかりである。今度は鎌倉どころではない。大変な遠くへ行かねばならぬ。地図で見ると海浜で針の先ほど小さく見える。どうせ碌な所ではあるまい。どんな町で、どんな人が住んでるか分らん。分らんでも困らない。心配にはならぬ。ただ行くばかりである。もつとも少々面倒臭い。家を畳たたんでからも清の所へは折々行った。清の甥もてというのは存外結構な人である。おれが行くたびに、居おりさえすれば、何くれと款待もてなしてくれた。清はおれを前へ置

いて、いろいろおれの自慢じまんを甥ねいに聞かせた。今に学校を卒業すると麴町辺へ屋敷を買って役所へ通うのだなどと吹聴ふいちようした事もある。独りで極めて一人で喋舌しゃべるから、こっちは困こまって顔を赤くした。それも一度や二度ではない。折々おれが小さい時寝小便をした事まで持ち出すには閉口した。甥は何と思つて清の自慢を聞いていたか分らぬ。ただ清は昔風むかしふうの女だから、自分とおれの関係を封建時代ほうけんの主従しゅじゆうのように考えていた。自分の主人なら甥のためにも主人に相違ないと合点がてんしたものらしい。甥こそいい面の皮だ。

いよいよ約束が極まつて、もう立つと云う三日前に清を尋ねたら、北向きの三疊に風邪かぜを引いて寝ていた。おれの来たのを見て起き直るが早いのか、坊ぼっちゃんいつ家をお持ちなさいますと聞いた。卒業さえすれば金が自然とポケットの中に湧いて来ると思つている。そんなにえらい人をつらまえて、まだ坊っちゃんと呼ぶのはいよいよ馬鹿氣ばかきている。おれは単簡たんかんに当分うちには持たない。田舎へ行くんだと云つたら、非常に失望しつぱつした容子ようすで、胡麻塩ごましおの鬢びんの乱れをしきりに撫なでた。あまり氣の毒だから「行く事は行くがじき帰る。来年の夏休みにはきつと帰る」と慰なぐさめてやった。それでも妙な顔かほをしているから「何を見やげに買つて来てやろう、何が欲しい」と聞いてみたら「越後の笹飴えびしが食くべたい」と云つた。越後の笹飴えびしなんて聞いた事もない。第一方角が違

う。「おれの行く田舎には笹飴はなさそうだ」と云つて聞かしたら「そんなら、どっちの見当です」と聞き返した。「西の方だよ」と云うと「箱根のさきですか手前ですか」と問う。随分持てあました。

出立の日には朝から来て、いろいろ世話をやいた。来る途中小間物屋で買って来た歯磨と楊子と手拭をズツクの革靴に入れてくれた。そんな物は入らないと云つてもなかなか承知しない。車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出た時、車へ乗り込んだおれの顔をじつと見て「もうお別れになるかも知れません。随分ご機嫌よう」と小さな声で云つた。目に涙が一杯たまっている。おれは泣かなかつた。しかしもう少して泣くところであつた。汽車がよつぽど動き出してから、もう大丈夫だろうと思つて、窓から首を出して、振り向いたら、やつぱり立っていた。何だか大変小さく見えた。

二

ぶうと云つて汽船がとまると、舳が岸を離れて、漕ぎ寄せて来た。船頭は真つ裸に赤ふんどしをしめている。野蛮な所だ。もつともこの熱さでは着物はきられまい。

日が強いので水がやに光る。見つめていても眼がくらむ。事務員に聞いてみるとおれはここへ降りるのだそうだ。見るところでは大森ぐらいな漁村だ。人を馬鹿にしているらあ、こんな所に我慢が出来るものかと思つたが仕方がない。威勢よく一番に飛び込んだ。続づいて五六人は乗つたろう。外に大きな箱を四つばかり積み込んで赤ふんは岸へ漕ぎ戻して来た。陸へ着いた時も、いの一に飛び上がって、いきなり、磯に立つていた鼻たれ小僧をつらまえて中学校はどこだと聞いた。小僧はぼんやりして、知らんがの、と云つた。気の利かぬ田舎ものだ。猫の額ほどの町内の癖に、中学校のありかも知らぬ奴があるものか。ところへ妙な筒ぼうを着た男がきて、こつちへ来いと云うから、尾いて行つたら、港屋とか云う宿屋へ連れて来た。やな女が声を揃えてお上がりなさいと云うので、上がるのがいやになつた。門口へ立つたなり中学校を教えろと云つたら、中学校はこれから汽車で二里ばかり行かなくっちゃいけないと聞いて、なお上がるのがいやになつた。おれは、筒ぼうを着た男から、おれの革靴を二つ引きたくつて、のそのそあるき出した。宿屋のものは変な顔をしていた。

停車場はすぐ知れた。切符も訳なく買った。乗り込んでみるとマツチ箱のような汽車だ。ごろごろと五分ばかり動いたと思つたら、もう降りなければならぬ。道理で切符が安いと思つた。たつた三銭である。それから車を備つて、中学校へ来たら、も

う放課後で誰も居ない。宿直はちよつと用達に出たと小使が教えた。随分気楽な宿直が  
いるものだ。校長でも尋ねようかと思つたが、草臥れたから、車に乗つて宿屋へ連  
れて行けと車夫に云い付けた。車夫は威勢よく山城屋と云ううちへ横付けにした。山  
城屋とは質屋の勘太郎の屋号と同じだからちよつと面白く思つた。

何だか二階の櫓子段の下の暗い部屋へ案内した。熱くつて居られやしない。こんな  
部屋はいやだと云つたらあいにくみんな塞がっておりですからと云いながら革靴を抛  
り出したまま出て行つた。仕方がないから部屋の中へはいつて汗をかいて我慢してい  
た。やがて湯に入れと云うから、ざぶりと飛び込んで、すぐ上がった。帰りがけに覗  
いてみると涼しそうな部屋がたくさん空いている。失敬な奴だ。嘘をつきやあがつた。  
それから下女が膳を持って来た。部屋は熱つかつたが、飯は下宿のよりも大分旨かつ  
た。給仕をしながら下女がどちらからおいでになりましたと聞くから、東京から来た  
と答えた。すると東京はよい所でございましょうと云つたから当り前だと答えてやつ  
た。膳を下げた下女が台所へいった時分、大きな笑い声が聞えた。くだらないから、  
すぐ寝たが、なかなか寝られない。熱いばかりではない。騒々しい。下宿の五倍ぐら  
いやかましい。うとうとしたら清の夢を見た。清が越後の笹飴を笹ぐるみ、むしやむ  
しや食っている。笹は毒だからよしたらよかろうと云うと、いえこの笹がお菓でござ



いますと云つて旨そうに食っている。おれがあきれ返つて大きな口を開いてハハハと笑つたら眼が覺めた。下女が雨戸を明けている。相変らず空の底が突き抜けたような天気だ。

道中をしたら茶代をやるものだと聞いていた。茶代をやらないと粗末に取り扱われると聞いていた。こんな、狭くて暗い部屋へ押し込めるのも茶代をやらないせいだろう。見すばらしい服装をして、ズツクの革靴と毛織子の蝙蝠傘を提げてるからだろう。田舎者の癖に人を見括つたな。一番茶代をやつて驚かしてやろう。おれはこれでも学資のあまりを三十円ほど懐に入れて東京を出て来たのだ。汽車と汽船の切符代と雑費を差し引いて、まだ十四円ほどある。みんなやつたつてこれからは月給を貰うんだから構わない。田舎者はしみつたれだから五円もやれば驚ろいて眼を廻すに極つている。どうするか見ると済して顔を洗つて、部屋へ帰つて待つてると、夕べの下女が膳を持つて来た。盆を持つて給仕をしながら、やににやにや笑つてる。失敬な奴だ。顔のなかをお祭りでも通りやしまし。これでもこの下女の面よりよっぽど上等だ。飯を済ましてからにしようと思つていたが、癩に障つたから、途中で五円札を一枚出して、あとでこれを帳場へ持つて行けと云つたら、下女は変な顔をしていた。それから飯を済ましてすぐ学校へ出懸けた。靴は磨いてなかつた。

学校は昨日車で乗りつけたから、大概の見当は分つている。四つ角を二三度曲がったらずぐ門の前へ出た。門から玄関までは御影石で敷きつめてある。きのうこの敷石の上を車でがらがらと通つた時は、無暗に仰山な音がするので少し弱つた。途中から小倉の制服を着た生徒にたくさん逢つたが、みんなこの門をはいって行く。中にはおれより背が高くつて強そうなのが居る。あんな奴を教えるのかと思つたら何だか気味が悪くなつた。名刺を出したら校長室へ通した。校長は薄髯のある、色の黒い、目の大きな狸のような男である。やにもつたいぶつていた。まあ精出して勉強してくれと云つて、恭しく大きな印の捺つた、辞令を渡した。この辞令は東京へ帰るとき丸めて海の中へ抛り込んでしまつた。校長は今に職員に紹介してやるから、一々その人にこの辞令を見せるんだと云つて聞かした。余計な手数だ。そんな面倒な事をするよりこの辞令を三日間職員室へ張り付ける方がましだ。

教員が控所へ揃うには一時間目の喇叭が鳴らなくてはならぬ。大分時間がある。校長は時計を出して見て、追々ゆると話すつもりだが、まず大体の事を呑み込んでおいてもらおうと云つて、それから教育の精神について長いお談義を聞かした。おれは無論いい加減に聞いていたが、途中からこれは飛んだ所へ来たと思つた。校長の云うようにはとても出来ない。おれみたような無鉄砲なものをつらまえて、生徒の模範に

なれの、一校の師表しひょうと仰あおがれなくてはいかんの、学問以外に個人の徳化とくかを及およぼさなくては教育者になれないの、と無暗むあんに法外はふがいな注文をする。そんなえらい人が月給四十円で遙々はろはろこんな田舎へくるもんか。人間は大概似たもんだ。腹が立てば喧嘩けんかの一つぐらいは誰でもするだろうと思つてたが、この様子じやめつたに口も聞けない、散歩も出  
来ない。そんなむずかしい役なら雇やとう前にこれこれだと話すがいい。おれは嘘うそをつくのが嫌きらいだから、仕方がない、だまされて来たのだとあきらめて、思い切りよく、ここで断ことわつて帰かへつちまおうと思つた。宿屋へ五円やつたから財布さいふの中には九円な  
がししかない。九円じゃ東京までは帰れない。茶代ちやだいなんかやらなければよかつた。惜おしい事をした。しかし九円だつて、どうかならない事はない。旅費りょひは足りなくつても嘘  
をつくよりましだと思つて、到底とうていあなたのおっしゃる通りにや、出来ません、この辞  
令しやうは返かへしますと云つたら、校長は狸ねこのような眼まなこをぱちつかせておれの顔を見ていた。  
やがて、今のはただ希望である、あなたが希望通り出来ないのはよく知つてゐるから  
心配しんぱいしなくつてもいいと云いながら笑つた。そのくらいよく知つてるなら、始めから  
威嚇おしこさなければいいのに。

そう、こうする内に喇叭らふが鳴つた。教場の方が急にがやがやする。もう教員も控所  
へ揃そろいましたらうと云うから、校長に尾おいて教員控所へはいつた。広い細長い部屋の

周囲に机を並べてみんな腰をかけている。おれがはいったのを見て、みんな申し合せたようにおれの顔を見た。見世物じやあるまいし。それから申し付けられた通り一人一人の前へ行つて辞令を出して挨拶をした。大概は椅子を離れて腰をかがめるばかりであつたが、念の入つたのは差し出した辞令を受け取つて一応拝見をしてそれをうやうやしく返却した。まるで宮芝居の真似だ。十五人目に体操の教師へと廻つて来た時には、同じ事を何返もやるので少々じれつたくなつた。向うは一度で済む。こつちは同じ所作を十五返繰り返している。少しはひとの了見も察してみるがいい。

挨拶をしたうちに教頭のなにごしと云うのが居た。これは文学士だそうだ。文学士と云えば大学の卒業生だからえらい人なんだろう。妙に女のような優しい声を出す人だつた。もつとも驚いたのはこの暑いのにフランネルの襯衣を着ている。いくらか薄い地には相違なくつても暑いには極つてる。文学士だけにご苦労千萬な服装をしたもんだ。しかもそれが赤シャツだから人を馬鹿にしている。あとから聞いたらこの男は年が年中赤シャツを着るんだそうだ。妙な病気があつた者だ。当人の説明では赤は身体に薬になるから、衛生のためにわざわざ詭らえるんだそうだが、入らざる心配だ。そんならついでに着物も袴も赤にすればいい。それから英語の教師に古賀とか云う大変顔色の悪い男が居た。大概顔の蒼い人は瘡せてるもんだがこの男は蒼くふくれてい

る。昔むかし小学校へ行く時分、浅井あさいの民たみさんと云う子が同級生にあつたが、この浅井のおやじがやはり、こんな色つやだった。浅井は百姓ひやくしやうだから、百姓になるとあんな顔になるかと清に聞いてみたら、そうじゃありません、あの人はうらなりの唐茄子とうなすばかり食べるから、蒼くふくれるんですと教えてくれた。それ以来蒼くふくれた人を見れば必ずうらなりの唐茄子を食つた酬むくいだと思う。この英語の教師もうらなりばかり食つてるに違ちがひない。もつともうらなりとは何の事か今もつて知らない。清に聞いてみた事はあるが、清は笑つて答えなかつた。大方清も知らないだろう。それからおれと同じ数学の教師に堀田ほったというのが居た。これは逞たくましい毬栗坊主いがりぼうずで、叡山えいざんの悪僧あくそうと云うべき面構つらなまてである。人が町寧ていねいに辞令を見せたら見向きもせず、やあ君が新任の人か、ちと遊びに来給きたまえアハハと云つた。何がアハハハだ。そんな礼儀れいぎを心得ぬ奴の所へ誰が遊びに行くものか。おれはこの時からこの坊主やまあらしに山嵐やまあらしという渾名あだなをつけてやつた。漢学の先生はさすがに堅かたいものだ。昨日お着きで、さぞお疲れで、それでもう授業をお始めで、大分おおいご励精れいせいで、——とのべつに弁じたのは愛嬌あいきやうのあるお爺じいさんだ。画学の教師は全く芸人風だ。べらべらした透綾すさまの羽織を着て、扇子せんすをぱちつかせて、お国はどちらでげす、え？ 東京？ そりや嬉うれしい、お仲間が出来て……私わたしもこれで江戸えどっ子ですと云つた。こんなのが江戸っ子なら江戸には生れたくないもんだと心中に考え

た。そのほか一人一人についてこんな事を書けばいくらでもある。しかし際限がないからやめる。

挨拶が一通り済んだら、校長が今日はもう引き取ってもいい、もつとも授業上の事は数学の主任と打ち合せをしておいて、明後日あさってから課業を始めてくれと云った。数学の主任は誰かと聞いてみたら例の山嵐であった。忌々しいいまいま、こいつの下に働くのかおやおやと失望した。山嵐は「おい君どこに宿とまつてるか、山城屋か、うん、今に行つて相談する」と云い残して白墨はくぼくを持つて教場へ出て行つた。主任の癖に向うから来て相談するなんて不見識な男だ。しかし呼び付けるよりは感心だ。

それから学校の門を出て、すぐ宿へ帰ろうと思つたが、帰つたつて仕方がないから、少し町を散歩してやろうと思つて、無暗に足の向く方があるき散らした。県庁も見えた。古い前世紀の建築である。兵営も見えた。麻布あぶの聯隊れんたいより立派でない。大通りも見えた。神楽坂かぐらざかを半分かに狭くしたぐらいな道幅みちはばで町並まちなみはあれより落ちる。二十五万石の城下だつて高の知れたものだ。こんな所に住んでご城下などと威張いばつてる人間は可哀想かわいそうなものだと考えながらくると、いつしか山城屋の前に出た。広いようでも狭いものだ。これで大抵たいていは見尽みつくしたのでらう。帰つて飯でも食おうと門口かどぐちをはいった。帳場すまわに坐つていたかみさんが、おれの顔を見ると急に飛び出してきてお帰り……と板の間へ頭を

つけた。靴くつを脱ぬいで上がると、お座敷ざしきがあきましたからと下女が二階へ案内をした。十五畳じゅうごうの表二階で大きな床とこの間まがついている。おれは生れてからまだこんな立派な座敷へはいつた事はない。この後いつは入れるか分らないから、洋服を脱いで浴衣ゆかた一枚になつて座敷の真中まんなかへ大の字に寝てみた。いい心持ちである。

昼飯を食つてから早速清へ手紙を書いてやつた。おれは文章がまずい上に字を知らないから手紙を書くのが大嫌だいきらいだ。またやる所もない。しかし清は心配しているだろう。難船して死にやしないかなどと思つちや困るから、奮発ふんぱつして長いのを書いてやつた。その文句はこうである。

「きのう着いた。つまらん所だ。十五畳の座敷に寝ている。宿屋へ茶代を五円やつた。かみさんが頭を板の間へすりつけた。夕べは寝られなかった。清が笹飴を笹ごと食う夢を見た。来年の夏は帰る。今日学校へ行つてみんなにあだなをつけてやつた。校長は狸、教頭は赤シャツ、英語の教師はうらなり、数学は山嵐、画学はのだいこ。今にいろいろな事を書いてやる。さようなら」

手紙をかいましてたら、いい心持ちになつて眠気ねむけがさしたから、最前のように座敷の真中へのびのびと大の字に寝た。今度は夢も何も見ないでぐっすり寝た。この部屋かいと大きな声がするので目が覚めたら、山嵐がはいつて来た。最前は失敬、君の

受持ちちは……と人が起き上がるや否や談判を開かれたので大いに狼狽した。受持ちちを聞いてみると別段むずかしい事もなさそうだから承知した。このくらしいの事なら、明日は愚、明日から始めると云ったって驚ろかない。授業上の打ち合せが済んだら、君はいつまでこんな宿屋に居るつもりでもあるまい、僕がいい下宿を周旋してやるから移りたまえ。外のものでは承知しないが僕が話せばすぐ出来る。早い方がいいから、今日見て、あす移って、あさってから学校へ行けば極りがいいと一人で呑み込んでゐる。なるほど十五畳敷にいつまで居る訳にも行くまい。月給をみんな宿料に払つても追つつかないかもしれぬ。五円の茶代を奮発してすぐ移るのはちと残念だが、どうせ移る者なら、早く引き越して落ち付く方が便利だから、そのところはよろしく山嵐に頼む事にした。すると山嵐はともかくもいつしよに来てみると云うから、行った。町はずれの岡の中腹にある家で至極閑静だ。主人は骨董を売買するいか銀と云う男で、女房は亭主よりも四つばかり年嵩の女だ。中学校に居た時ウィッチと云う言葉を習つた事があるがこの女房はまさにウィッチに似ている。ウィッチだつて人の女房だから構わない。とうとう明日から引き移る事にした。帰りに山嵐は通町で氷水を一杯奢つた。学校で逢つた時はやに横風な失敬な奴だと思つたが、こんなにいろいろ世話をしてくれるところを見ると、わるい男でもなさそうだ。ただおれと同じようににせ



つかちで肝癪持らしい。あとで聞いたらこの男が一番生徒に人望があるのだそうだ。

## 三

いよいよ学校へ出た。初めて教場へはいつて高い所へ乗った時は、何だか変だった。講釈をしながら、おれでも先生が勤まるのかと思つた。生徒はやかましい。時々図抜けた大きな声で先生と云う。先生には応えた。今まで物理学校で毎日先生先生と呼びつけていたが、先生と呼ぶのと、呼ばれるのは雲泥の差だ。何だか足の裏がむずむずする。おれは卑怯な人間ではない。臆病な男でもないが、惜しい事に胆力が欠けている。先生と大きな声をされると、腹の減つた時に丸の内で午砲を聞いたような気がする。最初の一時間は何だかいい加減にやってしまった。しかし別段困つた質問も掛けられずに済んだ。控所へ帰つて来たら、山嵐がどうだいと聞いた。うんと単簡に返事をしたら山嵐は安心したらしかった。

二時間目に白墨を持つて控所を出た時には何だか敵地へ乗り込むような気がした。教場へ出ると今度の組は前より大きな奴ばかりである。おれは江戸っ子で華奢に小作りに出来ているから、どうも高い所へ上がつても押しが利かない。喧嘩なら相撲取と

でもやってみせるが、こんな大僧おおぞうを四十人も前へ並べて、ただ一枚まいの舌をたたいて  
恐縮きょうしゆくさせる手際はない。しかしこんな田舎者いなかものに弱身を見せると癖くせになると思ったか  
ら、なるべく大きな声をして、少々巻き舌で講釈してやった。最初のうちは、生徒も  
烟けむに捲かれてぼんやりしていたから、それ見るとますます得意になって、べらんめい  
調を用いてたら、一番前の列の真中まんなかに居た、一番強そうな奴が、いきなり起立して先  
生と云う。そら来たと思ひながら、何だと聞いたたら、「あまり早くて分からんけれ、も  
ちつと、ゆるゆる遣やつて、おくれんかな、もし」と云つた。おくれんかな、もしは生温なまぬ  
る言葉だ。早過ぎるなら、ゆっくり云つてやるが、おれは江戸っ子だから君等きみらの言  
葉は使えない、分わからなければ、分るまで待つてるがいいと答えてやった。この調子で  
二時間目は思ったより、うまく行つた。ただ帰りがけに生徒の一人がちよつとこの問  
題を解釈をしておくれんかな、もし、と出来そうもない幾何きかの問題を持って逼せまつたに  
は冷汗ひやあせを流した。仕方がないから何だか分らない、この次教えてやると急いで引き揚あ  
げたら、生徒がわあと囃はやした。その中に出来ん出来んと云う声が聞える。篋べらぼう棒め、先  
生だつて、出来ないのは当り前だ。出来ないのを出来ないと言ふのに不思議があるも  
んか。そんなものが出来るくらいなら四十円でこんな田舎へくるもんかと控所へ帰つ  
て来た。今度はどうだとまた山嵐が聞いた。うんと云つたが、うんだけでは気が済ま

なかつたから、この学校の生徒は分らずやだなど云つてやつた。山嵐は妙な顔をしていた。

三時間目も、四時間目も昼過ぎの一時間も大同小異であつた。最初の日に出了た級は、いずれも少々ずつ失敗した。教師ははたで見るとほど楽じゃないと思つた。授業はひと通り済んだが、まだ帰れない、三時までぼつ然として待つてなくてはならん。三時になると、受持級の生徒が自分の教室を掃除して報知にくるから検分をするんだそうだとそれから、出席簿を一応調べてようやくお暇が出る。いくら月給で買われた身体だつて、あいた時間まで学校へ縛りつけて机と睨めつくらをさせるなんて法があるものか。しかしほかの連中はみんな大人しくご規則通りやつてるから新参のおればかり、だだを捏ねるのもよろしくないと思つて我慢していた。帰りがけに、君何でもかんでも三時過まで学校にいさせるのは愚だぜと山嵐に訴えたら、山嵐はそうさアハハハと笑つたが、あとから真面目になつて、君あまり学校の不平を云うと、いかんぜ。云うならば僕だけに話せ、随分妙な人も居るからなと忠告がましい事を云つた。四つ角で分れたから詳しい事は聞くひまがなかつた。

それからうちへ帰つてくると、宿の亭主がお茶を入れましよう云つてやつて来る。お茶を入れると云うからご馳走をするのかと思つと、おれの茶を遠慮なく入れて自分

が飲むのだ。この様子では留守中も勝手にお茶を入れましようを一人ひとりで履行りこうしているかも知れない。亭主が云うには手前は書画骨董しよがこつどうがすきで、とうとうこんな商買を内々で始めるようになりました。あなたもお見受け申すところ大分ご風流でいらつしやるらしい。ちと道楽にお始めなすつてはいかがですと、飛んでもない勧誘かんゆうをやる。二年前ある人の使つかいに帝国ホテルへ行った時は錠前直じようまえしと間違まちがえられた事がある。ケツトを被かぶつて、鎌倉の大仏を見物した時は車屋から親方と云われた。その外こんにち今日まで見損みまてふなわれた事は随分あるが、まだおれをつらまえて大分ご風流でいらつしやると云つたものはない。大抵たいていはなりや様子でも分る。風流人なんていうものは、画えを見ても、頭巾ずきんを被かぶるか短冊たんざくを持つてるものだ。このおれを風流人などと真面目に云うのはただの曲者くせものじゃない。おれはそんな呑気のんきな隠居いんきよのやるような事は嫌きらいだと云つたら、亭主はへへへと笑いながら、いえ始めから好きなのは、どなたもございませんですが、いったんこの道にはいるとなかなか出られませんと一人で茶を注いで妙な手付てつきをして飲んでゐる。実はゆうべ茶を買つてくれと頼たのんでおいたのだが、こんな苦い濃い茶こはいやだ。一杯ぱい飲むと胃に答えるような気がする。今度からもつと苦くないのを買つてくれと云つたら、かしこまりましたとまた一杯しぼつて飲んだ。人の茶だと思つて無暗むやみに飲む奴やつだ。主人が引き下がってから、明日の下説したよみをしてすぐ寝ねてしまった。

それから毎日毎日学校へ出ては規則通り働く、毎日毎日帰って来ると主人がお茶を入れましようとして出てくる。一週間ばかりしたら学校の様子もひと通りは飲み込めたし、宿の夫婦の人物も大概は分った。ほかの教師に聞いてみると辞令を受けて一週間から一ヶ月ぐらゐの間は自分の評判がいいだろうか、悪るいだろうか非常に気に掛かるそうであるが、おれは一向そんな感じはなかつた。教場で折々しくじるとその時だけはやな心持ちだが三十分ばかり立つと奇麗に消えてしまう。おれは何事によらず長く心配しようと思つても心配が出来ない男だ。教場のしくじりが生徒にどんな影響を与えて、その影響が校長や教頭にどんな反応を呈するかまるで無頓着であつた。おれは前に云う通りあまり度胸の据つた男ではないのだが、思い切りはすこぶるいい人間である。この学校がいけなければすぐどこかへ行く覚悟でいたから、狸も赤シャツも、ちつとも恐しくはなかつた。まして教場の小僧共なんかには愛嬌もお世辞も使う氣になれなかつた。学校はそれでいいのだが下宿の方はそうはいかなかつた。亭主が茶を飲みに来るだけなら我慢もするが、いろいろな者を持つてくる。始めに持つて来たのは何でも印材で、十ばかり並べておいて、みんなで三円なら安い物だお買いなさいと云う。田舎巡りのへボ絵師じゃあるまいし、そんなものは入らないと云つたら、今度は華山とか何とか云う男の花鳥の掛物をもつて来た。自分で床の間へかけて、いい出

来じやありませんかと云うから、そうかなと好加減いいかげんに挨拶あいさつをすると、華山には二人ある、一人は何とか華山で、一人は何とか華山ですが、この幅ふくはその何とか華山の方だと、くだらない講釈をしたあとで、どうです、あなたなら十五円にしておきます。お買いなさいと催促さいそくをする。金がないと断わると、金なんか、いつでもようございましてなかなか頑固がんこだ。金があつても買わないだと、その時は追っ払はらちまった。その次には鬼瓦おにがわらぐらいな大硯おおすすりを担ぎ込んだ。これは端溪たんけいです、端溪ですと二遍へんも三遍も端溪がるから、面白半分に端溪た何だいと聞いたたら、すぐ講釈を始め出した。端溪には上層中層下層とあつて、今時のものはみんな上層ですが、これはたしかに中層です、この眼がんをご覧なさい。眼が三つあるのは珍めずらしい。浣墨はっぼくの具合も至極よろしい、試してご覧なさいと、おれの前へ大きな硯いんを突きつける。いくらだと聞くと、持主が支那しなから持つて帰つて来て是非売りたいと云いますから、お安くして三十円にしておきましようと言う。この男は馬鹿ばかに相違そういない。学校の方はどうかこうか無事に勤まりそうだが、こう骨董責こつどうせめに逢あつてはとても長く続きそうにない。

そのうち学校もいやになつた。ある日の晩大町おおまちと云う所を散歩していたら郵便局の隣となりに蕎麦そばとかいて、下に東京と注を加えた看板があつた。おれは蕎麦が大好きである。東京に居おつた時でも蕎麦屋の前を通つて薬味の香においをかぐと、どうしても暖簾のれん

がくぐりたくなつた。今日までは数学と骨董で蕎麦を忘れていたが、こうして看板を見ると素通りが出来なくなる。ついでだから一杯食つて行こうと思つて上がり込んだ。見ると看板ほどでもない。東京と断わる以上はもう少し奇麗にしそうなものだが、東京を知らないのか、金がないのか、滅きたない。壁は煤で真黒だ。天井はランプの油煙で燻ぼつてるのみか、低くつて、思わず首を縮めるくらいだ。ただ麗々と蕎麦の名前をかいで張り付けたねだん付けだけは全く新しい。何でも古いうちを買つて二三日前から開業したに違ひなからう。ねだん付の第一号に天麩羅とある。おい天麩羅を持つてこいと大きな声を出した。するとこの時まで隅の方に三人かたまつて、何かつるつる、ちゆうちゆう食つてた連中が、ひとしくおれの方を見た。部屋が暗いので、ちよつと気がつかなかったが顔を合せると、みんな学校の生徒である。先方で挨拶をしたから、おれも挨拶をした。その晩は久し振に蕎麦を食つたので、旨かつたから天麩羅を四杯平げた。

翌日何の気もなく教場へはいると、黒板一杯ぐらいな大きな字で、天麩羅先生とかいてある。おれの顔を見てみんなわあと笑つた。おれは馬鹿馬鹿しいから、天麩羅を食つちや可笑しいかと聞いた。すると生徒の一人が、しかし四杯は過ぎるぞな、もし、と云つた。四杯食おうが五杯食おうがおれの銭でおれが食うのに文句があるもんかと、

さつさと講義を済まして控所へ帰つて来た。十分立つて次の教場へ出ると一つ天麩羅四杯なり。但し笑うべからず。と黒板にかいてある。さつきは別に腹も立たなかつたが今度は癩に障つた。「冗談も度を過ごせばいたずらだ。焼餅の黒焦のようなもので誰も賞め手はない。田舎者はこの呼吸が分からないからどこまで押して行つても構わないと云う了見だろう。一時間あるくと見物する町もないような狭い都に住んで、外に何にも芸がないから、天麩羅事件を日露戦争のように触れちらかすんだろう。隣れな奴等だ。小供の時から、こんな教育されるから、いやにひねっこびた、植木鉢の楓みたような小人が出来るんだ。無邪気ならいっしょに笑つてもいいが、こりやなんだ。小供の癖に乙に毒気を持つてる。おれはだまつて、天麩羅を消して、こんなはずらが面白いか、卑怯な冗談だ。君等は卑怯と云う意味を知つてるか、と云つたら、自分がした事を笑われて怒るのが卑怯じゃろうがな、もしと答えた奴がある。やな奴だ。わざわざ東京から、こんな奴を教えに来たのかと思つたら情なくなつた。余計な減らず口を利かないで勉強しろと云つて、授業を始めてしまった。それから次の教場へ出たら天麩羅を食うと減らず口が利きたくなるものなりと書いてある。どうも始末に終えない。あんまり腹が立つたから、そんな生意気な奴は教えないと云つてすたすた帰つて来てやつた。生徒は休みになつて喜んだそうだ。こうなると学校より骨董の



方がまだました。

天麩羅蕎麦もうちへ帰って、一晚寝たらそんなに肝癪かんしゃくに障らなくなつた。学校へ出てみると、生徒も出ている。何だか訳が分らない。それから三日ばかりは無事であつたが、四日目の晩に住田すみたと云う所へ行つて団子だんごを食つた。この住田と云う所は温泉のある町で城下から汽車だと十分ばかり、歩いて三十分で行かれる、料理屋も温泉宿も、公園もある上に遊廓ゆうかくがある。おれのはいった団子屋は遊廓の入口にあつて、大変うまいという評判だから、温泉に行つた帰りがけにちよつと食つてみた。今度は生徒にも逢わなかつたから、誰も知るまいと思つて、翌日学校へ行つて、一時間目の教場へはいると団子二皿七錢と書いてある。実際おれは二皿食つて七錢払つた。どうも厄介やくがいな奴等だ。二時間目にもきつと何かあると思うと遊廓の団子旨い旨いと書いてある。あきれ返つた奴等だ。団子がそれで済んだと思つたら今度は赤手拭あかてぬぐいと云うのが評判になつた。何の事だと思つたら、つまらない来歴だ。おれはここへ来てから、毎日住田の温泉へ行く事に極めてきいる。ほかの所は何を見ても東京の足元にも及ばないが温泉だけは立派なものだ。せつかく来た者だから毎日はいつてやろうという気で、晩飯前に運動かたがた出掛でかけるところが行くときは必ず西洋手拭の大きな奴をぶら下げて行く。この手拭が湯に染そまつた上へ、赤い縞しまが流れ出したのでちよつと見ると紅色べにいろに見える。

おれはこの手拭を行きも帰りも、汽車に乗つてもあるいても、常にぶら下げている。それで生徒がおれの事を赤手拭赤手拭と云うんだそうだ。どうも狭い土地に住んでるとうるさいものだ。まだある。温泉は三階の新築で上等は浴衣ゆかたをかして、流しをつけて八錢で済む。その上に女が天目てんもくへ茶を載のせて出す。おれはいつでも上等へはいった。すると四十円の月給で毎日上等へはいるのは贅ぜい沢たくだと云い出した。余計なお世話だ。まだある。湯壺ゆづぼは花崗石みかげいしを畳たたみ上げて、十五畳じゅうごじき敷ぐらしいの広さに仕切つてある。大抵は十三四人漬つかつてるがたまには誰も居ない事がある。深さは立つて乳の辺まであるから、運動のために、湯の中を泳ぐのはなかなか愉快だ。おれは人の居ないのを見済みすましては十五畳の湯壺を泳ぎ巡まわつて喜んでいた。ところがある日三階から威勢いせいよく下りて今日も泳げるかなとざくろ口を覗のぞいてみると、大きな札へ黒々と湯の中で泳ぐべからずとかいて貼りつけてある。湯の中で泳ぐものは、あまりあるまいから、この貼札はりふだはおれのために特別に新調したのかも知れない。おれはそれから泳ぐのは断念した。泳ぐのは断念したが、学校へ出てみると、例の通り黒板に湯の中で泳ぐべからずと書いてあるには驚おどろいた。何だか生徒全体がおれ一人を探偵たんていしているように思われた。くさくさした。生徒が何を云つたつて、やろうと思つた事をやめるようなおれではないが、何でこんな狭苦しい鼻の先がつかえるような所へ来たのかと思うと情なくなつた。

それでうちへ帰ると相変らず骨董責である。

## 四

学校には宿直があつて、職員が代る代るこれをつとめる。但し狸と赤シャツは例外である。何でこの兩人が当然の義務を免かれるのかと聞いてみたら、奏任待遇だからと云う。面白くもない。月給はたくさんとする、時間は少ない、それで宿直を逃がれるなんて不公平があるものか。勝手な規則をこしらえて、それが当り前だというような顔をしている。よくまああんなにずうずうしく出来るものだ。これについては大分不平であるが、山嵐の説によると、いくら一人で不平を並べたつて通るものじゃないそうだ。一人だつて二人だつて正しい事なら通りそうなものだ。山嵐は *might is right* という英語を引いて説諭を加えたが、何だか要領を得ないから、聞き返してみたら強者の権利と云う意味だそうだ。強者の権利ぐらいなら昔から知っている。今さら山嵐から講釈をきかなくつてもいい。強者の権利と宿直とは別問題だ。狸や赤シャツが強者だなんて、誰が承知するものか。議論は議論としてこの宿直がいよいよおれの番に廻つて来た。一体疝性だから夜具蒲団などは自分のものへ楽に寝ないと寝たような心

持ちがしない。小供の時から、友達のうちへ泊とまった事はほとんどないくらいだ。友達のうちでさえ厭いやなら学校の宿直はなおさら厭だ。厭だけれども、これが四十円のうちへ籠こもっているなら仕方がない。我慢がまんして勤めてやろう。

教師も生徒も帰ってしまったあとで、一人ぼかんとしているのは随ずい分間ぶんかんが抜ぬけたものだ。宿直部屋は教場の裏手にある寄宿舎の西はずれの一室だ。ちよつとはいってみたが、西日をまともに受けて、苦しくって居たたまれない。田舎いなかだけあって秋がきても、気長に暑いもんだ。生徒の賄まかないを取りよせて晩飯を済ましたが、まずはには恐れ入った。よくあんなものを食って、あれだけに暴れられたもんだ。それで晩飯を急いで四時半に片付けてしまうんだから豪傑ごうけつに違ちがいがない。飯は食ったが、まだ日が暮くれないから寝ねる訳に行かない。ちよつと温泉に行きたくなつた。宿直をして、外へ出るのはいい事だか、悪わるい事だか知らないが、こうつくねんとして重禁錮じゅうきんこ同様な憂目うれめに逢あうのは我慢の出来るもんじゃやない。始めて学校へ来た時当直の人とは聞いたら、ちよつと用達ようたしに出たと小使こかいが答えたのを妙みょうだと思つたが、自分に番まわが廻まわつてみると思い当る。出る方が正しいのだ。おれは小使にちよつと出てくると云つたら、何かご用ごですかと聞くから、用じゃない、温泉へはいるんだと答えて、さつさと出掛でかけた。赤手拭あかてぬぐいは宿へ忘れて来たのが残念だが今日は先方で借りるとしよう。

それからかなりゆるりと、出たりはいったりして、ようやく日暮方ひぐれがたになったから、汽車へ乗って古町こまちの停車場ていしやばまで来て下りた。学校まではこれから四丁だ。訳はないとあるき出すと、向うから狸が来た。狸はこれからこの汽車で温泉へ行こうと云う計画なんだろう。すたすた急ぎ足にやってきましたが、擦れ違すった時おれの顔を見たから、ちよつと挨拶あいさつをした。すると狸はあなたは今日は宿直ではなかつたですかねえと真面目まじめくさつて聞いた。なかつたですかねえもないもんだ。二時間前おれに向つて今夜は始めての宿直ですね。ご苦労さま。と礼を云つたじやないか。校長なんかになるといやに曲りくねつた言葉を使うもんだ。おれは腹が立つたから、ええ宿直です。宿直ですから、これから帰つて泊る事はたしかに泊りますと云い捨てて済ましてあるき出した。堅町たてまちの四つ角までくると今度は山嵐やまあらしに出つ喰くわした。どうも狭せまい所だ。出てあるきさえすれば必ず誰かに逢う。「おい君は宿直じやないか」と聞くから「うん、宿直だ」と答えたら、「宿直が無暗むやみに出てあるくなんて、不都合ふつごうじやないか」と云つた。「ちつとも不都合なもんか、出てあるかない方が不都合だ」と威張いばつてみせた。「君のずぼらにも困るな、校長か教頭に出逢うと面倒めんどうだぜ」と山嵐に似合わない事を云うから「校長にはたつた今逢つた。暑い時には散歩でもしないと宿直も骨でしよう」と校長が、おれの散歩をほめたよ」と云つて、面倒臭くさいから、さつさと学校へ帰つて来た。

それから日はすぐくれる。くれてから二時間ばかりは小使を宿直部屋へ呼んで話をしたが、それも飽きたから、寝られないまでも床へはいろうと思つて、寝巻に着換え、蚊帳を捲くつて、赤い毛布を跳ねのけて、とんと尻持を突いて、仰向けになつた。おれが寝るときにとんと尻持をつくのは小供の時から癖だ。わるい癖だと云つて小川町の下宿に居た時分、二階下に居た法律学校の書生が苦情を持ち込んだ事がある。法律の書生なんてものは弱い癖に、やに口が達者なもので、愚な事を長たらしく述べ立てるから、寝る時にどンドン音がするのはおれの尻がわるいのじゃない。下宿の建築が粗末なんだ。掛合うなら下宿へ掛合えと凹ましてやつた。この宿直部屋は二階じゃないから、いくら、どしんと倒れても構わない。なるべく勢よく倒れないと寝たような心持ちがしない。ああ愉快だと足をうんと延ばすと、何だか両足へ飛び付いた。さらさらして蚤のようでもないからこいつあと驚ろいて、足を二三度毛布の中で振つてみた。するとさらさらと当つたものが、急に殖え出して脛が五六カ所、股が二三カ所、尻の下でぐちゃりと踏み潰したのが一つ、臍の所まで飛び上がったのが一つ——いよいよ驚ろいた。早速起き上つて、毛布をぱつと後ろへ抛ると、蒲団の中から、バツタが五六十飛び出した。正体の知れない時は多少気味が悪るかつたが、バツタと相場が極まつてみたら急に腹が立つた。バツタの癖に人を驚ろかしやがつて、ど

うするか見ると、いきなり括り枕を取って、二三度擲きつけたが、相手が小さ過ぎるから勢よく抛げつける割に利目が無い。仕方がないから、また布団の上へ坐って、煤掃の時に塵を丸めて畳を叩くように、そこから近辺を無暗にたたいた。バツタが驚ろいた上に、枕の勢で飛び上がるものだから、おれの肩だの、頭だの鼻の先だのへくっ付いたり、ぶつかったりする。顔へ付いた奴は枕で叩く訳に行かないから、手で攫んで、一生懸命に擲きつける。忌々しい事に、いくら力を出しても、ぶつかる先が蚊帳だから、ふわりと動くだけで少しも手答がない。バツタは擲きつけられたまま蚊帳へつまっている。死にもどうもしない。ようやくの事に三十分ばかりでバツタは退治した。箒を持って来てバツタの死骸を掃き出した。小使が来て何ですかと云うから、何ですかもあるもんか、バツタを床の中に飼つとく奴がどこの国にある。間拔め。と叱つたら、私は存じませんと弁解をした。存じませんで済むかと箒を椽側へ抛り出したら、小使は恐る恐る箒を担いで帰って行った。

おれは早速寄宿生を三人ばかり総代に呼び出した。すると六人出て来た。六人だらうが十人だらうが構うものか。寝巻のまま腕まくりをして談判を始めた。

「なんでバツタなんか、おれの床の中へ入れた」

「バツタは何ぞな」と真先の一人がいった。やに落ち付いていやがる。この学校じゃ校

長ばかりじゃない、生徒まで曲りくねった言葉を使うんだろう。

「バツタを知らないのか、知らなけりや見せてやろう」と云ったが、生憎掃き出してしまつて一匹も居ない。また小使を呼んで、「さっきのバツタを持つてこい」と云つたら、「もう掃溜へ棄ててしまいました。拾つて参りましたが、拾つて参りましょうか」と聞いた。「うんすぐ拾つて来い」と云うと小使は急いで馳け出したが、やがて半紙の上へ十匹ばかり載せて来て「どうもお気の毒ですが、生憎夜でこれだけしか見当りません。あしたになりましたらもつと拾つて参ります」と云う。小使まで馬鹿だ。おれはバツタの一つを生徒に見せて「バツタたこれだ、大きなずう体をして、バツタを知らないた、何の事だ」と云うと、一番左の方に居た顔の丸い奴が「そりや、イナゴぞな、もし」と生意気におれを遣り込めた。「箆棒め、イナゴもバツタも同じもんだ。第一先生を捕まえてなもした何だ。菜飯は田楽の時より外に食うもんじやない」とあべこべに遣り込めてやったら「なもしと菜飯とは違うぞな、もし」と云つた。いつまで行つてもなもしを使う奴だ。

「イナゴでもバツタでも、何でおれの床の中へ入れたんだ。おれがいつ、バツタを入れてくれと頼んだ」

「誰も入れやせんがな」



「入れないものが、どうして床の中に居るんだ」

「イナゴは温い所が好きじゃけれ、大方一人でおはいりたのじゃある」

「馬鹿あ云え。バツタが一人でおはいりになるなんて——バツタにおはいりになられてたまるもんか。——さあなぜこんないたずらをしたか、云え」

「云えてて、入れんものを説明しようがないがな」

けちな奴等だ。自分で自分のした事が云えないくらいなら、てんでしないがいい。証拠さえ挙がらなければ、しらを切るつもりで凶太く構えていやがる。おれだつて中学に居た時分は少しはいたずらもしたもんだ。しかしだれがしたと聞かれた時に、尻込みをするような卑怯な事はただの一度もなかった。したものはしたので、しないものはいないに極つてる。おれなんぞは、いくら、いたずらをしたって潔白なものだ。嘘を吐いて罰を逃げるくらいなら、始めからいたずらなんかやるものか。いたずらと罰はつきもんだ。罰があるからいたずらも心持ちよく出来る。いたずらだけで罰はご免蒙るなんて下劣な根性がどこの国に流行ると思つてるんだ。金は借りるが、返す事はご免だと云う連中はみんな、こんな奴等が卒業してやる仕事に相違ない。全体中学校へ何しにはいつてるんだ。学校へはいつて、嘘を吐いて、胡魔化して、陰でこせこせ生意気な悪いたずらをして、そうして大きな面で卒業すれば教育を受けたもんだと

癩<sup>かんちが</sup>違<sup>ちが</sup>いをしていやがる。話<sup>わ</sup>せない雑<sup>ぞう</sup>兵<sup>ひょう</sup>だ。

おれはこんな腐<sup>くさ</sup>った了<sup>り</sup>見<sup>ようけん</sup>の奴<sup>やつ</sup>等<sup>ら</sup>と談<sup>だん</sup>判<sup>ぱん</sup>するのは胸<sup>むな</sup>糞<sup>くそ</sup>が悪<sup>わる</sup>いから、「そんなに云<sup>い</sup>われないや、聞<sup>き</sup>かなくつていい。中<sup>ちゅう</sup>学<sup>がく</sup>校<sup>こう</sup>へはいつて、上<sup>じやう</sup>品<sup>ひん</sup>も下<sup>げ</sup>品<sup>ひん</sup>も区<sup>く</sup>別<sup>べつ</sup>が出来<sup>でき</sup>ないのは氣<sup>き</sup>の毒<sup>どく</sup>なものだ」と云<sup>い</sup>つて六<sup>ろく</sup>人<sup>にん</sup>を逐<sup>お</sup>つ放<sup>はな</sup>してやつた。おれは言葉<sup>ことば</sup>や様子<sup>ようす</sup>こそあまり上品<sup>じやうひん</sup>じゃないが、心<sup>こころ</sup>はこいつらよりも遥<sup>はる</sup>かに上<sup>じやう</sup>品<sup>ひん</sup>なつもりだ。六<sup>ろく</sup>人<sup>にん</sup>は悠<sup>ゆう</sup>々<sup>ゆう</sup>と引<sup>ひ</sup>き揚<sup>あ</sup>げた。上<sup>じやう</sup>部<sup>ぶ</sup>だけは教師<sup>きょうし</sup>のおれよりよっぽどえらく見<sup>み</sup>える。実<sup>じつ</sup>は落<sup>お</sup>ち付<sup>け</sup>いているだけなお悪<sup>わる</sup>い。おれには到<sup>と</sup>底<sup>てい</sup>これほどの度<sup>ど</sup>胸<sup>きょう</sup>はない。

それからまた床<sup>とこ</sup>へはいつて横<sup>よこ</sup>になつたら、さっきの騒<sup>そう</sup>動<sup>どう</sup>で蚊<sup>ぶん</sup>帳<sup>じやう</sup>の中<sup>なか</sup>はぶんぶん唸<sup>うな</sup>つている。手<sup>て</sup>燭<sup>しよく</sup>をつけて一<sup>いち</sup>匹<sup>びつ</sup>ずつ焼<sup>や</sup>くなんて面<sup>めん</sup>倒<sup>たう</sup>な事<sup>こと</sup>は出来<sup>でき</sup>ないから、釣<sup>つり</sup>手<sup>て</sup>をはずして、長<sup>なが</sup>く畳<sup>たた</sup>んでおいて部<sup>ぶ</sup>屋<sup>や</sup>の中<sup>なか</sup>で横<sup>よこ</sup>堅<sup>かた</sup>十<sup>じゅう</sup>文<sup>ぶん</sup>字<sup>じ</sup>に振<sup>ふる</sup>つたら、環<sup>かん</sup>が飛<sup>と</sup>んで手<sup>て</sup>の甲<sup>こう</sup>をいやというほど撲<sup>ぶ</sup>つた。三<sup>さん</sup>度<sup>ど</sup>目<sup>め</sup>に床<sup>とこ</sup>へはいつた時<sup>とき</sup>は少<sup>せう</sup>々<sup>じやう</sup>落<sup>お</sup>ち付<sup>け</sup>いたがなかなか寝<sup>ね</sup>られない。時<sup>とき</sup>計<sup>けい</sup>を見ると十<sup>じゅう</sup>時<sup>じ</sup>半<sup>はん</sup>だ。考<sup>こう</sup>えてみると厄<sup>やく</sup>介<sup>けい</sup>な所<sup>ところ</sup>へ来<sup>き</sup>たもんだ。一<sup>いち</sup>体<sup>たい</sup>中<sup>ちゅう</sup>学<sup>がく</sup>の先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>なんて、どこへ行<sup>い</sup>つても、こんなものを相<sup>あ</sup>手<sup>て</sup>にするなら氣<sup>き</sup>の毒<sup>どく</sup>なものだ。よく先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>が品<sup>ひん</sup>切<sup>き</sup>れにならない。よっぽど辛<sup>しん</sup>防<sup>ぼう</sup>強<sup>きやう</sup>い朴<sup>ぼく</sup>念<sup>ねん</sup>仁<sup>じん</sup>がなるんだらう。おれには到<sup>と</sup>底<sup>てい</sup>やり切<sup>き</sup>れない。それと思うと清<sup>きよ</sup>な<sup>な</sup>んてのは見<sup>み</sup>上<sup>あ</sup>げたものだ。教<sup>きやう</sup>育<sup>いく</sup>もない身<sup>み</sup>分<sup>ぶん</sup>もない婆<sup>ば</sup>さんだが、人<sup>にん</sup>間<sup>かん</sup>としてはすこぶる尊<sup>たう</sup>とい。今<sup>いま</sup>まではあんなに世<sup>せ</sup>話<sup>わ</sup>になつて別<sup>べつ</sup>段<sup>だん</sup>難<sup>なん</sup>有<sup>あ</sup>りとも思<sup>おも</sup>わなかつたが、

こうして、一人で遠国へ来てみると、始めてあの親切がわかる。越後の笹飴が食いたければ、わざわざ越後まで買いに行つて食わしてやつても、食わせるだけの価値は充分ある。清はおれの事を欲がなくなつて、真直な気性だと云つて、ほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の方が立派な人間だ。何だか清に逢いたくなつた。

清の事を考えながら、のつそつしていると、突然おれの頭の上で、数で云つたら三四十人もあろうか、二階が落つこちるほどどん、どん、どんと拍子を取つて床板を踏みならす音がした。すると足音に比例した大きな鬨の声が上がつた。おれは何事が持ち上がったのかと驚ろいて飛び起きた。飛び起きる途端に、ははあさっきの意趣返しに生徒があばれるのだなと気がついた。手前のわるい事は悪るかつたと言つてしまわないうちは罪は消えないもんだ。わるい事は、手前達に覚があるだろう。本来なら寝てから後悔してあしたの朝でもあやまりに来るのが本筋だ。たとい、あやまらないうまでとも恐れ入つて、静肅に寝ているべきだ。それを何だこの騒ぎは。寄宿舎を建てて豚でも飼つておきあしまいし。気狂いじみた真似も大抵にするがいい。どうするか見ると、寝巻のまま宿直部屋を飛び出して、楷子段を三股半に二階まで躍り上がった。すると不思議な事に、今まで頭の上で、たしかにどたばた暴れていたのが、急に静まり返つて、人声どころか足音もしなくなつた。これは妙だ。ランプはすでに消してあるから、

暗くてどこに何が居るか判然と分らないが、人氣のあるとないとは様子でも知れる。長く東から西へ貫いた廊下には鼠一匹も隠れていない。廊下のはずれから月がさして、遙か向うが際どく明るい。どうも変だ、おれは小供の時から、よく夢を見る癖があつて、夢中に跳ね起きて、わからぬ寝言を云つて、人に笑われた事がよくある。十六七の時ダイヤモンドを拾つた夢を見た晩なぞは、むくりと立ち上がつて、そばに居た兄に、今のダイヤモンドはどうしたと、非常な勢で尋ねたくらいだ。その時は三日ばかりうち中の笑い草になつて大いに弱つた。ことによると今のも夢かも知れない。しかししたしかにあればたに違いがないがと、廊下の真中で考え込んでいると、月のさしている向うのはずれで、一二三わあと、三四十人の声がかたまつて響いたかと思ふ間もなく、前のように拍子を取つて、一同が床板を踏み鳴らした。それ見る夢じゃないやっぱり事実だ。静かにしろ、夜なかだぞ、とこつちも負けんくらいな声を出して、廊下を向うへ馳け出した。おれの通る路は暗い、ただはずれに見える月あかりが目標だ。おれが馳け出して二間も来たかと思うと、廊下の真中で、堅い大きなものに向脛をぶつけて、あ痛いが頭へひびく間に、身体はすとんと前へ抛り出された。こんな畜生と起き上がつてみたが、馳けられない。気はせくが、足だけは云う事を利かない。じれつたいから、一本足で飛んで来たら、もう足音も人声も静まり返つて、森と

している。いくら人間が卑怯だつて、こんなに卑怯に出来るものじゃない。まるで豚だ。こうなれば隠れている奴を引きずり出して、あやまらせてやるまではひかないぞと、心を極めて寢室しんしつの一つを開けて中を検査しようと思つたが開かない。錠じょうをかけてあるのか、机か何か積んで立て懸かけてあるのか、押おしても、押しても決して開かない。今度は向う合せの北側の室へやを試みた。開かない事はやっぱり同然である。おれが戸を開けて中に居る奴を引つ捕つらまえてやろうと、焦慮いらつてると、また東のはずれで鬨なげの声と足拍子が始まつた。この野郎やろう申し合せて、東西相応じておれを馬鹿にする気だな、とは思つたがさてどうしていいか分らない。正直に白状してしまふが、おれは勇氣のある割合に智慧ちえが足りない。こんな時にはどうしていいかさっぱりわからない。わからないけれども、決して負けるつもりはない。このままに済ましてはおれの顔にかかわる。江戸えどっ子は意気いき地がないと云われるのは残念だ。宿直をして鼻垂はなつたれ小僧こぞうにかかわれて、手のつけようがなくつて、仕方がないから泣き寝入りしたと思われちゃ一生の名折れだ。それでも元は旗本はたもとだ。旗本の元は清和源氏せいわげんじで、多田ただの満仲まんじゆうの後裔こうえいだ。こんな土百姓どひやくしやうとは生まれからして違うんだ。ただ智慧のないうところが惜しいだけだ。どうしていいか分らないのが困るだけだ。困つたつて負けるものか。正直だから、どうしていいか分らないんだ。世の中に正直が勝たないで、外に勝つものがあるか、

考えてみる。今夜中に勝てなければ、あした勝つ。あした勝てなければ、あさつて勝つ。あさつて勝てなければ、下宿から弁当を取り寄せて勝つまでここに居る。おれはこう決心をしたから、廊下の真中へあぐらをかいて夜のあけるのを待っていた。蚊がぶんぶん来たけれども何ともなかった。さつき、ぶつけた向脛を撫でてみると、何だかぬらぬらする。血が出るんだろう。血なんか出たければ勝手に出るがいい。そのうち最前からの疲れが出て、ついうとうと寝てしまった。何だか騒がしいので、眼が覚めた時はえっ糞しまったと飛び上がった。おれの坐つてた右側にある戸が半分あいて、生徒が二人、おれの前に立っている。おれは正気に返って、はつと思ふ途端に、おれの鼻の先にある生徒の足を引つ攫んで、力任せにぐいと引いたら、そいつは、どたりと仰向に倒れた。ざまを見る。残る一人がちよつと狼狽したところを、飛びかかつて、肩を抑えて二三度こびき廻したら、あつげに取られて、眼をばちばちさせた。さあおれの部屋まで来いと引つ立てると、弱虫だと見えて、一も二もなく尾いて来た。夜はとうにあけている。

おれが宿直部屋へ連れてきた奴を詰問し始めると、豚は、打つても擲いても豚だから、ただ知らんがなで、どこまでも通す了見と見えて、けっして白状しない。そのうち一人来る、二人来る、だんだん二階から宿直部屋へ集まってくる。見るとみんな眠

そうに<sup>まごふた</sup>瞼をはらしている。けちな奴等だ。一晩ぐらい寝ないで、そんな面をして男と云われるか。面でも洗って議論に來いと云ってやったが、誰も面を洗いに行かない。おれは五十人あまりを相手に約一時間ばかり<sup>おしもんどう</sup>押問答をしていると、ひよっくり狸がやって來た。あとから聞いたら、小使が学校に騒動がありますって、わざわざ知らせに行つたのだそうだ。これしきの事に、校長を呼ぶなんて意気地がなさ過ぎる。それだから中学校の小使なんぞをしてるんだ。

校長はひと通りおれの説明を聞いた。生徒の<sup>いぐさ</sup>言草もちよつと聞いた。追つて処分するまでは、今まで通り学校へ出る。早く顔を洗って、朝飯を食わないと時間に間に合わないから、早くしろと云つて寄宿生をみんな<sup>ほうめん</sup>放免した。手<sup>てぬ</sup>温るい事だ。おれなら即席に寄宿生をことごとく退校してしまふ。こんな<sup>ゆうちよう</sup>悠長な事をするから生徒が宿直員を馬鹿にするんだ。その上おれに向つて、あなたもさぞご心配でお疲れでしょう、今日はご授業に<sup>およ</sup>及ばんと云うから、おれはこう答えた。「いえ、ちつとも心配じゃありません。こんな事が毎晩あつても、命のある間は心配にやなりません。授業はやりませ、一晩ぐらい寝なくつて、授業が出来ないくらいなら、<sup>ちようだい</sup>頂戴した月給を学校の方へ割戻します」校長は何と思つたものか、しばらくおれの顔を見つめていたが、しかし顔が大分はれていますよと注意した。なるほど何だか少々重たい気がする。その上べた一

面痒い。蚊がよつぽと刺したに相違ない。おれは顔中ぼりぼり搔きながら、顔はいくら膨れたつて、口はたしかにきけますから、授業には差し支えませんと答えた。校長は笑いながら、大分元気ですねと賞めた。実を云うと賞めたんじやあるまい、ひやかしたんだらう。

## 五

君釣りに行きませんかと赤シャツがおれに聞いた。赤シャツは気味の悪いように優しい声を出す男である。まるで男だか女だか分りやしない。男なら男らしい声を出すもんだ。ことに大学卒業生じやないか。物理学校でさえおれくらいな声が出るのに、文学士がこれじや見つともない。

おれはそうですなあと少し進まない返事したら、君釣をした事がありますかと失敬な事を聞く。あんまりないが、子供の時、小梅の釣堀で鮒を三匹釣った事がある。それから神楽坂の毘沙門の縁日で八寸ばかりの鯉を針で引っかけて、しめたと思つたら、ぼちやりと落としてしまったがこれは今考えても惜しいと云つたら、赤シャツは顔を前の方へ突き出してホホホと笑つた。何もそう気取つて笑わなくつても、よさ



そんな者だ。「それじゃ、まだ釣りの味は分らんですな。お望みならちと伝授しましよ  
う」とすこぶる得意である。だれがご伝授をうけるものか。一体釣や猟をする連中は  
みんな不人情な人間ばかりだ。不人情でなくって、殺生をして喜ぶ訳がない。魚だつ  
て、鳥だつて殺されるより生きてる方が楽に極まつてる。釣や猟をしなくっちゃ活計  
がたないなら格別だが、何不足なく暮している上に、生き物を殺さなくっちゃ寝ら  
れないなんて贅沢な話だ。こう思ったが向うは文学士だけに口が達者だから、議論じ  
や叶わないと思つて、だまつた。すると先生このおれを降参させたと疍違ひして、  
早速伝授しましょう。おひまなら、今日どうです、いっしょに行っちゃ。吉川君と二人  
ぎりじゃ、淋しいから、来たまえとしきりに勧める。吉川君というのは画学の教師で  
例の野だいこの事だ。この野だは、どういう見だか、赤シャツのうちへ朝夕出入し  
て、どこへでも随行して行く。まるで同輩じゃない。主従みたようだ。赤シャツの  
行く所なら、野だは必ず行くに極っているんだから、今さら驚ろきもしないが、二人  
で行けば済むところを、なんで無愛想のおれへ口を掛けたんだらう。大方高慢ちきな  
釣道楽で、自分の釣るところをおれに見せびらかすつもりかなんかで誘つたに違いな  
い。そんな事で見せびらかされるおれじゃない。鮪の二匹や三匹釣つたつて、びくと  
もするもんか。おれだつて人間だ、いくら下手だつて糸さえ卸しや、何かかかるだろ

う、ここでおれが行かないと、赤シャツの事だから、下手だから行かないんだ、嫌いだから行かないんじゃないと邪推するに相違ない。おれはこう考えたから、行きましようかと答えた。それから、学校をしまつて、一応うちへ帰つて、支度を整えて、停車場で赤シャツと野だを待ち合せて浜へ行った。船頭は一人で、船は細長い東京辺では見た事もない恰好である。さつきから船中見渡すが釣竿が一本も見えない。釣竿なしで釣が出来るものか、どうする了見だろうと、野だに聞くと、沖釣には竿は用いませぬ、糸だけでけすと鰓を撫でて黒人じみた事を云つた。こう遣り込められるくらいならだまつていればよかつた。

船頭はゆつくりゆつくり漕いでいるが熟練は恐しいもので、見返えると、浜が小さく見えるくらいもう出ている。高柏寺の五重の塔が森の上へ抜け出して針のように尖がつてる。向側を見ると青嶋が浮いている。これは人の住まない島だそうだ。よく見ると石と松ばかりだ。なるほど石と松ばかりじゃ住めっこない。赤シャツは、しきりに眺望していい景色だと云つてる。野だは絶景でげすと云つてる。絶景だか何だか知らないが、いい心持ちには相違ない。ひろびろとした海の上で、潮風に吹かれるのは葉だと思つた。いやに腹が減る。「あの松を見たまえ、幹が真直で、上が傘のように開いてターナーの画にありそうだね」と赤シャツが野だに云うと、野だは「全くターナ

「です。どうもあの曲り具合つたらありませんね。ターナーそっくりですよ」と心得顔である。ターナーとは何の事だか知らないが、聞かないでも困らない事だから黙っていた。舟は島を右に見てぐるりと廻った。波は全くない。これで海だとは受け取りにくいほど平だ。赤シャツのお陰ではなはだ愉快だ。出来る事なら、あの島の上へ上がってみたいと思つたから、あの岩のある所へは舟はつけられないんですかと聞いてみた。つけられん事もないですが、釣をするには、あまり岸じゃいけないですと赤シャツが異議を申し立てた。おれは黙つてた。すると野だがどうです教頭、これからあの島をターナー島と名づけようじゃありませんかと余計な發議をした。赤シャツはそいつは面白い、吾々はこれからそう云おうと賛成した。この吾々のうちにおれもはいつてゐるなら迷惑だ。おれには青嶋でたくさんだ。あの岩の上に、どうです、ラフハエルのマドンナを置いちゃ。いい画が出来ますぜと野だが云うと、マドンナの話はよそうじゃないかホホホと赤シャツが気味の悪い笑い方をした。なに誰も居ないから大丈夫ですと、ちよつとおれの方を見たが、わざと顔をそむけてにやにやと笑つた。おれは何だかやな心持ちがした。マドンナだろうが、小旦那だろうが、おれの関係した事でないから、勝手に立たせるがよかろうが、人に分らない事を言つて分らないから聞いたって構やしませんてえような風をする。下品な仕草だ。これで当人は私

も江戸つ子でげすなどと云つてる。マドンナと云うのは何でも赤シャツの馴染の芸者の渾名か何かには違いないと思つた。なじみの芸者を無人島の松の木の下に立たして眺めていけば世話はない。それを野だが油絵にでもかいて展覧会へ出したらよからう。ここいらがいろいろと船頭は船をとめて、錨を卸した。幾尋あるかねと赤シャツが聞くと、六尋ぐらいだと云う。六尋ぐらいじや鯛はむずかしいなど、赤シャツは糸を海へなげ込んだ。大将鯛を釣る気と見える、豪胆なものだ。野だは、なに教頭のお手際じやかかりますよ。それになぎですからとお世辞を云いながら、これも糸を繰り出して投げ入れる。何だか先に錘のような鉛がぶら下がつてただけだ。浮がない。浮がなくって釣をするのは寒暖計なしで熱度をはかるようなものだ。おれには到底出来ないと見ていると、さあ君もやりたまえ糸はありますかと聞く。糸はあまるほどあるが、浮がありませんと云つたら、浮がなくつちや釣が出来ないのは素人ですよ。こうしてね、糸が水底へついた時分に、船縁の所で人指しゆびで呼吸をはかるんです、食うとすぐ手に答える。——そらきた、と先生急に糸をたぐり始めるから、何かかかつたと思つたら何にもかからない、餌がなくなつてたばかりだ。いい気味だ。教頭、残念な事をしましたね、今のはたしかに大ものに違ひなかつたんですが、どうも教頭のお手際でさえ逃げられちゃ、今日は油断ができませんよ。しかし逃げられても何で

すね。浮と睨めくらをしてる連中よりはましです。ね。ちようど歯どめがなくつちや自転車へ乗れないのと同程度ですからねと野達は妙な事ばかり喋舌る。よっぽど撲りつけてやろうかと思つた。おれだつて人間だ、教頭ひとりで借り切つた海じゃあるまいし。広い所だ。鯉の一匹ぐらい義理にだつて、かかつてくれるだろうと、どぼんと錘と糸を抛り込んでいい加減に指の先であやつつていた。

しばらくすると、何だかぴくぴくと糸にあたるものがある。おれは考えた。こいつは魚に相違ない。生きてるものでなくつちや、こうぴくつく訳がない。しめた、釣れたとぐいぐい手繰り寄せた。おや釣れましたかね、後世恐るべしだと野だがひやかすうち、糸はもう大概手繰り込んでただ五尺ばかりほどしか、水に浸いておらん。船縁から覗いてみたら、金魚のような縞のある魚が糸にくつついて、右左へ濺いながら、手に応じて浮き上がってくる。面白い。水際から上げるとき、ぼちゃりと跳ねたから、おれの顔は潮水だらけになつた。ようやくつらまえて、針をとろうとするがなかなか取れない。捕まえた手はぬるぬるする。大いに気味がわるい。面倒だから糸を振つて胴の間へ擲きつけたら、すぐ死んでしまった。赤シャツと野達は驚ろいて見ている。おれは海の中で手をざぶざぶと洗つて、鼻の先へあてがつてみた。まだ腥臭い。もう懲り懲りだ。何が釣れたつて魚は握りたくない。魚も握られたくなかう。そうそう

糸を捲いてしまった。

一番槍はお手柄だがゴルキじゃ、と野だがまた生意気を云うと、ゴルキと云うと露西亜の文学者みたような名だねと赤シャツが洒落た。そうですね、まるで露西亜の文学者ですねと野だはすぐ賛成しやがる。ゴルキが露西亜の文学者で、丸木が芝の写真師で、米のなる木が命の親だろう。一体この赤シャツはわるい癖だ。誰を捕まえても片仮名の唐人の名を並べたがる。人にはそれぞれ専門があったものだ。おれのような数学の教師にゴルキだか車力だか見当がつくものか、少しは遠慮するがいい。云うならフランクリンの自伝だとかプッシング、ツー、ゼ、フロントだとか、おれでも知ってる名を使うがいい。赤シャツは時々帝国文学とかいう真赤な雑誌を学校へ持って来て難有そうに読んでいる。山嵐に聞いてみたら、赤シャツの片仮名はみんなあの雑誌から出るんだそうだ。帝国文学も罪な雑誌だ。

それから赤シャツと野だは一生懸命に釣っていたが、約一時間ばかりのうちに二人で十五六上げた。可笑しい事に釣れるのも、釣れるのも、みんなゴルキばかりだ。鯛なんて薬にしたくつてもありやしない。今日は露西亜文学の当たりだと赤シャツが野だに話している。あなたの手腕でゴルキなんですから、私なんぞがゴルキなのは仕方がありません。当り前ですなと野だが答えている。船頭に聞くとこの小魚は骨が多く

つて、まずくつて、とても食えないんだそうだ。ただ肥料には出来るそうだ。赤シャツと野だは一生懸命に肥料を釣っているんだ。気の毒の至りだ。おれは一匹で懲りたから、胴の間へ仰向けになつて、さつきから大空を眺めていた。釣をするよりこの方がよっぽど洒落しやれている。

すると二人は小声で何か話し始めた。おれにはよく聞えない、また聞きたくもない。おれは空を見ながら清きよの事を考えている。金があつて、清をつれて、こんな奇麗きれいな所へ遊びに来たらさぞ愉快だろう。いくら景色がよくつても野だなどといつしよじやつまらない。清は歛しむくつや苦茶だらけの婆さんだが、どんな所へ連れて出たつて恥はずかしい心持はしない。野だのようなのは、馬車に乘ろうが、船に乘ろうが、凌雲閣りょううんかくへのろうが、到底寄り付けたものじゃない。おれが教頭で、赤シャツがおれだったら、やつぱりおれにへけつけお世辞を使つて赤シャツを冷ひやかすに違ちがひない。江戸っ子は軽薄けいはくだと言いうがなるほどこんなものが田舎巡いなかまわりをして、私わたしは江戸っ子でげすと繰り返していたら、軽薄は江戸っ子で、江戸っ子は軽薄の事だと田舎者が思うに極まつてる。こんな事を考えていると、何だか二人がくすくす笑い出した。笑い声の間に何か云いうが途切とぎれ途切れでとんと要領を得ない。

「え？ どうだか……」「……全くです……知らないんですから……罪ですね」「まさか

……」「バツタを……本当ですよ」

おれは外の言葉には耳を傾けなかったが、バツタと云う野だの語を聴いた時は、思わずきつとなつた。野だは何のためかバツタと云う言葉だけことさらに力を入れて、明瞭におれの耳にはいるようにして、そのあとをわざとぼかしてしまった。おれは動かないでやはり聞いていた。

「また例の堀田が……」「そうかも知れない……」「天麩羅……ハハハハハ」「……煽動して……」「団子も？」

言葉はかように途切れ途切れであるけれども、バツタだの天麩羅だの、団子だのといふところをもつて推し測ってみると、何でもおれのことについて内所話しをしているに相違ない。話すならもつと大きな声で話すがいい、また内所話をするくらいなら、おれなんか誘わなければいい。いけ好かない連中だ。バツタだろうが雪踏だろうが、非はおれにある事じゃない。校長がひとまずあずけると云つたから、狸の顔にめんじてただ今のところは控えているんだ。野だの癖に入らぬ批評をしやがる。毛筆でもしやぶつて引つ込んでるがいい。おれの事は、遅かれ早かれ、おれ一人で片付けてみせるから、差支えはないが、また例の堀田がとか煽動してとか云う文句が気にかかる。堀田がおれを煽動して騒動を大きくしたと云う意味なのか、あるいは堀田が生徒を煽



動しておれをいじめたと云うのか方角がわからない。青空を見てみると、日の光がだんだん弱つて来て、少しはひやりとする風が吹き出した。線香の烟のような雲が、透き徹る底の上を静かに伸して行つたと思つたら、いつしか底の奥に流れ込んで、うすくもやを掛けたようになった。

もう帰ろうかと赤シャツが思い出したように云うと、ええちようど時分です。今夜はマドンナの君にお逢いですかと野だが云う。赤シャツは馬鹿あ云つちやいけない、間違ひになると、船縁に身を倚たした奴を、少し起き直る。エへへへ大丈夫ですよ。聞いたつて……と野だが振り返つた時、おれは皿のような眼を野だの頭の上へまともに浴びせ掛けてやつた。野だはまぼしそうに引つ繰り返つて、や、こいつは降参だと首を縮めて、頭を搔いた。何という猪口才だろう。

船は静かな海を岸へ漕ぎ戻る。君釣はあまり好きでないと見えますねと赤シャツが聞くから、ええ寝ていて空を見る方がいいですと答えて、吸いかけた巻烟草を海の中へたたき込んだら、ジュと音がして艀の足で掻き分けられた浪の上を揺られながら濼つていった。「君が来たんで生徒も大いに喜んでゐるから、奮発してやってくれたまえ」と今度は釣にはまるで縁故もない事を云い出した。「あんまり喜んでもないでしょう」「いえ、お世辞じゃない。全く喜んでゐるんです、ね、吉川君」「喜んでると

ころじゃない。大騒おおさわぎです」と野だはにやにやと笑った。こいつの云う事は一々癩しやぐに障さわるから妙だ。「しかし君注意しないと、陰吞けんのんですよ」と赤シャツが云うから「どうせ陰吞かげくです。こうなりや陰吞は覚悟かくごです」と云ってやった。実際おれは免職めんしよくになるか、寄宿生をことごとくあやまらせるか、どっちか一つにする了見りやうけんでいた。「そう云っちゃ、取りつきどころもないが——実は僕も教頭として君のためを思うから云うんだが、わるく取っちゃ困る」教頭は全く君に好意を持つてるんですよ。僕も及およばずながら、同じ江戸っ子だから、なるべく長くご在校ざいこうを願ねがって、お互たがひに力ちからになろうと思おもって、これでも蔭かげながら尽力じんりよくしているんですよ」と野だが人間並なまみの事を云った。野だのお世話になるくらいなら首を縊くって死しんじまわあ。

「それでね、生徒は君の来たのを大変歡迎かんげいしているんだが、そこにはいろいろな事情があつてね。君も腹の立つ事もあるだろうが、ここが我慢がまんだと思おもって、辛防しんぼうしてくれたまえ。決して君のためにならないような事はしないから」

「いろいろの事情た、どんな事情です」

「それが少し込み入こまっているんだが、まあだんだん分わりますよ。僕ぼくが話わさないでも自然と分わつて来るです、ね吉川君」

「ええなかなか込み入こってますからね。一朝一夕にや到底分わりません。しかしだんだん

分ります、僕が話さないでも自然と分つて来るです」と野達は赤シャツと同じような事を云う。

「そんな面倒な事情なら聞かなくてもいいんですが、あなたの方から話し出したから伺うんです」

「そりやごもつともだ。こつちで口を切つて、あとをつけないのは無責任ですね。それじゃこれだけの事を云つておきましょう。あなたは失礼ながら、まだ学校を卒業したてで、教師は始めての、経験である。ところが学校というものはなかなか情実のあるもので、そう書生流に淡泊には行かないですからね」

「淡泊に行かなければ、どんな風に行くんです」

「さあ君はそう率直だから、まだ経験に乏しいと云うんですがね……」

「どうせ経験には乏しいはずですよ。履歴書にもかいときましたねが二十三年四ヶ月ですか」

「さ、そこで思わぬ辺から乗ぜられる事があるんです」

「正直にしていれば誰が乗じたつて怖くはないです」

「無論怖くはない、怖くはないが、乗ぜられる。現に君の前任者がやられたんだから、気を付けないといけないと云うんです」

野だが大人おとなしくなつたなと気が付いて、ふり向いて見ると、いつしか艫とこの方で船頭と釣の話をしている。野だが居ないんでよつぽど話しよくなつた。

「僕の前任者が、誰だれに乗ぜられたんです」

「だれと指すと、その人の名譽に關係するから云えない。また判然と証拠しょうこのない事だから云うとこつちの落度になる。とにかく、せつかく君が来たもんだから、ここで失敗しちや僕等ぼくらも君を呼んだ甲斐かいがない。どうか気を付けてくれたまえ」

「気を付けろつたつて、これより気の付けようはありません。わるい事をしなけりや好いんでしよう」

赤シャツはホホホホと笑つた。別段おれは笑われるような事を云つた覚えはない。今日こんにちただ今に至るまでこれでいいと堅かたく信じている。考えてみると世間の大部分の人はわるくなる事を奨励しょうれいしているように思う。わるくならなければ社会に成功はしないものと信じているらしい。たまに正直な純粹じゆんずいな人を見ると、坊ぼつちやんだの小僧こぞうだのと難癖なんせをつけて輕蔑けいべつする。それじゃ小学校や中学校で嘘うそをつくな、正直にしると倫理の先生が教えない方がいい。いっそ思い切つて学校で嘘をつく法とか、人を信じない術とか、人を乗せる策を教授する方が、世のためにも当人のためにもなるだろう。赤シャツがホホホホと笑つたのは、おれの單純なのを笑つたのだ。單純や真率が笑われ

る世の中じゃ仕様がな。清はこんな時に決して笑った事はない。大いに感心して聞いたもんだ。清の方が赤シャツよりよっぽど上等だ。

「無論悪い事をしなければ好いんですが、自分だけ悪い事をしなくっても、人の悪いのが分らなくっちゃ、やっぱりひどい目に逢うでしょう。世の中には磊落らいらくなように油断の出来ないのがありますから……。大分寒くなつた。もう秋ですね、浜の方は霧もやでセピヤ色になつた。いい景色だ。おい、吉川君どうだい、あの浜の景色は……」と大きな声を出して野だを呼んだ。なあるほどこりや奇絶きせつですね。時間があると写生するんだが、惜おしいですね、このままにしておくのはと野だは大いにたたく。

港屋の二階に灯が一つついて、汽車の笛ふえがヒューと鳴るとき、おれの乗っていた舟は磯いその砂へざぐりと、舳へんたいをつき込んで動かなくなつた。お早うお帰りと、かみさんが、浜に立って赤シャツに挨拶あいさつする。おれは船端ふなばたから、やっと掛声かけこえをして磯へ飛び下りた。

野だは大嫌いだ。こんな奴は沢庵石をつけて海の底へ沈めちまう方が日本のためだ。赤シャツは声が気に食わない。あれは持前の声をわざと気取ってあんな優しいように見せてるんだらう。いくら気取ったって、あの面じや駄目だ。惚れるものがあつたつてマドンナぐらいなものだ。しかし教頭だけに野だよりむずかしい事を云う。うちへ帰つて、あいつの申し条を考えてみると一応もつともものようでもある。はつきりとした事は云わないから、見当がつかかねるが、何でも山嵐がよくない奴だから用心しろと云うのらしい。それならそうとはつきり断言するがいい、男らしくもない。そうして、そんな悪い教師なら、早く免職さしたらよからう。教頭なんて文学士の癖に意気地のないもんだ。蔭口をきくのでさえ、公然と名前が云えないくらいな男だから、弱虫に極まつてる。弱虫は親切なものだから、あの赤シャツも女のような親切ものなんだらう。親切は親切、声は声だから、声が気に入らないって、親切を無にしちや筋が違ふ。それにしても世の中は不思議なものだ、虫の好かない奴が親切で、気のあつた友達が悪漢だなんて、人を馬鹿にしている。大方田舎だから万事東京のさかに行くんだらう。物騒な所だ。今に火事が氷つて、石が豆腐になるかも知れない。しかし、あの山嵐が生徒を煽動するなんて、いたずらをしそうもないがな。一番人望のある教師だと云うから、やろうと思つたら大抵の事は出来るかも知れないが、——第一そん

な廻りくどい事をしないで、じかにおれを捕まえて喧嘩を吹き懸けりや手数が省ける訳だ。おれが邪魔になるなら、実はこれこれだ、邪魔だから辞職してくれと云や、よさそうなもんだ。物は相談ずくでどうでもなる。向うの云い条がもつともなら、明日にでも辞職してやる。ここばかり米が出来る訳でもあるまい。どこの果へ行つたつて、のたれ死はしないつもりだ。山嵐もよつぽど話せない奴だな。

ここへ来た時第一番に氷水を奢つたのは山嵐だ。そんな裏表のある奴から、氷水でも奢ってもらつちや、おれの顔に関わる。おれはたった一杯しか飲まなかつたから一錢五厘しか払わしちやない。しかし一錢だろうが五厘だろうが、詐欺師の恩になつては、死ぬまで心持ちがよくない。あした学校へ行つたら、一錢五厘返しておこう。おれは清から三円借りている。その三円は五年経つた今日までまだ返さない。返せないんじゃない。返さないんだ。清は今に返すだろうなどと、かりそめにもおれの懐中をあてにしてはいない。おれも今に返そうなどと他人がましい義理立てはしないつもりだ。こつちがこんな心配をすればするほど清の心を疑ぐるようなもので、清の美しい心にけちを付けると同じ事になる。返さないのは清を踏みつけるのじゃない、清をおれの片破れと思うからだ。清と山嵐とはもとより比べ物にならないが、たとい氷水だろうが、甘茶だろうが、他人から恵を受けて、だまつているのは向うをひとかどの人

間と見立てて、その人間に対する厚意の所作だ。割前を出せばそれだけの事で済むところを、心のうちで難有いと恩に着るのは銭金で買える返礼じゃない。無位無冠でも一人前の独立した人間だ。独立した人間が頭を下げるのは百万両より尊といお礼と思わなければならぬ。

おれはこれでも山嵐に一銭五厘奮発させて、百万両より尊とい返礼をした気でいる。山嵐は難有いと思つてしかるべきだ。それに裏へ廻つて卑劣な振舞をするとは怪しからん野郎だ。あした行つて一銭五厘返してしまえば借りも貸しもない。そうしておいて喧嘩をしてやろう。

おれはここまで考えたら、眠くなつたからぐうぐう寝てしまつた。あくる日は思う仔細があるから、例刻より早や目に出校して山嵐を待ち受けた。ところがなかなか出て来ない。うらなりが出て来る。漢学の先生が出て来る。野だが出て来る。しまいは赤シャツまで出て来たが山嵐の机の上は白墨が一本竪に寝ているだけで閑静なものだ。おれは、控所へはいるや否や返そうと思つて、うちを出る時から、湯銭のように手の平へ入れて一銭五厘、学校まで握つて来た。おれは膏っ手だから、開けてみると一銭五厘が汗をかいてある。汗をかいてる銭を返しちや、山嵐が何とか云うだろうと思つたから、机の上へ置いてふうふう吹いてまた握つた。ところへ赤シャツが来て昨



日は失敬、迷惑めいわくでしたらうと云ったから、迷惑じゃありません、お蔭で腹が減りましたと答えた。すると赤シャツは山嵐の机の上へ肱ひじを突ついて、あの盤ばん台たい面づらをおれの鼻の側面へ持つて来たから、何をするかと思つたら、君昨日返りがけに船の中で話した事は、秘密にしてくれたまえ。まだ誰だれにも話しやしませんと云つた。女のような声を出すだけに心配性な男と見える。話さない事はたしかである。しかしこれから話そうと云う心持ちで、すでに一錢五厘手の平に用意しているくらいだから、ここで赤シャツから口留めをされちや、ちと困る。赤シャツも赤シャツだ。山嵐と名を指さないにしろ、あれほど推察の出来る謎なぞをかけておきながら、今さらその謎を解といてちや迷惑だとは教頭とも思えぬ無責任だ。元来ならおれが山嵐と戦争をはじめて鎬しのぎを削けずつてる真中まんなかへ出て堂々とおれの肩かたを持つべきだ。それでこそ一校の教頭で、赤シャツを着ている主意も立つというもんだ。

おれは教頭に向むかつて、まだ誰にも話さないが、これから山嵐と談判するつもりだと云つたら、赤シャツは大いに狼狽ろうばいして、君そんな無法な事をしちや困る。僕は堀田君の事について、別段君に何も明言した覚えはないんだから——君がもしここで乱暴を働いてくれると、僕は非常に迷惑する。君は学校に騒動そうどうを起すつもりで来たんじゃないやな。かろうと妙みょうに常識をはずれた質問をするから、当り前あたまえです、月給をもらつたり、騒動

を起したりしちや、学校の方でも困るでしようと言つた。すると赤シャツはそれじゃ昨日の事は君の参考だけにとめて、口外してくれるなと汗をかいて依頼に及ぶから、よろしい、僕も困るんだが、そんなにあなたが迷惑ならよしましよと受け合つた。君大丈夫かいと赤シャツは念を押した。どこまで女らしいんだか奥行がわからない。文学士なんて、みんなあんな連中ならつまらんものだ。辻褄の合わない、論理に欠けた注文をして恬然としてゐる。しかもこのおれを疑ぐつてる。憚りながら男だ。受け合つた事を裏へ廻つて反古にするようなさもしい見はもつてるもんか。

ところへ両隣りの机の所有主も出校したんで、赤シャツは早々自分の席へ帰つて行つた。赤シャツは歩く方から気取つてる。部屋の中を往来するのも、音を立てないように靴の底をそつと落とす。音を立てないであるのが自慢になるもんだとは、この時から始めて知つた。泥棒の稽古じやあるまいし、当り前にするがいい。やがて始業の喇叭がなつた。山嵐はとうとう出て来ない。仕方がないから、一銭五厘を机の上へ置いて教場へ出掛けた。

授業の都合で一時間目は少し後れて、控所へ帰つたら、ほかの教師はみんな机を控えて話をしてゐる。山嵐もいつの間にか来てゐる。欠勤だと思つたら遅刻したんだ。おれの顔を見るや否や今日は君のお蔭で遅刻したんだ。罰金を出したまえと云つた。

おれは机の上にあつた一銭五厘を出して、これをやるから取っておけ。先達せんだつて通町とわりちやうで飲んだ氷水の代だと山嵐の前へ置くと、何を云つてるんだと笑いかけたが、おれが存外真面目まじめでいるので、つまらない冗談じやうだんをするなと銭をおれの机の上に掃はき返した。おや山嵐の癖くせにどこまでも奢る気だな。

「冗談じゃない本当だ。おれは君に氷水を奢られる因縁いんえんがないから、出すんだ。取らない法があるか」

「そんなに一銭五厘が気になるなら取つてもいいが、なぜ思い出したように、今時分返すんだ」

「今時分でも、いつ時分でも、返すんだ。奢られるのが、いやだから返すんだ」

山嵐は冷然とおれの顔を見てふんと云つた。赤シャツの依頼がなければ、ここで山嵐の卑劣ひれつをあばいて大喧嘩をしてやるんだが、口外しないと受け合つたんだから動きがとれない。人がこんなに真赤まっかになつてるのにふんという理窟りくつがあるものか。

「氷水の代は受け取るから、下宿は出てくれ」

「一銭五厘受け取ればそれでいい。下宿を出ようが出来いがおれの勝手だ」

「ところが勝手でない、昨日、あすこの亭主ていしゆが来て君に出てもらいたいと云うから、その訳を聞いたら亭主の云うのはもつともだ。それでももう一応たしかめるつもりで

今朝あすこへ寄つて詳しい話を聞いてきたんだ」

おれには山嵐の云う事が何の意味だか分らない。

「亭主が君に何を話したんだか、おれが知ってるもんか。そう自分だけで極めたって仕様があるか。訳があるなら、訳を話すが順だ。てんから亭主の云う方がもつともだなんて失敬千万な事を云うな」

「うん、そんなら云つてやろう。君は乱暴であの下宿で持て余まされてゐるんだ。いくら下宿の女房だつて、下女たあ違うぜ。足を出して拭かせるなんて、威張り過ぎるさ」  
「おれが、いつ下宿の女房に足を拭かせた」

「拭かせたかどうか知らないが、とにかく向うじや、君に困ってるんだ。下宿料の十円や十五円は懸物を一幅売りや、すぐ浮いてくるつて云つてたぜ」

「利いた風な事をぬかす野郎だ。そんなら、なぜ置いた」

「なぜ置いたか、僕は知らん、置くことは置いたんだが、いやになつたんだから、出ると云うんだらう。君出てやれ」

「当り前だ。居てくれと手を合せたつて、居るものか。一体そんな云い懸りを云うような所へ周旋する君からしてが不埒だ」

「おれが不埒か、君が大人しくないんだか、どっちかだらう」

山嵐もおれに劣らぬ肝癪持ちだから、負け嫌いな大きな声を出す。控所に居た連中は何事が始まったかと思つて、みんな、おれと山嵐の方を見て、頤を長くしてぼんやりしている。おれは、別に恥ずかしい事をした覚えはないんだから、立ち上がりながら、部屋中一通り見巡わしてやった。みんなが驚ろいてるなかに野ただけは面白そうに笑っていた。おれの大きな眼が、貴様も喧嘩をするつもりかと云う権幕で、野だの干瓢づらを射貫いた時に、野だけは突然真面目な顔をして、大いにつつしんだ。少し怖わかつたと見える。そのうち喇叭が鳴る。山嵐もおれも喧嘩を中止して教場へ出た。

午後は、先夜おれに対して無礼を働いた寄宿生の処分法についての会議だ。会議というものは生れて始めてだからとんと容子が分らないが、職員が寄つて、たかつて自分勝手な説をたてて、それを校長が好い加減に纏めるのだから。纏めるといふのは黒白の決しかねる事柄について云うべき言葉だ。この場合のような、誰が見たって、不都合としか思われない事件に会議をするのは暇潰しだ。誰が何と解釈したって異説の出ようはずがない。こんな明白なのは即座に校長が処分してしまえばいいに。随分決断のない事だ。校長つてもものが、これならば、何の事はない、煮え切らない愚図の異名だ。

会議室は校長室の隣りにある細長い部屋で、平常は食堂の代理を勤める。黒い皮で張った椅子が二十脚ばかり、長いテーブルの周囲に並んでちよつと神田の西洋料理屋ぐらゐな格だ。そのテーブルの端に校長が坐つて、校長の隣りに赤シャツが構える。あとは勝手次第に席に着くんだけれうだが、体操の教師だけはいつも席末に謙遜するといふ話だ。おれは様子が分らないから、博物館の教師と漢学の教師の間へはいり込んだ。向うを見ると山嵐と野だが並んでる。野だの顔はどう考えても劣等だ。喧嘩はしても山嵐の方が遙かに趣がある。おやじの葬式の時小日向の養源寺の座敷にかかつてた懸物はこの顔によく似ている。坊主に聞いてみたら韋駄天と云う怪物だそう。今日は怒つてるから、眼をぐるぐる廻しちや、時々おれの方を見る。そんな事で威嚇かされてたまるもんかと、おれも負けない気で、やつぱり眼をぐりつかせて、山嵐をにらめてやった。おれの眼は恰好はよくないが、大きい事においては大抵な人には負けない。あなたは眼が大きいから役者になるときつと似合いますと清がよく云つたくらいだ。

もう大抵お揃いでしようかと校長が云うと、書記の川村と云うのが一つ二つと頭数を勘定してみる。一人足りない。一人不足ですがと考えていたが、これは足りないはずだ。唐茄子のうらなり君が来ていない。おれとうらなり君とはどう云う宿世の因縁

かしらないが、この人の顔を見て以来どうしても忘れられない。控所へくれば、すぐ、うらなり君が眼に付く、途中とちゆうをあるいていても、うらなり先生の様子ようしが心に浮うかぶ。温泉へ行くと、うらなり君が時々蒼あおい顔をして湯壺ゆつぽのなかに膨ふくれている。挨拶あいさつをするとへえと恐縮きようしゆくして頭を下げるから気の毒になる。学校へ出てうらなり君ほど大人しい人は居ない。めったに笑った事もないが、余計な口をきいた事もない。おれは君子という言葉を書物の上で知ってるが、これは字引にあるばかりで、生きてるものではないと思つてたが、うらなり君に逢あつてから始めて、やつぱり正体のある文字だと感心したくらいだ。

このくらい関係の深い人の事だから、会議室へはいるや否や、うらなり君の居ないのは、すぐ気がついた。実を云うと、この男の次へでも坐すわろうかと、ひそかに目標めじるしにして来たくらいだ。校長はもうやがて見えるでしょうと、自分の前まへにある紫むらさきの袱紗包ふくさうづみをほどいて、蒔蕪版こんやくばんのような者ものを読よんでいる。赤シャツは琥珀こはくのパイプを絹ハシケチで磨みがき始めた。この男はこれが道楽である。赤シャツ相当のところだろう。ほかの連中は隣り同志で何だか私語せごき合っている。手持無沙汰てもちぶがたなのは鉛筆えんぴつの尻しりに着きている、護謨ゴムの頭でテーブルの上へしきりに何か書かいている。野のだは時々山嵐さんらんに話わしかけるが、山嵐は一向応おうじない。ただうんとかああと云うばかりで、時々怖こわい眼まなこをして、

おれの方を見る。おれも負けずに睨め返す。

ところへ待ちかねた、うらなり君が気の毒そうにはいつて来て少々用事がありました。遅刻致しましたと慇懃に狸に挨拶をした。では会議を開きますと狸はまず書記の川村君に蒔蕪版を配布させる。見ると最初が処分件、次が生徒取締の件、その他二三ヶ条である。狸は例の通りもったいぶって、教育の生霊という見えでこんな意味の事を述べた。「学校の職員や生徒に過失のあるのは、みんな自分の寡徳の致すところで、何か事件がある度に、自分はよくこれで校長が勤まるとひそかに慚愧の念に堪えんが、不幸にして今回もまたかかる騒動を引き起したのは、深く諸君に向って謝罪しなければならん。しかしひとたび起つた以上は仕方がない、どうか処分をせんければならん、事實はすでに諸君のご承知の通りであるからして、善後策について腹藏のない事を参考のためにお述べ下さい」

おれは校長の言葉を聞いて、なるほど校長だの狸だのと云うものは、えらい事を云うもんだと感心した。こう校長が何もかも責任を受けて、自分の咎だとか、不徳だとか云うくらいなら、生徒を処分するのは、やめにして、自分から先へ免職になつたら、よさそうなもんだ。そうすればこんな面倒な会議なんぞを開く必要もなくなる訳だ。第一常識から云つても分つてる。おれが大人しく宿直をする。生徒が乱暴をする。



わるいのは校長でもなけりや、おれでもない、生徒だけに極きまつてる。もし山嵐せんらんが煽動せんどうしたとすれば、生徒と山嵐を退治たいじればそれでたくさんだ。人の尻しりを自分で背負しよい込こんで、おれの尻しりだ、おれの尻しりだと吹き散らかす奴やつが、どこの国にあるもんか、狸ねこでなくつちや出来る芸当げんじやうじゃない。彼かれはこんな条理じょうりに適かなわらない議論ぎろんを吐はいて、得意ていぎに一同を見廻みまわした。ところが誰も口を開くものがない。博物ぶつの教師きょうしは第一教場の屋根やねに鳥からすがとまつてるのを眺ながめている。漢学かんがくの先生せんせいは蒟蒻版こんやくばんを畳たたんだり、延のばしたりしてる。山嵐せんらんはまだおれの顔かほをにらめている。会議かいぎと云うものが、こんな馬鹿ばか気けなものなら、欠席けつせきして昼寝ひるねでもしている方がましだ。

おれは、じれったくなつたから、一番大いに弁じてやろうと思つて、半分尻はんぶんしりをあげかけたら、赤シャツが何か云い出したから、やめにした。見るとパイプをしまつて、縞しまのある絹ハンケチで顔をふきながら、何か云つている。あの手巾はんげちはきつとマドンナから巻き上げたに相違そういない。男おとこは白い麻あさを使うもんだ。「私も寄宿生の乱暴らんぼうを聞いてはなはだ教頭きょうとうとして不行届ふゆきとどきであり、かつ平常の徳化とくけが少年に及ばなかつたのを深く慚はずるのであります。でこう云う事は、何か陥欠かんけつがあると起るもので、事件その物を見るに何なにだか生徒だけがわるいようであるが、その真相しんじやうを極めると責任せきにんはかえつて学校にあるかも知れない。だから表面上ひょうめいじやうにあらわれたところだけで嚴重じゆうじんな制裁さいがいを加えるのは、

かえつて未来のためによくないかとも思われます。かつ少年血気のものであるから活気があふれて、善悪の考えはなく、半ば無意識にこんな悪戯いたずらをやる事はないとも限らん。でもとより処分法は校長のお考えにある事だから、私の容喙ようかいする限りではないが、どうかその辺をご斟酌しんしゃくになつて、なるべく寛大なお取計とりはからいを願いたいと思います」

なるほど狸が狸なら、赤シャツも赤シャツだ。生徒があげれるのは、生徒がわるいんじゃない教師が悪るいんだと公言している。気狂きちがいが人の頭を撲り付けるのは、なぐられた人がわるいから、気狂きちがいがなぐるんだそうだ。難有ありがたい合せだ。活気にみちて困るなら運動場へ出て相撲すもうでも取るがいい、半ば無意識に床の中へバツタを入れられてたまるものか。この様子じゃ寝頸ねくびをかかれても、半ば無意識だつて放免するつもりだろ。

おれはこう考えて何か云おうかなと考えてみたが、云うなら人を驚ろすかように滔々とうとうと述べたてなくつちやつまらない、おれの癖として、腹が立ったときに口をきくと、二言か三言で必ず行き塞つまつてしまふ。狸でも赤シャツでも人物から云うと、おれよりも下等だが、弁舌はなかなか達者だから、まずい事を喋舌しゃべつて揚足あげあしを取られちゃ面白くない。ちよつと腹案を作つてみよう、胸のなかで文章を作つてゐる。すると前に居た野だが突然起立したには驚ろいた。野だの癖に意見を述べるなんて生意気だ。

野だは例のへらへら調で「実に今回のバッタ事件及び咄噓事件は吾々心ある職員をして、ひそかに吾校将来の前途に危惧の念を抱かしむるに足る珍事でありまして、吾々職員たるものはこの際奮つて自ら省りみて、全校の風紀を振粛しなければなりません。それでただ今校長及び教頭のお述べになつたお説は、実に肯綮に中つた剴切なお考えで私は徹頭徹尾賛成致します。どうかなるべく寛大のご処分を仰ぎたいと思ひます」と云つた。野だの云う事は言語はあるが意味がない、漢語をのべつに陳列するぎりで訳が分らない。分つたのは徹頭徹尾賛成致しますと云う言葉だけだ。

おれは野だの云う意味は分らないけれども、何だか非常に腹が立つたから、腹案も出来ないうちに起ち上がつてしまつた。「私は徹頭徹尾反対です……」と云つたがあとが急に出て来ない。「……そんな頓珍漢な、処分は大嫌いです」とつけたら、職員が一同笑い出した。「一体生徒が全然悪るいんです。どうしても詫まらせなくっちゃ、癖になります。退校さしても構いません。……何だ失敬な、新しく来た教師だと思つて……」と云つて着席した。すると右隣りに居る博物が「生徒がわるい事も、わるいが、あまり嚴重な罰などをするとかえつて反動を起していけないでしょう。やつぱり教頭のおつしやる通り、寛な方に賛成します」と弱い事を云つた。左隣の漢学は穩便説に賛成と云つた。歴史も教頭と同説だと云つた。忌々しい、大抵のものは赤シャツ党だ。こ

んな連中が寄り合つて学校を立てていたりや世話はない。おれは生徒をあやまらせるか、辞職するか二つのうち一つに極めてるんだから、もし赤シャツが勝ちを制したら、早速うちへ帰つて荷作りをする覚悟でいた。どうせ、こんな手合を弁口で屈伏させる手際はなし、させたところでもいつまでご交際を願うのは、こつちでご免だ。学校に居ないとすればどうなつたつて構うもんか。また何か云うと笑うに違いない。だれが云うもんかと澄<sup>すま</sup>していた。

すると今までだまつて聞いていた山嵐が奮然として、起ち上がった。野郎また赤シャツ賛成の意を表するな、どうせ、貴様とは喧嘩だ、勝手にしろと見ていると山嵐は硝子窓を振<sup>ふる</sup>わせるような声で「私<sup>わたくし</sup>は教頭及びその他諸君のお説には全然不同意であります。というものはこの事件はどの点から見ても、五十名の寄宿生が新來の教師某氏<sup>ぼうし</sup>を軽侮<sup>けいぶ</sup>してこれを翻弄<sup>ほんろう</sup>しようとした所為<sup>しゆい</sup>とより外<sup>ほか</sup>には認められんのであります。教頭はその原因を教師の人物いかにお求めになるようでありますが失礼ながらそれは失言かと思ひます。某氏が宿直にあたられたのは着後早々の事で、まだ生徒に接せられてから二十日に満たぬ頃<sup>ころ</sup>であります。この短かい二十日間において生徒は君の学問人物を評価し得る余地がないのであります。軽侮されべき至当な理由があつて、軽侮を受けたのなら生徒の行為に斟酌<sup>しんしゃく</sup>を加える理由もありましようが、何らの原因もないの

に新來の先生を愚弄するような輕薄な生徒を寛宥しては学校の威信に関わる事と思ひます。教育の精神は單に學問を授けるばかりではない、高尚な、正直な、武士的な元氣を鼓吹すると同時に、野卑な、輕躁な、暴慢な悪風を掃蕩するにあると思ひます。もし反動が恐しいの、騒動が大きくなるのと姑息な事を云つた日にはこの弊風はいつ矯正出来るか知れません。かかる弊風を杜絶するためにこそ吾々はこの學校に職を奉じているので、これを見逃がすくらいなら始めから教師にならん方がいと思ひます。私は以上の理由で寄宿生一同を嚴罰に処する上に、当該教師の面前において公けに謝罪の意を表せしむるのを至當の所置と心得ます」と云いながら、どんと腰を卸した。一同はだまって何にも言わない。赤シャツはまたパイプを拭き始めた。おれは何だか非常に嬉しかった。おれの云おうと思うところをおれの代りに山嵐がすっかり言つてくれたようなものだ。おれはこう云う單純な人間だから、今までの喧嘩はまるで忘れて、大いに難有いと云う顔をもつて、腰を卸した山嵐の方を見たら、山嵐は一向知らん面をしている。

しばらくして山嵐はまた起立した。「ただ今ちよつと失念して言い落しましたから、申します。当夜の宿直員は宿直中外出して温泉に行かれたようであるが、あれはもつての外の事と考えます。いやしくも自分が一校の留守番を引き受けながら、咎める者

のないのを、幸さいわいに、場所もあろうに温泉などへ入湯にいくなどと云うのは大きな失体である。生徒は生徒として、この点については校長からとくに責任者にご注意あらん事を希望します」

妙な奴だ、ほめたと思つたら、あとからすぐ人の失策をあげている。おれは何の気もなく、前の宿直が出あるいた事を知つて、そんな習慣だと思つて、つい温泉まで行つてしまったんだが、なるほどそう云われてみると、これはおれが悪るかつた。攻撃されても仕方がない。そこでおれはまた起つて「私は正に宿直中に温泉に行きました。これは全くわるい。あやまります」と云つて着席したら、一同がまた笑い出した。おれが何か云いさえすれば笑う。つまり奴等やつらだ。貴様等これほど自分のわるい事を公けにわるかつたと断言出来るか、出来ないから笑うんだらう。

それから校長は、もう大抵ご意見もないようでありますから、よく考えた上で処分しましょうと云つた。ついでだからその結果を云うと、寄宿生は一週間の禁足になつた上に、おれの前へ出て謝罪をした。謝罪をしなければその時辞職して帰るところだつたがなまじい、おれのいう通りになつたのでどうとう大変な事になつてしまつた。それはあとから話すが、校長はこの時会議の引き続きだと号してこんな事を云つた。生徒の風儀ふうぎは、教師の感化で正していかななくてはならん、その一着手として、教師は

なるべく飲食店などに 出入しゅつにゅう しない事にしたい。もつとも送別会などの節は特別であるが、単独にあまり上等でない場所へ行くのはよしたい——たとえば蕎麦屋だの、団子屋だの——と云いかけたらまた一同が笑った。野だが山嵐を見て天麩羅てんぷらと云つて目くばせをしたが山嵐は取り合わなかった。いい気味だ。

おれは脳がわるいから、狸の云うことなんか、よく分らないが、蕎麦屋や団子屋へ行つて、中学の教師が勤まらなくつちや、おれみたような食い心棒しんぼうにや到底出来とらつ子こないと思つた。それなら、それでいいから、初手から蕎麦と団子の嫌いなものと注文して雇やとうがいい。だんまりで辞令を下げておいて、蕎麦を食うな、団子を食うなと罪なお布令ふれを出すのは、おれのような外に道楽のないものにとつては大変な打撃だ。すると赤シャツがまた口を出した。「元来中学の教師などは社会の上流にくらいするものだからして、単に物質的の快樂ばかり求めるべきものでない。その方に耽ふけるとついで品性せいせいにわるい影響えいきやうを及ぼすようになる。しかし人間だから、何か娛樂ごたらくがないと、田舎いなかへ来て狭せまい土地では到底暮くらせるものではない。それで釣つりに行くとか、文学書を読むとか、または新体詩や俳句を作るとか、何でも高尚こうしような精神的娛樂を求めなくつてはいけない……」

だまつて聞いてると勝手な熱を吹く。沖おきへ行つて肥料こやしを釣つつたり、ゴルキが露西亞ロシア

の文学者だったり、馴染なじみの芸者が松まつの木の下に立ったり、古池へ蛙かわずが飛び込んだりするのが精神的娯楽なら、天麩羅を食って団子のを呑み込むのも精神的娯楽だ。そんな下らない娯楽を授けるより赤シャツの洗濯せんたくでもするがいい。あんまり腹が立ったから「マドンナに逢あうのも精神的娯楽ですか」と聞いてやった。すると今度は誰も笑わない。妙な顔をして互たがいに眼と眼を見合せている。赤シャツ自身は苦しそうに下を向いた。それ見ろ。利いたろう。ただ気の毒だったのはうらなり君で、おれが、こう云つたら蒼い顔をますます蒼くした。

## 七

おれは即夜そくや下宿を引き払はらった。宿へ帰って荷物をまとめていると、女房にようぼうが何か不都合ふつごうでもございましたか、お腹の立つ事があるなら、云いっておくれたら改めますと云う。どうも驚おどろく。世の中にはどうして、こんな要領を得ない者ばかり揃そろってるんだらう。出てもraitたいんだか、居てもraitたいんだか分わかりやしない。まるで氣狂ききやうだ。こんな者を相手に喧嘩けんかをしたって江戸えどっ子の名折れだから、車屋をつれて来てさっさと出てきた。



出た事は出たが、どこへ行くというあてもない。車屋が、どちらへ参りますと云うから、だまつて尾ついて来い、今にわかる、と云つて、すたすたやつて来た。面倒めんどうだから山城屋へ行こうかとも考えたが、また出なければならぬから、つまり手数だ。こうして歩いてるうちには下宿とか、何とか看板のあるうちを目付け出すだろう。そうしたら、そこが天意に叶かなったわが宿と云う事にしよう。とぐるぐる、閑静かんせいで住みよきそんな所があるいてるうち、とうとう鍛冶屋町へ出てしまった。ここは土族屋敷やしきで下宿屋などのある町ではないから、もつと賑にぎやかな方へ引き返そうかとも思つたが、ふとい事を考え付いた。おれが敬愛するうらなり君はこの町内に住んでいる。うらなり君は土地の人で先祖代々の屋敷を控ひかえているくらいだから、この辺の事情には通じているに相違さういない。あの人を尋たずねて聞いたら、よさそうな下宿を教えてくださいませんか。幸さいわい一度挨拶あいさつに来て勝手は知つてるから、捜さがしてあるく面倒はない。ここだろうと、いい加減に見当をつけて、ご免めんご免と二返ばかり云うと、奥おくから五十ぐらいな年寄としよりが古風な紙燭しそくをつけて、出て来た。おれは若い女も嫌いではないが、年寄を見ると何だかなつかしい心持ちがする。大方清きよがすきだから、その魂たましいが方々のお婆ばあさんに乗り移るんだらう。これは大方うらなり君のおつ母かさんだらう。切り下げの品格のある婦人だが、よくうらなり君に似ている。まあお上がりと云うところを、ち

よつとお目にかかりたいからと、主人を玄関げんかんまで呼び出して実はこれこれだが君どこか心当りはありませんかと尋ねてみた。うらなり先生それはさぞお困りでございましょう、としばらく考えていたが、この裏町に萩野はぎのと云つて老人夫婦くで暮らしているものがある、いつぞや座敷ざしきを明けておいても無駄むだだから、たしかな人があるなら貸してもいいから周旋しゅうせんしてくれと頼たのんだ事がある。今でも貸すかどうか分らんが、まあいっしょに行つて聞いてみましょうと、親切おんせつに連れて行つてくれた。

その夜から萩野の家の下宿人となつた。驚おどろいたのは、おれがいか銀の座敷を引き払うと、翌日あくるひから入れ違いちがひに野だが平気な顔をして、おれの居た部屋を占領せんりょうした事だ。さすがのおれもこれにはあきれた。世の中はいかさま師ばかりで、お互たがひに乗せつこをしていられるかも知れない。いやになつた。

世間がこんなものなら、おれも負けない気で、世間並せけんなみにしなくちや、遣やりきれない訳になる。巾着切きんちやくきりの上前をはねなければ三度のご膳ぜんが戴いたけないと、事が極きまればこうして、生きてるのも考え物だ。と云つてぴんぴんした達者なからだで、首を縊くつちや先祖へ濟まない上に、外間が悪い。考えると物理学学校などへはいつて、数学なんて役にも立たない芸を覚えるよりも、六百円を資本もといでにして牛乳屋でも始めればよかつた。そうすれば清もおれの傍そばを離はなれずに濟なむし、おれも遠くから婆さんの事を心配しらずに

暮くらされる。いっしよに居るうちは、そうでもなかつたが、こうして田舎いなかへ来てみると清はやっぱり善人だ。あんな気立きだてのいい女は日本中さがして歩いたつてめつたにはない。婆さん、おれの立つときに、少々風邪かぜを引いていたが今頃いまごろはどうしてるか知らん。先だつての手紙を見たらさぞ喜んだらう。それにしても、もう返事がききそうなものだ——おれはこんな事ばかり考えて二三日暮くらしていた。

気になるから、宿のお婆さんに、東京から手紙は来ませんかと時々尋ねてみるが、聞きたんびに何にも参りませんと気の毒なような顔をする。ここの夫婦はいか銀とは違つて、もとが士族だけに双方共上品だ。爺じいさんが夜よになると、変な声を出して謡うたいをうたうには閉口するが、いか銀のようにお茶を入れましようと思暗むやみに出て来ないから大きに樂だ。お婆さんは時々部屋へ来ていろいろ話をする。どうして奥さんをお連れなさつて、いっしよにお出いでなんだのぞなもしなどと質問をする。奥さんがあるように見えますかね。可哀想かわいそうにこれでもまだ二十四ですぜと云つたらそれでも、あなた二十四で奥さんお婆さんがおりなされるのは当り前あたりぞなもしと冒頭ぼうとうを置いて、どこの誰だれさんは二十でお嫁よめをお貰もらいたの、どこの何とかさんは二十二で子供を二人お持ちたのと、何でも例を半ダースばかり挙げて反駁はんぱくを試みたには恐れ入おそった。それじゃ僕ぼくも二十四でお嫁をお貰もらいるけれ、世話をしておくれんかなと田舎言葉を真似まねて頼んでみたら、お

婆さん正直に本当かなもしと聞いた。

「本当の本当のほんまのつて僕あ、嫁が貰いたくつて仕方がないんだ」

「そうじゃろうがな、もし。若いうちは誰もそんなものじゃけれ」この挨拶あいさつには痛み入つて返事が出来なかつた。

「しかし先生はもう、お嫁がおありなさるに極きまつとらい。私はちゃんと、もう、睨ねらんどるぞなもし」

「へえ、活眼かつがんだね。どうして、睨ねらんどるんですか」

「どうしてて。東京から便りはないか、便りはないかて、毎日便りを待ち焦こがれておいでるじゃないかなもし」

「こいつあ驚おどろいた。大変な活眼だ」

「中あたりましたろうがな、もし」

「そうですね。中あたったかも知れせんよ」

「しかし今時の女子おなごは、昔むかしと違ちがうて油断が出来んけれ、お気をお付けたがええぞなもし」

「何ですかい、僕の奥さんが東京で間男でもこしらえていますか」

「いいえ、あなたの奥さんはたしかじゃけれど……」

「それで、やっと安心した。それじゃ何を気を付けるんですい」

「あなたのはたしか——あなたのはたしかじゃが——」

「どこに不たしかなのが居ますかね」

「ここ等にも大分居ります。先生、あの遠山のお嬢さんをご存知かなもし」

「いいえ、知りませんね」

「まだご存知ないかなもし。ここらであなた一番の別嬪さんじゃがなもし。あまり別嬪さんじゃけれ、学校の先生方はみんなマドンナマドンナと言うといでるぞなもし。ただお聞きんのかなもし」

「うん、マドンナですか。僕あ芸者の名かと思つた」

「いいえ、あなた。マドンナと云うと唐人の言葉で、別嬪さんの事じゃろうがなもし」

「そうかも知れないね。驚いた」

「大方画学の先生がお付けた名ぞなもし」

「野だがつけたんですかい」

「いいえ、あの吉川先生がお付けたのじゃがなもし」

「そのマドンナが不たしかなんですかい」

「そのマドンナさんが不たしかなマドンナさんでな、もし」

「厄介だね。渾名の付いてる女にや昔から碌なものは居ませんからね。そうかも知れませんよ」

「ほん当にそうじゃなもし。鬼神のお松じゃの、姫妃のお百じゃのてて怖い女が居りましたなもし」

「マドンナもその同類なんですかね」

「そのマドンナさんがなもし、あなた。そらあの、あなたをここへ世話をしておくれた古賀先生なもし——あの方の所へお嫁に行く約束が出来ていたのじゃがなもし——」

「へえ、不思議なもんですね。あのうらなり君が、そんな艶福のある男とは思わなかった。人は見懸けによらない者だな。ちつと気を付けよう」

「ところが、去年あすこのお父さんが、お亡くなりて、——それまではお金もあるし、銀行の株も持ってお出るし、万事都合がよかったのじゃが——それからというものは、どういうものか急に暮し向きが思わしくなくなつて——つまり古賀さんがあまりお人が好過ぎるけれ、お欺されたんぞなもし。それや、これやでお興入も延びているところへ、あの教頭さんがお出でて、是非お嫁にほしいとお云いるのじゃがなもし」

「あの赤シャツがですか。ひどい奴だ。どうもあのシャツはただのシャツじゃないと思つてた。それから？」

「人を頼んで懸合かけあうておみると、遠山さんでも古賀さんに義理があるから、すぐには返事は出来かねて——まあよう考えてみようぐらいの挨拶あいさつをおしたのじゃがなもし。すると赤シャツさんが、手蔓てづるを求めて遠山さんの方へ出入でいりをおしるようになって、とうとうあなた、お嬢さんを手馴てな付けておしまいたのじゃがなもし。赤シャツさんも赤シャツさんじゃが、お嬢さんもお嬢さんじゃやてて、みんなが悪わるく云いいますのよ。いったん古賀さんへ嫁よめに行くてて承知ちやうちをしときながら、今さら学士がくしさんが出いたけれ、その方に替かえよてて、それじゃ今日こんにち様へ済すままいがなもし、あなた」

「全く済すままないね。今日こんにち様どころか明日あした様にも明後日あした様にも、いつまで行いったつて済すまみっこありませんね」

「それで古賀さんにお気の毒あつたじゃやてて、お友達の堀田ほったさんが教頭きやうとうの所へ意見をしにお行きたら、赤シャツさんが、あしは約束のあるものを横取りするつもりはない。破約ややくになれば貰もらうかも知れんが、今のところは遠山さんとただ交際かうさいをしているばかりじゃ、遠山家と交際かうさいをするには別段古賀さんに済すままん事もなからうとお云いいるけれ、堀田さんほりたさんも仕方がなしにお戻もどりたそうな。赤シャツさんと堀田ほりたさんは、それ以来折合おりあがわるいという評判へいぱんぞなもし」

「よくいろいろな事を知ってますね。どうして、そんな詳くわしい事が分わるんですか。感心かんしん

「しちまつた」

「狭いけれども分りますぞなもし」

分り過ぎて困るくらいだ。この容子じやおれの天麩羅や団子の事も知ってるかも知れない。厄介な所だ。しかしお蔭様でマドンナの意味もわかるし、山嵐と赤シャツの関係もわかるし大いに後学になった。ただ困るのはどっちが悪る者だか判然しない。おれのような単純なものには白とか黒とか片づけてもらわないと、どっちへ味方をしているか分らない。

「赤シャツと山嵐たあ、どっちがいい人ですかね」

「山嵐て何ぞなもし」

「山嵐というのは堀田の事ですよ」

「そりや強い事は堀田さんの方が強そうじゃけれど、しかし赤シャツさんは学士さんじゃけれ、働きはある方ぞな、もし。それから優しい事も赤シャツさんの方が優しいが、生徒の評判は堀田さんの方がえええというぞなもし」

「つまりどっちがいいんですかね」

「つまり月給の多い方が豪いのがなもし」

これじゃ聞いたって仕方がないから、やめにした。それから二三日して学校から帰



るとお婆さんがにこにこして、へえお待遠さま。やつと参りました。と一本の手紙を持って来てゆつくりご覧と云って出て行つた。取り上げてみると清からの便りだ。符箋が二三枚ついてるから、よく調べると、山城屋から、いか銀の方へ廻して、いか銀から、萩野へ廻つて来たのである。その上山城屋では一週間ばかり逗留している。宿屋だけに手紙まで泊るつもりなんだろう。開いてみると、非常に長いもんだ。坊っちゃんの手紙を頂いてから、すぐ返事をかこうと思つたが、あいにく風邪を引いて一週間ばかり寝ていたものだから、つい遅くなつて済まない。その上今時のお嬢さんのように読み書きが達者でないものだから、こんなまずい字でも、かくのによつぽど骨が折れる。甥に代筆を頼もうと思つたが、せつかくあげるのに自分でかかなくっちゃ、坊っちゃんに済まないと思つて、わざわざ下たがきを一返して、それから清書をした。清書するには二日で済んだが、下た書きをするには四日かかった。読みにくいかも知れないが、これでも一生懸命にかいたのだから、どうぞしまいまで読んでくれ。という冒頭で四尺ばかり何やらかやら認めてある。なるほど読みにくい。字がまずいばかりではない、大抵平仮名だから、どこで切れて、どこで始まるのだから句読をつけるのによつぽど骨が折れる。おれは焦つ勝ちな性分だから、こんな長くて、分りにくい手紙は、五円やるから読んでくれと頼まれても断わるのだが、この時ばかりは真面目

になつて、始はじめから終しまひまで読み通した。読み通した事は事実だが、読む方に骨が折れて、意味がつながらないから、また頭から読み直してみた。部屋へやのなかは少し暗くなつて、前の時より見にくく、なつたから、とうとう椽えんばな鼻なへ出て腰こしをかけながら鄭てい寧ねいに拝見した。すると初秋はつあきの風が芭蕉ばしやうの葉を動かして、素肌すはだに吹ふきつけた帰りに、読みかけた手紙を庭の方へなびかしたから、しまいぎわには四尺あまりの半切れがさりさらりと鳴つて、手を放すと、向むこうの生垣まで飛んで行きそうだ。おれはそんな事には構かまつていられない。坊ぼくつちやんは竹を割つたような気性だが、ただ肝癩かんしやくが強過ぎてそれが心配になる。——ほかの人に無暗むふみに渾名あだななんか、つけるのは人に恨うらまれるものになるから、やたらに使つかつちやいけない、もしつけたら、清きよだけに手紙で知らせろ。——田舎者は人がわるいそうだから、気をつけてひどい目に遭あわないようにしろ。——気候きこうだつて東京より不順ふじゆんに極きよくつてるから、寝冷ねひえをして風邪を引いてはいけない。坊ぼくつちやんの手紙はあまり短過ぎて、容子がよくわからないから、この次にはせめてこの手紙の半分ぐらいの長さを書いてくれ。——宿屋へ茶代を五円やるのはいいが、あとで困りやしないか、田舎へ行つて頼たよりになるはお金ばかりだから、なるべく儉約けんやくして、万一の時に差支さしつかえないようにしなくつちやいけない。——お小遣こづかいがなくて困るかも知れないから、為替かわせで十円あげる。——先せんだつて坊ぼくつちやんからもらつた五十円を、坊

っちゃんが、東京へ帰って、うちを持つ時の足しにと思つて、郵便局へ預けておいたが、この十円を引いてもまだ四十円あるから大丈夫だ。——なるほど女と云うものは細かいものだ。

おれが椽鼻で清の手紙をひらつかせながら、考え込んでみると、しきりの襖ふすまをあけて、萩野のお婆さんが晚めしを持ってきた。まだ見てお出いでるのかなもし。えっほど長いお手紙じゃなもし、と云つたから、ええ大事な手紙だから風に吹かしては見、吹かしては見ると、自分でも要領を得ない返事をして膳ぜんについた。見ると今夜も薩摩芋さつまいもの煮につけた。このうちは、いか銀ぎんよりも鄭寧ていねいで、親切で、しかも上品だが、惜おしい事に食くい物がままずい。昨日も芋、一昨日も芋で今夜も芋だ。おれは芋は大好きだと明言したには相違ないが、こう立てつづけに芋を食くわされては命がつづかない。うらなり君を笑うどころか、おれ自身が遠からぬうちに、芋のうらなり先生になつちまう。清ならこんな時に、おれの好きな鮪まぐろのさし身か、蒲鉾かまぼこのつけ焼を食くわせるんだが、貧乏士族びんぼうしゆくのけちん坊ぼうと来ちや仕方がない。どう考えても清といっしよでなくつちあ駄目だめだ。もしあの学校に長くても居る模様なら、東京から召よび寄よせてやろう。天麩羅てんぷら蕎麦そばを食くつちやならない、団子を食くつちやならない、それで下宿げしゆくに居て芋ばかり食くつて黄色くなつていろなんて、教育者はつらいものだ。禅宗坊主ぜんしゆくだつて、これよりは

口に榮耀えいようをさせているだろう。——おれは一皿の芋を平げて、机の抽斗ひきだしから生卵を二つ出して、茶碗ちやわんの縁ふちでたたき割って、ようやく凌しのいだ。生卵でも營養をとらなくちあ一週二十一時間の授業が出来るものか。

今日は清の手紙で湯に行く時間が遅くなった。しかし毎日行きつけたのを一日でも欠かすのは心持ちがわるい。汽車にでも乗って出懸でかけようと、例の赤手拭あかてぬぐいをぶら下げて停車場ていしやばまで来ると二三分前に発車したばかりで、少々待たなければならぬ。ベンチへ腰を懸けて、敷島しきしまを吹かしていると、偶然ぐうぜんにもうらなり君がやって来た。おれはさっきの話を聞いてから、うらなり君がなおさら気の毒になった。平常ふだんから天地の間に居候いそちゆうをしているように、小さく構えているのがいかにも憐れあわれに見えたが、今夜は憐れどころの騒さわぎではない。出来るならば月給を倍にして、遠山のお嬢さんと明日あしたから結婚けつこんさせて、一ヶ月ばかり東京へでも遊びにやってやりたい気がした矢先だから、やお湯ですか、さあ、こっちへお懸かけなさいと威勢いせいよく席を譲ゆずると、うらなり君は恐れ入った体裁で、いえ構かうておくれなさるな、と遠慮えんりよだか何だかやつぱり立ってる。少し待たなくちや出ません、草臥くたびれますからお懸かけなさいとまた勧めてみた。実はどうかして、そばへ懸かけてもらいたかったくらいに気の毒でたまらない。それではお邪魔じやまを致いたしましょうとようやくおれの云う事を聞いてくれた。世の中には野だみたように生

意気な、出ないで済む所へ必ず顔を出す奴もいる。山嵐のようにおれが居なくっちゃ日本にっぽんが困るだろうと云うような面を肩かたの上へ載せてる奴もいる。そうかと思うと、赤シャツのようにコスメチックと色男の間屋をもつて自ら任じているのもある。教育が生きてフロックコートを着ればおれになるんだと云わぬばかりの狸たぬきもいる。皆々みなみなそれ相応に威張ってるんだが、このうらなり先生のように在れどもなきがごとく、人質に取られた人形のように大人おとなしくしているのは見た事がない。顔はふくれているが、こんな結構な男を捨てて赤シャツに靡なびくなんて、マドンナもよつぽど気の知れないおきやんだ。赤シャツが何ダース寄ったって、これほど立派な旦那だんなさま様が出来るもんか。「あなたはどつか悪いんじゃないやありませんか。大分たいぎそうに見えますが……」「いえ、別段これという持病もないですが……」

「そりや結構です。からだが悪いと人間も駄目ですな」

「あなたは大分じょうぶご丈夫じょうぶのようですな」

「ええ瘠やせても病気はしません。病気なんてものあ大嫌いですから」

うらなり君は、おれの言葉を聞いてにやにやと笑った。

ところへ入口で若々しい女の笑声が聞きえたから、何心なく振り返ふってみるとえらい奴が来た。色の白い、ハイカラ頭の、背の高い美人と、四十五六の奥おくさんとが並ならんで

切符きっぷを売る窓の前に立っている。おれは美人の形容などが出来る男でないから何にも云えないが全く美人に相違ない。何だか水晶すしようの珠たまを香水こうすいで暖あつためて、掌てのひらへ握にぎつてみたような心持ちがした。年寄の方が背は低い。しかし顔はよく似ているから親子だろう。おれは、や、来たなと思う途端とたんに、うらなり君の事は全然すつかり忘れて、若い女の方ばかり見ていた。すると、うらなり君が突然とつぜんおれの隣となりから、立ち上がって、そろそろ女の方へ歩き出したんで、少し驚いた。マドンナじゃないかと思った。三人は切符所の前で軽く挨拶している。遠いから何を云つてるのか分らない。

停車場の時計を見るともう五分で発車だ。早く汽車がくればいいがなと、話し相手が居なくなつたので待ち遠しく思っていると、また一人あわてて場内へ馳かけ込んで来たものがある。見れば赤シャツだ。何だかべらべら然たる着物へ縮緬ちりめんの帯おびをだらしく巻き付けて、例の通り金鎖きんぐさりをぶらつかしている。あの金鎖りは贗物にせものである。赤シャツは誰だれも知るまいと思つて、見せびらかしているが、おれはちやんと知つてる。赤シャツは馳かけ込んだなり、何かきよろきよろしていたが、切符売下所うりさげじよの前に話している三人へ慇懃いんぎんにお辞儀じぎをして、何か二こと、三こと、云つたと思つたら、急にこつちへ向いて、例のごとく猫足ねこあしにあるいて来て、や君も湯ですか、僕は乗り後れやしないかと思つて心配して急いで来たら、まだ三四分ある。あの時計はたしかかしらんと、

自分の金側を出して、二分ほどちがつてると云いながら、おれの傍へ腰を卸した。女の方はちつとも見返らないで杖の上に顔をのせて、正面ばかり眺めている。年寄の婦人は時々赤シャツを見るが、若い方は横を向いたままである。いよいよマドンナに違いない。

やがて、ピューと汽笛が鳴って、車がつく。待ち合せた連中はぞろぞろ吾れ勝りに乗り込む。赤シャツはいの一号に上等へ飛び込んだ。上等へ乗ったって威張れるどころではない、住田まで上等が五銭で下等が三銭だから、わずか二銭違いで上下の区別がつく。こういうおれでさえ上等を奮発して白切符を握つてゐるんでもわかる。もつとも田舎者はけちだから、たった二銭の出入でもすこぶる苦になると見えて、大抵は下等へ乗る。赤シャツのあとからマドンナとマドンナのお袋が上等へはいり込んだ。うらなり君は活版で押したように下等ばかりへ乗る男だ。先生、下等の車室の入口へ立つて、何だか躊躇の体であったが、おれの顔を見るや否や思いきって、飛び込んでしまった。おれはこの時何となく気の毒でたまらなかつたから、うらなり君のあとから、すぐ同じ車室へ乗り込んだ。上等の切符で下等へ乗るに不都合はなからう。温泉へ着いて、三階から、浴衣のなりで湯衣へ下りてみたら、またうらなり君に逢った。おれは会議や何かでいざと極まると、咽喉が塞がって饒舌れない男だが、平常

は随分弁ずる方だから、いろいろ湯壺のなかでうらなり君に話しかけてみた。何だか  
 憐れぼくつてたまらない。こんな時に一口でも先方の心を慰めてやるのは、江戸っ子  
 の義務だと思つてる。ところがあいにくうらなり君の方では、うまい具合にこつちの  
 調子に乗つてくれない。何を云つても、えとかいえとかぎりで、しかもそのえといえ  
 が大分面倒らしいので、しまいにはとうとう切り上げて、こつちからご免蒙つた。

湯の中では赤シャツに逢わなかつた。もつとも風呂の数はたくさんあるのだから、  
 同じ汽車で着いても、同じ湯壺で逢うとは極まつていない。別段不思議にも思わなかつた。  
 風呂を出てみるといい月だ。町内の両側に柳が植つて、柳の枝が丸るい影を往  
 来の中へ落している。少し散歩でもしよう。北へ登つて町のはずれへ出ると、左に大  
 きな門があつて、門の突き当りがお寺で、左右が妓楼である。山門のなかに遊廓があ  
 るなんて、前代未聞の現象だ。ちよつとはいつてみたいが、また狸から会議の時にや  
 られるかも知れないから、やめて素通りにした。門の並びに黒い暖簾をかけた、小さ  
 な格子窓の平屋はおれが団子を食つて、しくじつた所だ。丸提灯に汁粉、お雑煮とか  
 いたのがぶらさがつて、提灯の火が、軒端に近い一本の柳の幹を照らしている。食  
 いたなと思つたが我慢して通り過ぎた。

食いたい団子の食えないのは情ない。しかし自分の許嫁が他人に心移したのは、



なお情ないだろう。うらなり君の事を思うと、団子は愚か、三日ぐらい断食しても不平はこぼせない訳だ。本当に人間ほどあてにならないものはない。あの顔を見ると、どうしたって、そんな不人情な事をしそうには思えないんだが——うつくしい人が不人情で、冬瓜の水膨れのような古賀さんが善良な君子なのだから、油断が出来ない。淡泊だと思つた山嵐は生徒を煽動したと云うし。生徒を煽動したのかと思つと、生徒の処分を校長に逼るし。厭味で練りかためたような赤シャツが存外親切で、おれに余所ながら注意をしてくれるかと思つと、マドンナを胡魔化したり、胡魔化したのかと思つと、古賀の方が破談にならなければ結婚は望まないだと云うし。いか銀が難癖をつけて、おれを追い出すかと思つと、すぐ野だ公が入れ替つたり——どう考えてもあてにならない。こんな事を清にかいてやつたら定めて驚く事だろう。箱根の向うだから化物が寄り合つてるんだと云うかも知れない。

おれは、性来構わない性分だから、どんな事でも苦にしないで今日まで凌いで来たのだが、ここへ来てからまだ一ヶ月立つか、立たないうちに、急に世のなかを物騒に思い出した。別段際だつた大事件にも出逢わないのに、もう五つ六つ年を取つたような気がする。早く切り上げて東京へ帰るのが一番よからう。などとそれからそれへ考へて、いつか石橋を渡つて野芹川の堤へ出た。川と云うとえらそうだが実は一間ぐら

いな、ちよろちよろした流れで、土手に沿うて十二丁ほど下ると相生村へ出る。村には観音様がある。

温泉の町を振り返ると、赤い灯が、月の光の中にかがやいている。太鼓が鳴るのは遊廓に相違ない。川の流れは浅いけれども早いから、神経質の水のようにやたらに光る。ぶらぶら土手の上をあるきながら、約三丁も来たと思つたら、向うに人影が見え出した。月に透かしてみると影は二つある。温泉へ来て村へ帰る若い衆かも知れない。それにしては唄もうたわない。存外静かだ。

だんだん歩いて行くと、おれの方が早足だと見えて、二つの影法師が、次第に大きくなる。一人は女らしい。おれの足音を聞きつけて、十間ぐらいの距離に逼つた時、男がたちまち振り向いた。月は後からさしている。その時おれは男の様子を見て、はてなと思つた。男と女はまた元の通りにあるき出した。おれは考えがあるから、急に全速力で追つ懸けた。先方は何の気もつかずに最初の通り、ゆるゆる歩を移している。今は話し声も手に取るように聞える。土手の幅は六尺ぐらいだから、並んで行けば三人がようやくくだ。おれは苦もなく後ろから追い付いて、男の袖を擦り抜けざま、二足前へ出した踵をぐるりと返して男の顔を覗き込んだ。月は正面からおれの五分刈の頭から額の辺りまで、会釈もなく照す。男はあつと小声に云つたが、急に横を向いて、

もう帰ろうと女を促うながすが早い、温泉ゆの町の方へ引き返した。

赤シャツは図太くて胡魔化すつもりか、気が弱くて名乗り損そくなつたのかしら。ところが狭くて困こつてるのは、おればかりではなかつた。

## 八

赤シャツに勧められて釣つりに行つた帰りから、山嵐やまのつしを疑うぐり出した。無い事を種こに下宿を出ると云われた時は、いよいよ不埒ふちやちな奴やつだと思つた。ところが会議の席では案に相違そういして滔々とうとうと生徒厳罰論げんばつろんを述べたから、おや変へだなと首ひねを振ひつた。萩野はぎのの婆ばあさんから、山嵐が、うらなり君のために赤シャツと談判をしたと聞いた時は、それは感心だと手を拍うつた。この様子ではわる者は山嵐じゃあるまい、赤シャツの方が曲まつてるんで、好加減いいかげんな邪推じゃすいを實まことしやかに、しかも遠廻とおまわしに、おれの頭の中へ浸しみ込こましたのではあるまいかと迷まよつてる矢先へ、野芹川のせりがわの土手で、マドンナを連れて散歩なんかしている姿わざを見たから、それ以来赤シャツは曲者くせものだと極きめてしまった。曲者くせものだか何なにだかよくは分わからないが、ともかくも善いい男おとこじゃない。表うらと裏うらとは違ちがつた男おとこだ。人間は竹たけのよように真直まっすぐでなくつちや頼たのもしくない。真直まっすぐなものは喧嘩けんかをしても心持こころがいい。赤シ

ヤツのようなやさしいのと、親切なのと、高尚なのと、琥珀のパイプとを自慢そうに見せびらかすのは油断が出来ない、めったに喧嘩も出来ないと思った。喧嘩をしても、回向院の相撲のような心持ちのいい喧嘩は出来ないと思った。そうなると一銭五厘の出入で控所全体を驚ろかした議論の相手の山嵐の方がはるかに人間らしい。会議の時に金壺眼をぐりつかせて、おれを睨めた時は憎い奴だと思ったが、あとで考えると、それも赤シャツのねちねちした猫撫声よりはました。実はあの会議が済んだあとで、よっぽど仲直りをしようかと思つて、一こと二こと話しかけてみたが、野郎返事もしないで、まだ眼を剥つてみせたから、こつちも腹が立つてそのままにしておいた。

それ以来山嵐はおれと口を利かない。机の上へ返した一銭五厘はいまだに机の上に乗っている。ほこりだらけになつて乗っている。おれは無論手が出せない、山嵐は決して持つて帰らない。この一銭五厘が二人の間の障壁になつて、おれは話そうと思つても話せない、山嵐は頑として黙つてる。おれと山嵐には一銭五厘が祟つた。しまいには学校へ出て一銭五厘を見るのが苦になつた。

山嵐とおれが絶交の姿となつたに引き易えて、赤シャツとおれは依然として在来の關係を保つて、交際をつづけている。野芹川で逢つた翌日などは、学校へ出ると第一番におれの傍へ来て、君今度の下宿はいいですかのまたいっしょに露西亞文学を釣

に行こうじゃないかのと、いろいろな事を話しかけた。おれは少々憎らしかつたから、昨夜は二返逢いましたねと云つたら、ええ停車場で——君はいつでもあの時分出掛けるので、遅いじゃないかと云う。野芹川の土手でもお目に懸りましたねと喰らわしてやったら、いいえ僕はあつちへは行かない、湯にはいつて、すぐ帰つたと答えた。何もそんなに隠さないでもよからう、現に逢つてるんだ。よく嘘をつく男だ。これで中学の教頭が勤まるなら、おれなんか大学総長がつとまる。おれはこの時からいよいよ赤シャツを信用しなくなった。信用しない赤シャツとは口をきいて、感心している山嵐とは話をしない。世の中は随分妙なものだ。

ある日の事赤シャツがちよつと君に話があるから、僕のうちまで来てくれと云うから、惜しいと思つたが温泉行きを欠勤して四時頃出掛けて行つた。赤シャツは一人ものだが、教頭だけに下宿はとくの昔に引き払つて立派な玄関を構えている。家賃は九円五拾錢だそうだ。田舎へ来て九円五拾錢払えばこんな家へはいれるなら、おれも一つ奮発して、東京から清を呼び寄せて喜ばしてやろうと思つたくらいな玄関だ。頼むと云つたら、赤シャツの弟が取次に出て来た。この弟は学校で、おれに代数と算術を教わる至つて出来のわるい子だ。その癖渡りものだから、生れ付いての田舎者よりも人が悪るい。

赤シャツに逢つて用事を聞いてみると、大将例の琥珀のパイプで、きな臭い烟草たばこをふかしながら、こんな事を云つた。「君が来てくれてから、前任者の時代よりも成績せいせきがよくあがつて、校長も大いにいい人を得たと喜んでいたので——どうか学校でも信頼しんらいしているのだから、そのつもりで勉強していただきたい」

「へえ、そうですね、勉強つて今より勉強は出来ませんが——」

「今のくらいで充分じゅうぶんです。ただ先だつてお話しした事ですね、あれを忘れずにいて下さればいいのです」

「下宿の世話なんかするものあ剣呑けんおんだという事ですか」

「そう露骨ろこつに云うと、意味もない事になるが——まあ善いさ——精神は君にもよく通じている事と思うから。そこで君が今のように出精しゅつせいして下されば、学校の方でも、ちゃんと見ているんだから、もう少しして都合つうごうさえつけば、待遇たいぐうの事も多少はどうにかなるだろうと思うんですがね」

「へえ、俸給ほうきゅうですか。俸給なんかどうでもいいんですが、上がれば上がった方がいいですね」

「それで幸い今度転任者が一人出来るから——もつとも校長に相談してみないと無論受け合えない事だが——その俸給から少しは融通ゆうずうが出来るかも知れないから、それで

都合をつけるように校長に話してみようと思ふんですがね」

「どうも難有う。だれが転任するんですか」

「もう発表になるから話しても差し支えないでしょう。実は古賀君です」

「古賀さんは、だってこの人じゃありませんか」

「ここの地の人ですが、少し都合があつて——半分は当人の希望です」

「どこへ行くんです」

「日向の延岡で——土地が土地だから一級俸上つて行く事になりました」

「誰か代りが来るんですか」

「代りも大抵極まつてるんです。その代りの具合で君の待遇上の都合もつくんです」

「はあ、結構です。しかし無理に上がらないでも構いません」

「とも角も僕は校長に話すつもりです。それで校長も同意見らしいが、追つては君にもつと働いて頂だかなくつてはならんようになるかも知れないから、どうか今からそのつもりで覚悟をしてやつてもらいたいですね」

「今より時間でも増すんですか」

「いいえ、時間は今より減るかも知れませんが——」

「時間が減つて、もつと働くんですか、妙だな」

「ちよつと聞くと妙だが、——判然とは今言いくらいが——まあつまり、君にもつと重大な責任を持つてもらうかも知れないという意味なんです」

おれには一向分らない。今より重大な責任と云えば、数学の主任だろうが、主任は山嵐だから、やつこさんなかなか辞職する氣遣いはない。それに、生徒の人望があるから転任や免職めんしよくは学校の得策であるまい。赤シャツの談話はいつでも要領を得ない。要領を得なくつても用事はこれで済んだ。それから少し雑談をしているうちに、うらなり君の送別会をやる事や、ついではおれが酒を飲むかと云う問や、うらなり先生は君子で愛すべき人だと云う事や——赤シャツはいろいろ弁じた。しまいに話をかえて君俳句をやりませんかと来たから、こいつは大変だと思つて、俳句はやりません、さうならと、そこそこに帰つて来た。発句ほつくは芭蕉ばしょうか髪結床かみいしこの親方のやるもんだ。数学の先生が朝顔やに釣瓶つるべをとられてたまるものか。

帰つてうんと考え込んだ。世間には随分氣の知れない男が居る。家屋敷はもちろん、勤める学校に不足のない故郷がいやになつたからと云つて、知らぬ他国へ苦勞を求めに出る。それも花の都の電車が通かよつてゐる所なら、まだしもだが、日向の延岡とは何の事だ。おれは船つきのいいここへ来てさえ、一ヶ月立たないうちにもう帰りたくなつた。延岡と云えば山の中も山の中も大変な山の中だ。赤シャツの云うところによると



船から上がって、一日馬車いちんちへ乗って、宮崎へ行つて、宮崎からまた一日車いちんちへ乗らなくつては着けないそうさ。名前を聞いてさえ、開けた所とは思えない。猿さると人とが半々に住んでるような気がする。いかに聖人のうらなり君だつて、好んで猿の相手になりたくもないだろうに、何という物数奇ものずきだ。

ところへあいかわらず婆ばあさんが夕食ゆうめしを運んで出る。今日もまた芋いもですかいと聞いてみたら、いえ今日はお豆腐とうふぞなもと云つた。どっちにしたつて似たものだ。

「お婆さん古賀さんは日向へ行くそうですね」

「ほん当にお氣の毒じゃな、もし」

「お氣の毒だつて、好んで行くんなら仕方がないですね」

「好んで行くて、誰がぞなもし」

「誰がぞなもしつて、当人がさ。古賀先生が物数奇に行くんじゃありませんか」

「そりやあなた、大違いの勘五郎かんごろうぞなもし」

「勘五郎かね。だつて今赤シャツがそう云いましたぜ。それが勘五郎なら赤シャツは嘘つきの法螺ほらえもん右衛門だ」

「教頭さんが、そうお云いするのはもつともじゃが、古賀さんのお往いきともないのももつともぞなもし」

「そんなら両方もつともなんですね。お婆さんは公平でいい。一体どういふ訳なんですか」

「今朝古賀のお母さんが見えて、だんだん訳をお話したがなもし」

「どんな訳をお話したんです」

「あそこもお父さんがお亡くなりしてから、あたし達が思うほど暮し向が豊かになうてお困りじゃけれ、お母さんが校長さんにお頼みて、もう四年も勤めているものじゃけれ、どうぞ毎月頂くものを、今少しふやしておくれんかてて、あなた」

「なるほど」

「校長さんが、ようまあ考えてみるとこうとお云いたげな。それでお母さんも安心して、今に増給のご沙汰があるぞ、今月か来月かと首を長くして待つておいでたところへ、校長さんがちよつと来てくれと古賀さんにお云いるけれ、行ってみると、気の毒だが学校は金が足りんけれ、月給を上げる訳にゆかん。しかし延岡になら空いた口があつて、そつちなら毎月五円余分にとれるから、お望み通りでよかろうと思つて、その手続きにしたから行くがええと云われたげな。——」

「じゃ相談じゃない、命令じゃありませんか」

「さよよ。古賀さんはよそへ行つて月給が増すより、元のままでもええから、ここに居

りたい。屋敷もあるし、母もあるからとお頼みたけれども、もうそう極めたあとで、古賀さんの代りは出来ているけれ仕方がないと校長がお云いたげな」

「へん人を馬鹿ばかにしてら、面白くもない。じゃ古賀さんは行く気はないんですね。どうれで変だと思った。五円ぐらい上がったって、あんな山の中へ猿のお相手をしに行く唐変木とうへんぼくはまずないからね」

「唐変木で、先生なんぞなもし」

「何でもいいさあ、——全く赤シャツの作略さりやくだね。よくない仕打しうちだ。まるで欺撃だましうちです。それでおれの月給を上げるなんて、不都合ふつごうな事があるものか。上げてやるつて、誰が上がつてやるものか」

「先生は月給がお上りるのかなもし」

「上げてやるつて云うから、断ことわろうと思うんです」

「何で、お断ことわりののぞなもし」

「何でもお断ことわりだ。お婆さん、あの赤シャツは馬鹿ですぜ。卑怯ひきようでさあ」

「卑怯ひきようでもあんだ、月給を上げておくれたら、大人おとなしく頂いておく方が得えぞなもし。若いうちはよく腹の立つものじゃが、年をとつてから考えると、少しの我慢がまんじゃあつたのに惜しい事をした。腹立てたためにこないな損くやをしたと悔くやむのが当り前じゃけれ、

お婆の言う事をきいて、赤シャツさんが月給をあげてやろとお言いたら、難有うと受けておおきなさいや」

「年寄の癖に余計な世話を焼かなくつてもいい。おれの月給は上がろうと下がろうとおれの月給だ」

婆さんはだまって引き込んだ。爺さんは呑気な声を出して謡をうたつてる。謡というものは読んでわかる所を、やにむずかしい節をつけて、わざと分らなくする術だろ。あんな者を毎晩飽きずに唸る爺さんの気が知れない。おれは謡どころの騒ぎじゃない。月給を上げてやろうと云うから、別段欲しくもなかったが、入らない金を余しておくのもつたいないと思つて、よろしいと承知したのだが、転任したくないものを無理に転任させてその男の月給の上前を跳ねるなんて不人情な事が出来るものか。当人がもとの通りでいいと云うのに延岡下りまで落ちさせるとは一体どう云う了見だろう。太宰権帥でさえ博多近辺で落ちついたものだ。河合又五郎だつて相良でとまつてるじゃないか。とにかく赤シャツの所へ行つて断わつて来なくつちあ気が済まない。

小倉の袴をつけてまた出掛けた。大きな玄関へ突つ立つて頼むと云うと、また例の弟が取次に出て来た。おれの顔を見てまた来たかという眼付をした。用があれば二度

だつて三度だつて来る。よる夜なかだつて叩き起さないととは限らない。教頭の所へご機嫌伺いにくるようなおれと見損つてるか。これでも月給が入らないから返しに来んだ。すると弟が今来客中だと云うから、玄関でいいからちよつとお目にかかりたいと云つたら奥へ引き込んだ。足元を見ると、畳付きの薄っぺらな、のめりの駒下駄がある。奥でもう万歳ですよと云う声が聞える。お客とは野だだなど気がついた。野だでなくては、あんな黄色い声を出して、こんな芸人じみた下駄を穿くものはない。

しばらくすると、赤シャツがランプを持って玄関まで出て来て、まあ上がりましたまえ、外の人じゃない吉川君だ、と云うから、いえここでたくさんです。ちよつと話せばいいんです、と云つて、赤シャツの顔を見ると金時のようだ。野だ公と一杯飲んでと見える。

「さつき僕の月給を上げてやるというお話でしたが、少し考えが変わったから断わりに来たんです」

赤シャツはランプを前へ出して、奥の方からおれの顔を眺めたが、とっさの場合返事をしかねて茫然としてゐる。増給を断わる奴が世の中にたった一人飛び出して来たのを不審に思ったのか、断わるにしても、今帰つたばかりで、すぐ出直してこなくつてもよさそうなものだと、呆れ返つたのか、または双方合併したのか、妙な口をして

突つ立つたままである。

「あの時承知したのは、古賀君が自分の希望で転任するという話でしたからで……」

「古賀君は全く自分の希望で半ば転任するんです」

「そうじゃないんです、ここに居たいんです。元の月給でもいいから、郷里に居たいのです」

「君は古賀君から、そう聞いたのですか」

「そりや当人から、聞いたんじゃないありません」

「じゃ誰からお聞きです」

「僕の下宿の婆さんが、古賀さんのおつ母さんかから聞いたのを今日僕に話したのです」

「じゃ、下宿の婆さんがそう云ったのですね」

「まあそうです」

「それは失礼ながら少し違うでしょう。あなたのおつしやる通りだと、下宿屋の婆さんの云う事は信ずるが、教頭の云う事は信じないと云うように聞えるが、そういう意味に解釈して差支さしつかえないでしようか」

おれはちよつと困った。文学士なんてものはやつぱりえらいものだ。妙な所へこだわつて、ねちねち押し寄せてくる。おれはよく親父おやじから貴様はそそっかしくて駄目だめだ

駄目だと云われたが、なるほど少々そそっかしいようだ。婆さんの話を聞いてはつと思つて飛び出して来たが、実はうらなり君にもうらなりのおつ母さんにも逢つて詳しく事情は聞いてみなかったのだ。だからこう文学士流に斬り付けられると、ちよつと受け留めにくい。

正面からは受け留めにくいだが、おれはもう赤シャツに対して不信任を心の中で申し渡してしまつた。下宿の婆さんもけん坊の欲張り屋に相違ないが、嘘は吐かない女だ、赤シャツのように裏表はない。おれは仕方がないから、こう答えた。

「あなたの云う事は本当かも知れないですが——とにかく増給はご免蒙ります」  
「それはますます可笑しい。今君がわざわざお出になつたのは増俸を受けるには忍びない、理由を見出したからのように聞えたが、その理由が僕の説明で取り去られたにもかかわらず増俸を否まれるのは少し解しかねるようですね」

「解しかねるかも知れませんがね。とにかく断りますよ」

「そんなに否なら強いてとまでは云いませんが、そう二三時間のうちに、特別の理由もないのに豹変しちゃ、将来君の信用にかかわる」

「かかわつても構わないです」

「そんな事はないはずです、人間に信用ほど大切なものはありませんよ。よしんば今一

歩譲つて、下宿の主人が……」

「主人じゃない、婆さんです」

「どちらでもよろしい。下宿の婆さんが君に話した事を事実としたところで、君の増給は古賀君の所得を削つて得たものではないでしょう。古賀君は延岡へ行かれる。その代りがくる。その代りが古賀君よりも多少低給で来てくれる。その剰余を君に廻わすと云うのだから、君は誰にも気の毒がる必要はないはずです。古賀君は延岡でただ今よりも榮進される。新任者は最初からの約束で安くくる。それで君が上がられば、これほど都合のいい事はないと思うですがね。いやなら否でもいいが、もう一返うちでよく考えてみませんか」

おれの頭はあまりえらくないのだから、いつもなら、相手がこういう巧妙な弁舌を揮えば、おやそうかな、それじゃ、おれが間違つてたと恐れ入って引きさがるのだけれども、今夜はそうは行かない。ここへ来た最初から赤シャツは何だか虫が好かなくなつた。途中で親切な女みたような男だと思ひ返した事はあるが、それが親切でも何でもなさそうなので、反動の結果今じゃよつぽど厭になつてゐる。だから先がどれほどうまく論理的に弁論を逞くしようとも、堂々たる教頭流におれを遣り込めようとも、そんな事は構わない。議論のいい人が善人とはきまらない。遣り込められる方が悪人



とは限らない。表向きは赤シャツの方が重々もつとのだが、表向きがいくら立派だつて、腹の中まで惚れさせる訳には行かない。金や威力いりよくや理屈りくつで人間の心が買える者なら、高利貸でも巡査じゆんさでも大学教授でも一番人に好かれなくてはならない。中学の教頭ぐらいな論法でおれの心がどう動くものか。人間は好き嫌いで働くものだ。論法で働くものじゃない。

「あなたの云う事はもつともですが、僕は増給がいやになつたんですから、まあ断わります。考えたつて同じ事です。さようなら」と云いすてて門を出た。頭の上には天の川が一筋かかっている。

## 九

うらなり君の送別会のあるという日の朝、学校へ出たら、山嵐やまあらしが突然とつぜん、君先きみさきだつてはいか銀が来て、君が乱暴して困るから、どうか出るように話してくれと頼たのんだから、真面目まじめに受けて、君に出てやれと話したのだが、あとから聞いてみると、あいつは悪い奴やつで、よく偽筆ぎひつへ贖落款にせらつかんなどを押しおして売りつけるそうだから、全く君の事も出鱈目でたらめに違ちがはない。君に懸物かけものや骨董こつとうを売りつけて、商売にしようと思つてたところが、君が

取り合わないで儲けがないものだから、あんな作りごとをこしらえて胡魔化したのだ。僕はあの人物を知らなかったので君に大変失敬した勘弁したまえと長々しい謝罪をした。

おれは何とも云わずに、山嵐の机の上にあつた、一錢五厘をとつて、おれの蝦臺口のなかへ入れた。山嵐は君それを引き込めるのかと不審そうに聞くから、うんおれは君に奢られるのが、いやだったから、是非返すつもりでいたが、その後だんだん考えてみると、やっぱり奢ってもらう方がいいようだから、引き込ますんだと説明した。山嵐は大きな声をしてアハハハと笑いながら、そんなら、なぜ早く取らなかつたのだと聞いた。実は取ろう取ろうと思つてたが、何だか妙だからそのままにしておいた。近來は学校へ来て一錢五厘を見るのが苦になるくらいやだつたと云つたら、君はよつぽど負け惜しみの強い男だと云うから、君はよつぽど剛情張りだと答えてやった。それから二人の間にこんな問答が起つた。

「君は一体どここの産だ」

「おれは江戸っ子だ」

「うん、江戸っ子か、道理で負け惜しみが強いと思つた」

「きみはどこだ」

「僕は会津だ」

「会津つぽか、強情な訳だ。今日の送別会へ行くのかい」

「行くとも、君は？」

「おれは無論行くんだ。古賀さんが立つ時は、浜まで見送りに行こうと思ってるくらいだ」

「送別会は面白いぜ、出て見たまえ。今日は大いに飲むつもりだ」

「勝手に飲むがいい。おれは肴を食ったら、すぐ帰る。酒なんか飲む奴は馬鹿だ」

「君はすぐ喧嘩を吹き懸ける男だ。なるほど江戸っ子の軽跳な風を、よく、あらわして」

「何でもいい、送別会へ行く前にちよつとおれのうちへお寄り、話しがあるから」

山嵐は約束通りおれの下宿へ寄った。おれはこの間から、うらなり君の顔を見る度に気の毒でたまらなかつたが、いよいよ送別の今日となつたら、何だか憐れつぽくつて、出来る事なら、おれが代りに行ってやりたい様な気がした。それで送別会の席上で、大いに演説でもしてその行を盛にしてやりたいと思うのだが、おれのべらんめえ調子じゃ、到底物にならないから、大きな声を出す山嵐を雇つて、一番赤シャツ

の荒肝あらしぎもを挫ひいでやろうと考え付いたから、わざわざ山嵐を呼んだのである。

おれはまず冒頭ぼうとうとしてマドンナ事件から説き出したが、山嵐は無論マドンナ事件はおれより詳しく知くわっている。おれが野芹川のせりがわの土手の話をして、あれは馬鹿野郎ばかやろうだと云ったら、山嵐は君はだれを捕つらまえても馬鹿呼よばわりをする。今日学校で自分の事を馬鹿と云ったじゃないか。自分が馬鹿なら、赤シャツは馬鹿じゃない。自分は赤シャツの同類じゃないと主張した。それじゃ赤シャツは腑ふ抜ぬけの呆助ほうすけだと云ったら、そうかもしれないと山嵐は大いに賛成した。山嵐は強い事は強いが、こんな言葉になると、おれより遥はるかに字を知しっていない。会津わいづっぼなんてものはみんな、こんな、ものなんだろ。

それから増給事件と将来重く登用すると赤シャツが云った話をしたら山嵐はふふんと鼻から声を出して、それじゃ僕めんしやくを免職めんしやくする考くわえだなど云った。免職するつもりだつて、君は免職になる気かと聞いたら、誰だれがなるものか、自分が免職になるなら、赤シャツもいっしょに免職させてやると大いに威張いばった。どうしていっしょに免職させる気かと押し返して尋ねたずねたら、そこはまだ考くわえていないと答えた。山嵐は強ちがそうだが、智慧ちえはあまりなさそうだ。おれが増給ぞうきゅうを断ことわつたと話したら、大将大きに喜んでさすが江戸っ子だ、えらいと賞ほめてくれた。

うらなりが、そんなに厭いやがつてゐるなら、なぜ留任すての運動をしてやらなかったと聞いてみたら、うらなりから話を聞いた時は、既にきまつてしまつて、校長へ二度、赤シャツへ一度行つて談判してみたが、どうする事も出来なかつたと話した。それについて古賀があまり好人物過ぎるから困る。赤シャツから話があつた時、断然断わるか、一応考えてみますと逃げればいいのに、あの弁舌に胡魔化されて、即席そくせきに許諾きよたたくしたものだから、あとからお母つかさんが泣きついて、自分が談判に行つても役に立たなかつたと非常に残念がった。

今度の事件は全く赤シャツが、うらなりを遠ざけて、マドンナを手に入れる策略なんだらうとおれが云つたら、無論そうに違ちがひない。あいつは大人おとなしい顔をして、悪事を働いて、人が何か云うと、ちゃんと逃道にげみちを拵こしらへて待つてるんだから、よつほど奸物かんぶつだ。あんな奴にかかつては鉄拳制裁てつけんせいさいでなくつちや利かないと、瘤こぶだらけの腕うでをまくつてみせた。おれはついでだから、君の腕は強そうだな。柔術じゆうじゆつでもやるかと聞いてみた。すると大将二の腕へ力瘤ちからこぶを入れて、ちよつと攫つかんでみると云うから、指の先で揉もんでみたら、何の事はない湯屋にある軽石の様なものだ。

おれはあまり感心したから、君そのくらの腕なら、赤シャツの五人や六人は一度に張り飛ばされるだらうと聞いたら、無論さと云いながら、曲げた腕のを伸ばしたり、

縮ましたりすると、力瘤がぐるりぐるりと皮のなかで廻転する。すこぶる愉快だ。山嵐の証明する所によると、かんじん緋を二本より合せて、この力瘤の出る所へ巻きつけて、うんと腕を曲げると、ふつりと切れるそうさ。かんじんよりなら、おれにも出来そうだと云つたら、出来るものか、出来るならやつてみると来た。切れないと外聞がわるいから、おれは見合せた。

君どうだ、今夜の送別会に大いに飲んだあと、赤シャツと野だを撲つてやらないかと面白半分に勧めてみたら、山嵐はそうだなと考えていたが、今夜はまあよそうと云つた。なぜと聞くと、今夜は古賀に気の毒だから——それにどうせ撲るくらいなら、あいつらの悪い所を見届けて現場で撲らなくっちゃ、こつちの落度になるからと、分別のありそうな事を附加した。山嵐でもおれよりは考えがあると見える。

じゃ演説をして古賀君を大いにほめてやれ、おれがすると江戸っ子のぺらぺらになつて重みがなくていけない。そうして、きまつた所へ出ると、急に溜飲が起つて咽喉の所へ、大きな丸が上がつて来て言葉が出ないから、君に譲るからと云つたら、妙な病氣だな、じゃ君は人中じゃ口は利けないんだね、困るだろう、と聞くから、何そんなに困りやしないと答えておいた。

そうこうするうち時間が来たから、山嵐と一所に会場へ行く。会場は花晨亭といつ

て、当地こゝで第一等の料理屋だそうだが、おれは一度も足を入れた事がない。もとの家老とかの屋敷やしきを買い入れて、そのまま開業したという話だが、なるほど見懸みかけからして厳いめしい構かえだ。家老の屋敷が料理屋になるのは、陣羽織じんぼおりを縫ぬい直して、胴着どうぎにする様なものだ。

二人が着いた頃ころには、人数にんずももう大概揃たがいぞろつて、五十畳じゅうごの広間に二つ三つ人間の塊かたまりが出来ている。五十畳だけに床は素敵そてきに大きい。おれが山城屋せんにやうで占領せんりようした十五畳敷の床とは比較にならない。尺を取つてみたら二間あつた。右の方に、赤い模様のある瀬戸物の瓶かめを据すえて、その中に松まつの大きな枝えだが挿さしてある。松の枝を挿して何にする気か知らないが、何ヶ月立つても散る氣遣きぢいがないから、錢ぜにが懸からなくつて、よかろう。あの瀬戸物はどこで出来るんだと博物の教師に聞いたら、あれは瀬戸物じゃありません、伊万里いまりですと云つた。伊万里だつて瀬戸物じゃないかと、云つたら、博物はえへへへと笑つていた。あとで聞いてみたら、瀬戸で出来る焼物だから、瀬戸と云うのだそうだ。おれは江戸っ子だから、陶器とうきの事を瀬戸物というのかと思つていた。床の真中に大きな懸物かたがあつて、おれの顔くらいな大きな字が二十八字かいてある。どうも下手へたなものだ。あんまり不味まずいから、漢学の先生に、なぜあんなまずいものを麗々れいれいと懸かけておくんですと尋ねたところ、先生はあれは海屋かいおくといつて有名な書家のかいた

者だと教えてくれた。海屋だか何だか、おれは今だに下手だと思つてゐる。

やがて書記の川村がどうかお着席をと云うから、柱があつて寄りかかるのに都合のいい所へ坐つた。海屋の懸物の前に狸が羽織、袴で着席すると、左に赤シャツが同じく羽織袴で陣取つた。右の方は主人公だというのでうらなり先生、これも日本服で控えている。おれは洋服だから、かしこまるのが窮屈だつたから、すぐ胡坐をかけた。隣りの体操教師は黒ずぼんで、ちゃんとかしこまっている。体操の教師だけにいやに修行が積んでいる。やがてお膳が出る。徳利が並ぶ。幹事が立つて、一言開会の辞を述べる。それから狸が立つ。赤シャツが起つ。ことごとく送別の辞を述べたが、三人共申し合せたようにうらなり君の、良教師で好人物な事を吹聴して、今回去られるのはまことに残念である、学校としてのみならず、個人として大いに惜しむところであるが、ご一身上のご都合で、切に転任をご希望になつたのだから致し方がないという意味を述べた。こんな嘘をついて送別会を開いて、それでちつとも恥かしいとも思つていない。ことに赤シャツに至つて三人のうちで一番うらなり君をほめた。この良友を失うのは実に自分にとって大なる不幸であるとも云つた。しかもそのいい方がいかにも、もっともらしくつて、例のやさしい声を一層やさしくして、述べ立てるのだから、始めて聞いたものは、誰でもきつとだまされるに極つてる。マドンナも大



方この手で引掛けたんだらう。赤シャツが送別の辞を述べ立てている最中、向側に坐つていた山嵐がおれの顔を見てちよつと稲光をさした。おれは返電として、人指し指でべっかんこうをして見せた。

赤シャツが座に復するのを待ちかねて、山嵐がぬつと立ち上がったから、おれは嬉しかったので、思わず手をぱちぱちと拍った。すると狸を始め一同がことごとくおれの方を見たには少々困った。山嵐は何を云うかと思うとただ今校長始めことに教頭は古賀君の転任を非常に残念がられたが、私は少々反対で古賀君が一日も早く当地を去られるのを希望しております。延岡は僻遠の地で、当地に比べたら物質上の不便はあるだらう。が、聞くところによれば風俗のすこぶる淳朴な所で、職員生徒ことごとく上代樸直の気風を帯びているそうである。心にもないお世辞を振り蒔いたり、美しい顔をして君子を陥れたりするハイカラ野郎は一人もないと信ずるからして、君のごとき温良篤厚の士は必ずその地方一般の歓迎を受けられるに相違ない。吾輩は大いに古賀君のためにこの転任を祝するのである。終りに臨んで君が延岡に赴任されたら、その地の淑女にして、君子の好述となるべき資格あるものを扨んで一日も早く円満なる家庭をかたち作って、かの不貞無節なるお転婆を事実の上において慚死せしめん事を希望します。えへんえへんと二つばかり大きな咳払いをして席に着いた。おれは

今度も手を叩こうと思つたが、またみんながおれの面を見るといやだから、やめにしておいた。山嵐が坐ると今度はうらなり先生が起つた。先生はご鄭寧に、自席から、座敷の端の末座まで行つて、懇懃に一同に挨拶をした上、今般は一身上の都合で九州へ参る事になりましたについて、諸先生方が小生のためにこの盛大なる送別会をお開き下さつたのは、まことに感銘の至りに堪えぬ次第で——ことにただ今は校長、教頭その他諸君の送別の辞を頂戴して、大いに難有く服膺する訳であります。私はこれから遠方へ参りますが、なにとぞ従前の通りお見捨てなくご愛顧のほどを願います。とへえつく張つて席に戻つた。うらなり君はどこまで人が好いんだか、ほとんど底が知れない。自分がこんな馬鹿にされている校長や、教頭に、恭しくお礼を云つている。それも義理一遍の挨拶ならだが、あの様子や、あの言葉つきや、あの顔つきから云々と、心から感謝しているらしい。こんな聖人に真面目にお礼を云われたら、氣の毒になつて、赤面しそうなものだが狸も赤シャツも真面目に謹聴しているばかりだ。

挨拶が済んだら、あちらでもチュー、こちらでもチュー、という音がする。おれも真似をして汁を飲んでみたがまずいもんだ。口取に蒲鉾はついてるが、どす黒くて竹輪の出来損ないである。刺身も並んでるが、厚くつて鮪の切り身を生で食うと同じ事だ。それでも隣り近所の連中はむしゃむしゃ旨そうに食っている。大方江戸前の料理

を食った事がないんだらう。

そのうち爛徳利かんどくりが頻繁ひんぱんに往来し始めたたら、四方が急に賑にぎやかになつた。野だ公は恭しく校長の前へ出て、盃さかずきを頂いただきいてる。いやな奴だ。うらなり君は順々に献酬けんしゅうをして、一巡周いちじゆんめぐるつもりとみえる。はなはだご苦勞である。うらなり君がおれの前へ来て、一つ頂戴致いたしましょうと袴のひだを正して申し込まれたから、おれも窮屈きうくつにズボンのままかしこまつて、一盃ばい差し上げた。せつかく参つて、すぐお別れになるのは残念ですね。ご出立しゅつたつはいつです、是非浜までお見送りをしましょうと云つたら、うらなり君はいえご用多おほのところ決してそれには及びおよびませんと答えた。うらなり君が何と云つたつて、おれは学校を休んで送る氣でいる。

それから一時間ほどするうちに席上は大分乱れて来る。まあ一杯ばい、おや僕が飲めと云うのに……などと呂律ろれつの巡まわりかねるのも一人二人出来て来た。少々退屈たいくつしたから便所へ行つて、昔風な庭を星明りにすかして眺ながめていると山嵐が来た。どうださっきの演説はうまかつたらう。と大分得意である。大賛成だが一ヶ所氣に入らないと抗議こうぎを申し込んだら、どこが不賛成だと聞いた。

「美しい顔をして人を陥れるようなハイカラ野郎は延岡おに居おらないから……と君は云つたらう」

「うん」

「ハイカラ野郎だけでは不足だよ」

「じゃ何と云うんだ」

「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫被りの、香具師の、モモンガーの、岡っ引きの、わんわん鳴けば犬も同然な奴とでも云うがいい」

「おれには、そう舌は廻らない。君は能弁だ。第一単語を大変たくさん知ってる。それで演舌が出来ないのは不思議だ」

「なにこれは喧嘩のときに使おうと思つて、用心のために取つておく言葉さ。演舌となつちや、こうは出ない」

「そうかな、しかしへらへら出るぜ。もう一遍やつて見たまえ」

「何遍でもやるさいいか。——ハイカラ野郎のペテン師の、イカサマ師の……」と云いかけていると、椽側をどたばた云わして、二人ばかり、よろよろしながら馳け出して来た。

「両君そりやひどい、——逃げるなんて、——僕が居るうちは決して逃さない、さあのみたまえ。——いかさま師？——面白い、いかさま面白い。——さあ飲みたまえ」

とおれと山嵐をぐいぐい引つ張つて行く。実はこの兩人共便所に来たのだが、酔つて

るもんだから、便所へはいるのを忘れて、おれ等を引つ張るのだろう。酔っ払いは目の中あたの所へ用事を拵えて、前の事はすぐ忘れてしまふんだろう。

「さあ、諸君、いかさま師を引つ張つて来た。さあ飲ましてくれたまえ。いかさま師をうんと云うほど、酔わしてくれたまえ。君逃げちやいかん」

と逃げもせぬ、おれを壁際かべぎわへ押し付けた。諸方を見廻してみると、膳の上に満足な肴の乗っているのは一つもない。自分の分を奇麗きれいに食い尽つくして、五六間先へ遠征えんせいに出た奴もいる。校長はいつ帰つたか姿が見えない。

ところへお座敷はこちら？ と芸者が三四人はいつて来た。おれも少し驚おどろいたが、壁際へ押し付けられているんだから、じつとしてただ見ていた。すると今まで床柱とこばしらへもたれて例の琥珀こはくのパイプを自慢じまんそうに啣くわえていた、赤シャツが急に起たつて、座敷を出にかかった。向むかうからはいつて来た芸者の一人が、行き違いながら、笑つて挨拶をした。その一人は一番若くて一番奇麗な奴だ。遠くで聞きえなかつたが、おや今晚はぐらい云つたらしい。赤シャツは知らん顔をして出て行つたぎり、顔を出さなかつた。大方校長のあとを追懸おしかけて帰つたんだらう。

芸者が来たら座敷中急に陽気になつて、一同が関との声を揚あげて歓迎かんげいしたのかと思うくらい、騒さわ々しい。そうしてある奴はなんこを攫つかむ。その声の大きな事、まるで居合いあいぬき抜

の稽古けいこのようだ。こつちでは拳けんを打うつてる。よつ、はつ、と夢中むちゆうで両手を振るところは、ダーク一座の操人形あやつりにんぎょうよりよつぽど上手じょうずだ。向うの隅すみではおいお酌しやくだ、と徳利を振ふつてみて、酒だ酒だと言い直ちしている。どうもやかましくて騒々さわさわしくつてたまらない。そのうちで手持無沙汰てもちぶさたに下を向むいて考え込んでるのはうらなり君ばかりである。自分のために送別会を開ひらいてくれたのは、自分の転任てんにんを惜おしんでくれるんじゃない。みんなが酒を呑のんで遊ぶためだ。自分独ひとりりが手持無沙汰で苦しむためだ。こんな送別会なら、開ひらいてもらわない方がよつぽどましだ。

しばらくしたら、めいめい胴間声どうまなこゑを出だして何か唄うたい始めた。おれの前へ来た一人の芸者が、あんた、なんぞ、唄うたいなはれ、と三味線を抱かかえたから、おれは唄うたわない、貴様唄うたってみると云いつたら、金かねや太鼓たいこでねえ、迷子の迷子の三太郎と、どんどこ、どんのちゃんちきりん。叩たたいて廻まわつて逢あわれるものならば、わたしなんでも、金や太鼓でどんどこ、どんのちゃんちきりんと叩たたいて廻まわつて逢あいたい人がある、と二た息にうたつて、おおしんどと云いつた。おおしんどなら、もっと楽たのなものをやればいいのに。

すると、いつの間にか傍そばへ来て坐まつた、野だが、鈴ちゃん逢あいたい人に逢あつたと思つたら、すぐお帰かえりで、お気の毒なさまみたようでげすと相変あらざる嘶なし家いみたような言葉使いをする。知りまへんと芸者はつんと済すました。野のは頓着とんじやくなく、たまたま逢あい

は逢いながら……と、いやな声を出して義太夫の真似をやる。おきなはれやと芸者は平手で野だの膝を叩いたら野だは恐悦して笑つてる。この芸者は赤シャツに挨拶をした奴だ。芸者に叩かれて笑うなんて、野だもおめでたい者だ。鈴ちゃん僕が紀伊の国を踴るから、一つ弾いて頂戴と云い出した。野だはこの上まだ踴る氣でいる。

向うの方で漢学のお爺さんが齒のない口を歪めて、そりや聞えません伝兵衛さん、お前とわたしのその中は……とまでは無事に済したが、それから？ と芸者に聞いている。爺さんなんて物覚えのわるいものだ。一人が博物を捕まえて近頃こないなのが、でけましたぜ、弾いてみまほうか。よう聞いて、いなはれや——花月巻、白いリボンのハイカラ頭、乗るは自転車、弾くはヴァイオリン、半可の英語でへらへらと、I am glad to see you と唱うと、博物はなるほど面白い、英語入りだねと感心している。

山嵐は馬鹿に大きな声を出して、芸者、芸者と呼んで、おれが剣舞をやるから、三味線を弾けと号令を下した。芸者はあまり乱暴な声なので、あつけに取られて返事もしない。山嵐は委細構わず、ステッキを持つて来て、踏破千山万岳烟と真中へ出て独りで隠し芸を演じている。ところへ野だがすでに紀伊の国を済まして、かっぼれを済まして、棚の達磨さんを済して丸裸の越中褌一つになって、棕櫚箒を小脇に抱い込んで、日清談判破裂して……と座敷中練りあるき出した。まるで氣違いだ。

おれはさつきから苦しそうに袴も脱がず控えているうらなり君が気の毒でたまらなかつたが、なんぼ自分の送別会だつて、越中禪の裸躑はだかおどりまで羽織袴で我慢がまんしてみている必要はあるまいと思つたから、そばへ行つて、古賀さんもう帰りましょうと退去を勧めてみた。するとうらなり君は今日は私の送別会だから、私が先へ帰つては失礼です、どうぞ遠慮えんりよなくと動く景色もない。なに構うもんですか、送別会なら、送別会らしくするがいいです、あの様をご覧なさい。氣狂きかき会です。さあ行きましよう、進まないのを無理に勧め、座敷を出かかるところへ、野だのが箒を振り振り進行して来て、やご主人が先へ帰るとはひどい。日清談判だ。帰せないと箒を横にして行く手を塞ふさいだ。おれはさつきから肝癩かんしやくが起つているところだから、日清談判なら貴様はちゃんやんやんだろうと、いきなり拳骨けんこつで、野だの頭をばかりと喰くわしてやつた。野だは二三秒の間毒氣を抜かれた体ていで、ぼんやりしていたが、おやこれはひどい。お撲ぶちになつたのは情ない。この吉川をちようちやくご打擲うちやくとは恐れ入つた。いよいよもつて日清談判だ。とわからぬ事をならべているところへ、うしろから山嵐が何か騒動そうどうが始まつたと見てとつて、劍舞をやめて、飛んできたが、このていたらくを見て、いきなり頸筋くびすじをうんと攪つかんで引き戻した。日清………いたい。いたい。どうもこれは乱暴だと振りもがくところを横ねじに振たつたら、すつと倒たおれた。あとはどうなつたか知らない。途中とちゆうでうらな



り君に別れて、うちへ帰ったら十一時過ぎだった。

## 十

祝勝会で学校はお休みだ。練兵場れんべいばで式があるというので、狸たぬきは生徒を引率して参列しなくてはならない。おれも職員ひじりの一人としていっしょにくつついて行くんだ。町へ出ると日の丸だらけで、まぼしいくらいである。学校の生徒は八百人もあるのだから、体操の教師が隊伍たいごを整えて、一組一組の間を少しづつ明けて、それへ職員が一人か二人ふたりずつ監督かんとくとして割り込む仕掛けしかである。仕掛けしかだけはすこぶる巧妙こうみょうなものだが、実際はすこぶる不手際である。生徒は小供こどもの上に、生意気で、規律を破らなくっては生徒の体面たいめんにかかわると思つてゐる奴等やつらだから、職員が幾人いくたりついて行つたつて何の役に立つもんか。命令も下さないのに勝手な軍歌をうたつたり、軍歌をやめるとワーと訳もないのに関とまきの声を揚げたり、まるで浪人ろうにんが町内をねりあるいてるようなものだ。軍歌も関の声も揚げない時はがやがや何か喋舌しゃべつてる。喋舌しゃべらないでも歩けそうなもんだが、日本人はみな口から先へ生れるのだから、いくら小言を云いつたつて聞きっこない。喋舌しゃべるのもただ喋舌しゃべるのではない、教師のわる口を喋舌しゃべるんだから、下等だ。おれは宿

直事件で生徒を謝罪さして、まあこれならよかろうと思つていた。ところが実際は大違いである。下宿の婆さんの言葉を借りて云えば、正に大違いの勘五郎である。生徒があやまったのは心から後悔してあやまったのではない。ただ校長から、命令されて、形式的に頭を下げたのである。商人が頭ばかり下げて、狡い事をやめないのと一般で生徒も謝罪だけはするが、いたずらは決してやめるものでない。よく考えてみると世の中はみんなこの生徒のようなものから成立しているかも知れない。人があやまったり詫びたりするのを、真面目に受けて勘弁するのは正直過ぎる馬鹿と云うんだらう。あやまるのも仮りにあやまるので、勘弁するのも仮りに勘弁するのだと思つてれば差し支えない。もし本当にあやまらせる気なら、本当に後悔するまで叩きつけなくてはいけない。

おれが組と組の間にはいつて行くと、天麩羅だの、団子だの、と云う声が絶えずする。しかも大勢だから、誰が云うのだから分らない。よし分つてもおれの事を天麩羅と云つたんじやありません、団子と申したのじやありません、それは先生が神経衰弱だから、ひがんで、そう聞くんだけれい云うに極まつてる。こんな卑劣な根性は封建時代から、養成したこの土地の習慣なんだから、いくら云つて聞かしたつて、教えてやつたつて、到底直りつこない。こんな土地に一年も居ると、潔白なおれも、この真似

をしなければならなく、なるかも知れない。向うでうまく言い抜けられるような手段で、おれの顔を汚すのを抛っておく、樗蒲一はない。向こうが人ならおれも人だ。生徒だつて、子供だつて、ずう体はおれより大きいや。だから刑罰として何か返報をしてやらなくつては義理がわるい。ところがこつちから返報をする時分に尋常の手段で行くと、向うから逆振を食わして来る。貴様がわるいからだと言うと、初手から逃げ路が作つてある事だから滔々と弁じ立てる。弁じ立てておいて、自分の方を表向きだけ立派にしてそれからこつちの非を攻撃する。もともと返報にした事だから、こちらの弁護は向うの非が挙がらない上は弁護にならない。つまりは向うから手を出しておいて、世間体はこつちが仕掛けた喧嘩のように、見倣されてしまう。大変な不利益だ。それなら向うのやるなり、愚迂多良童子を極め込んでいけば、向うはますます増長するばかり、大きく云えば世の中のためにならない。そこで仕方がないから、こつちも向うの筆法を用いて捕まえられないで、手の付けようのない返報をしなくてはならなくなる。そうなつては江戸っ子も駄目だ。駄目だが一年もこうやられる以上は、おれも人間だから駄目でも何でもそうならなくつちや始末がつかない。どうしても早く東京へ帰って清といっしょになるに限る。こんな田舎に居るのは墮落しに来ているようなものだ。新聞配達をしたつて、ここまで墮落するよりはましだ。

こう考えて、いやいや、附ついてくると、何なんだか先鋒せんぽうが急にがやがや騒さわぎ出した。同時に列はびたりと留まる。変だから、列を右へはずして、向うを見ると、大手町おほてまちを突き当つつて薬師町やくしまちへ曲がる角の所で、行き詰づつたぎり、押し返したり、押し返されたりして揉もみ合あっている。前方から静かに静かにと声を洩からして来た体操教師に何ですと聞くと、曲り角で中学校と師範学校しはんが衝突しょうとつしたんだと云う。

中学と師範とはどこの県下でも犬と猿さるのように仲がわるいそうだ。なぜだかわからないが、まるで気風が合わない。何かあると喧嘩をする。大方狭せまい田舎で退屈たいくつだから、暇潰ひまつぶしにやる仕事なんだろう。おれは喧嘩は好きな方だから、衝突と聞いて、面白おもしろ分に馳かけ出して行った。すると前の方にいる連中は、しきりに何だ地方税の癖くせに、引き込めと、怒鳴どなっている。後ろからは押し寄せと大きな声を出す。おれは邪魔じやまになる生徒の間をくぐり抜けて、曲がり角へもう少しで出ようとした時に、前へ！と云う高たかく鋭すい号令きしが聞きえたと思おもつたら師範学校の方は肅肅しゆくしゆくとして行進を始めた。先を争あつた衝突は、折合せあがつかないには相違さういないが、つまり中学校が一步を譲ゆずつたのである。資格から云うと師範学校の方が上だそうだ。

祝勝の式はすこぶる簡単なものであった。旅団長が祝詞を読む、知事が祝詞を読む、参列者ばんざいが万歳を唱える。それでおしまいだ。余興は午後にあると云う話だから、ひと

まず下宿へ帰って、こないだじゆうから、気に掛かつていた、清への返事をかきかけた。今度はもつと詳くわしく書いてくれとの注文だから、なるべく念入ねんいりに認めしたためなくっちゃならない。しかしいざとなつて、半切はんきりを取り上げると、書く事はたくさんあるが、何から書き出していいか、わからない。あれにしようか、あれは面倒臭めんどうくさい。これにしようか、これはつまらない。何か、すらすらと出て、骨が折れなくつて、そうして清が面白がるようなものはないかしらん、と考えてみると、そんな注文通りの事件は一つもなさそうだ。おれは墨すみを磨すつて、筆をしめして、巻紙を睨にらめて、——巻紙を睨にらめて、筆をしめして、墨を磨すつて——同じ所作を同じように何返も繰り返したあと、おれには、とても手紙は書けるものではないと、諦あきらめて硯すずりの蓋ふたをしてしまった。手紙なんぞをかくのは面倒臭い。やっぱり東京まで出掛けて行って、逢あつて話をするのが簡便かんべんだ。清の心配は察さつしないでもないが、清の注文通りの手紙を書くのは三七日の断食だんじきよりも苦しい。

おれは筆と巻紙を抛ほうり出して、ごろりと転ころがって肱枕ひじまくらをして庭にわの方かたを眺ながめてみたが、やっぱり清の事が気にかかると、その時おれはこう思った。こうして遠くへ来てまで、清の身の上を案じていてやりさえすれば、おれの真心まごころは清に通じるに違ちがいない。通じさえすれば手紙なんぞやる必要はない。やらなければ無事くわで暮くしてると思おもつて

だろう。たよりは死んだ時か病氣の時か、何か事の起つた時にやりさえすればいい訳だ。

庭は十坪ほどの平庭で、これという植木もない。ただ一本の蜜柑があつて、塀のそこから、目標になるほど高い。おれはうちへ帰ると、いつでもこの蜜柑を眺める。東京を出た事のないものには蜜柑の生つていところはすこぶる珍しいものだ。あの青い実がだんだん熟してきて、黄色になるんだらうが、定めて奇麗だらう。今でももう半分色の変つたのがある。婆さんに聞いてみると、すこぶる水気の多い、旨い蜜柑だそうだ。今に熟たら、たと召し上がれと云つたから、毎日少しづつ食つてやらう。もう三週間もしたら、充分食えるだろう。まさか三週間以内にここを去る事もなかるう。

おれが蜜柑の事を考えているところへ、偶然山嵐が話しにやつて来た。今日は祝勝会だから、君といつしよにご馳走を食おうと思つて牛肉を買つて来た、竹の皮の包を袂から引きずり出して、座敷の真中へ抛り出した。おれは下宿で芋賣豆腐賣になつてる上、蕎麦屋行き、団子屋行きを禁じられてる際だから、そいつは結構だと、すぐ婆さんから鍋と砂糖をかり込んで、煮方に取りかかった。

山嵐は無暗に牛肉を頬張りながら、君あの赤シャツが芸者に馴染のある事を知つて

るかと思つて、知つてるとも、この間うらなりの送別会の時に来た一人がそうだろうと云つたら、そうだ僕はぼくこの頃ころようやく勘づいたのに、君はなかなか敏捷びんしやうだと大いにほめた。

「あいつは、ふた言目には品性しんせいだの、精神的娛樂しじりくだのと云う癖くせに、裏まわへ廻まわつて、芸者と關係くわいなんかつけどる、怪けしからん奴やつだ。それもほかの人が遊ぶのを寛容かんようするならいいが、君が蕎麦屋へ行つたり、団子屋へはいるのさえ取締とりしまりじよう上じやう害がいになると云つて、校長の口を通して注意ちゆういを加えたじやないか」

「うん、あの野郎の考えじゃ芸者買かは精神的娛樂しじりくで、天麩羅てんぷらや、団子は物理的娛樂ぶつりてきなんだろう。精神的娛樂しじりくなら、もつと大べらにやるがいい。何だあの様さまは。馴染なじみの芸者げいしやはいつてくると、入れ代りに席せきをはずして、逃にげげるなんて、どこまでも人を胡魔こま化かす気だから気に食わない。そうして人が攻撃こうげきすると、僕は知らないとか、露西亜ロシヤ文学ぶんがくだとか、俳句はいくが新体詩しんたいしの兄弟分けいテイブンだとか云つて、人を烟けむに捲まくつもりなんだ。あんな弱虫じやくちゆうは男おとこじやないよ。全く御殿ごてん女中じよちゆうの生れ変かりか何かだぜ。ことによると、あいつのおやじは湯島とうじまのかげまかもしれない」

「湯島のかげま何だ」

「何でも男らしくないもんだらう。——君そのところはまだ煮えていないぜ。そんな

のを食うと條虫さなだむしが湧わくぜ」

「そうか、大抵たいてい大丈夫だいじょうぶだろう。それで赤シャツは人に隠かくれて、温泉ゆの町の角屋かどやへ行つて、芸者と会見するそうだ」

「角屋かくつて、あの宿屋か」

「宿屋兼料理屋さ。だからあいつを一番へこますためには、あいつが芸者をつれて、あそこへはいり込むところを見届けておいて面詰めんきつするんだね」

「見届けるつて、夜番よばんでもするのかい」

「うん、角屋の前に柵屋ますやという宿屋があるだろう。あの表二階をかりて、障子しよじへ穴をあけて、見ているのさ」

「見ているときに来るかい」

「来るだろう。どうせひと晩じゃいけない。二週間ばかりやるつもりでなくっちゃ」

「随分ずいぶん疲れるぜ。僕あ、おやじの死ぬとき一週間ばかり徹夜てつやして看病した事があるが、あとでぼんやりして、大いに弱った事がある」

「少しぐらい身体が疲れたつて構わんさ。あんな奸物かんぶつをあのままにしておくと、日本のためにならないから、僕が天に代つて誅戮ちゆうりくを加えるんだ」

「愉快ゆかいだ。そう事が極まれば、おれも加勢してやる。それで今夜から夜番をやるのかい」



「まだ枡屋に懸合かけあつてないから、今夜は駄目だ」

「それじゃ、いつから始めるつもりだい」

「近々のうちやるさ。いずれ君に報知をするから、そうしたら、加勢してくれたまえ」  
「よろしい、いつでも加勢する。僕は計略はかりごとは下手へただが、喧嘩けんかとくるとこれでなかなかすばしこいぜ」

おれと山嵐がしきりに赤シャツ退治はかりごとの計略を相談していると、宿の婆さんが出て来て、学校の生徒さんが一人、堀田先生にお目にかかりたいてお出でたぞなもし。今お宅へ参じたのじゃが、お留守じやけれ、大方ここじやろうてて捜し当ててお出でたのじゃがなもしと、鬨しぎいの所へ膝ひざを突ついて山嵐の返事を待つてる。山嵐はそうですかと玄関げんかんまで出て行つたが、やがて帰つて来て、君、生徒が祝勝会の余興を見に行かないかかって誘さそいに来たんだ。今日は高知こうちから、何とか踊おどりをしに、わざわざここまで多人たにんず数かず乗り込んで来ているのだから、是非見物しろ、めつたに見られない踊おどりだというんだ、君もいつしよに行つてみたまえと山嵐は大いに乗り気で、おれに同行を勧める。おれは踊おどりなら東京でたくさん見ている。毎年八幡はちまんさま様のお祭りには屋台が町内へ廻つてくるんだから汐酌しおくみでも何でもちやんと心得ている。土佐つぼの馬鹿踊ばかおどりなんか、見たくもないと思つたけれども、せつかく山嵐が勧めるもんだから、つい行く気になつて門へ

出た。山嵐を誘いに来たものは誰かと思つたら赤シャツの弟だ。妙な奴が来たもんだ。会場へはいると、回向院の相撲か本門寺の御会式のように幾旋となく長い旗を所々に植え付けた上に、世界万国の国旗をことごとく借りて来たくらい、縄から縄、綱から綱へ渡しかけて、大きな空が、いつになく賑やかに見える。東の隅に一夜作りの舞台を設けて、ここでいわゆる高知の何とか踊りをやるんだそうだ。舞台を右へ半町ばかりくると葭簀の囲いをして、活花が陳列してある。みんなが感心して眺めているが、一向くだらないものだ。あんなに草や竹を曲げて嬉しがるなら、背虫の色男や、跛の亭主を持つて自慢するがよからう。

舞台とは反対の方面で、しきりに花火を揚げる。花火の中から風船が出た。帝国万歳とかいてある。天主の松の上をふわふわ飛んで営所のなかへ落ちた。次はぼんと音がして、黒い団子が、しよつと秋の空を射抜くように揚がると、それがおれの頭の上で、ぼかりと割れて、青い烟が傘の骨のように開いて、だらだらと空中に流れ込んだ。風船がまた上がった。今度は陸海軍万歳と赤地に白く染め抜いた奴が風に揺られて、温泉の町から、相生村の方へ飛んでいった。大方観音様の境内へでも落ちたろう。

式の時はさほどでもなかったが、今度は大変な人出だ。田舎にもこんなに人間が住んでるかと驚ろいたぐらいじゃうじゃしている。利口な顔はあまり見当たらないが、

数から云うとたしかに馬鹿に出来ない。そのうち評判の高知の何とか踊が始まった。踊というから藤間か何ぞのやる踊りかと早合点していたが、これは大間違いであった。いかめしい後鉢巻うしろはちまきをして、立つ付け袴ばかまを穿いた男が十人ばかりずつ、舞台の上なまに並んで、その三十人がことごとく抜き身を携さげているには魂消たまげた。前列と後列の間はわずか一尺五寸ぐらいたろう、左右の間隔かんかくはそれより短いとも長くはない。たった一人列を離はなれて舞台の端はしに立つてるのがあるばかりだ。この仲間外はずれの男は袴だけをつけているが、後鉢巻は儉約して、抜身の代りに、胸へ太鼓たいこを懸かけている。太鼓は太神樂だいかぐらの太鼓と同じ物だ。この男がやがて、いやあ、はああと呑気のんきな声を出して、妙な謡うたをうたいながら、太鼓をぼこぼん、ぼこぼんと叩たたく。歌の調子は前代未聞の不思議なものだ。三河万歳みかわまんざいと普陀洛ふだらくやの合併がっぺいしたものと思えば大した間違まちがいにはならぬ。

歌はすこぶる悠長ゆうちやうなもので、夏分なつあめの水飴みずあめのように、だらしが無いが、句切りをとるためにぼこぼんを入れるから、のべつのようにでも拍子ひょうしは取れる。この拍子に応じて三十人の抜き身がぴかぴかと光るのだが、これはまたすこぶる迅速しんそくなお手際で、拝見ひやひやしていても冷々ひやひやする。隣となりも後ろも一尺五寸以内に生きた人間が居て、その人間がまた切れる抜き身を自分と同じように振り舞まわすのだから、よほど調子が揃そろわなければ、

同志撃を始めて怪我をする事になる。それも動かないで刀だけ前後とか上下とかに振るのなら、まだ危険もないが、三十人が一度に足踏みをして横を向く時がある。ぐるりと廻る事がある。膝を曲げる事がある。隣りのものが一秒でも早過ぎるか、遅過ぎれば、自分の鼻は落ちるかも知れない。隣りの頭はそがれるかも知れない。抜き身の動くのは自由自在だが、その動く範囲は一尺五寸角の柱のうちに過ぎられた上に、前後左右のものと同方向に同速度にひらめかなければならない。こいつは驚いた、なかなかもって汐酌や関の戸の及ぶところでない。聞いてみると、これははなはだ熟練の入るもので容易な事では、こういう風に調子が合わないそうだ。ことにむずかしいのは、かの万歳節のぼこぼん先生だそうだ。三十人の足の運びも、手の働きも、腰の曲げ方も、ことごとくこのぼこぼん君の拍子一つで極まるのだそうだ。傍で見ていると、この大将が一番呑気そうに、いやあ、はああと気楽にうたってるが、その実ははなはだ責任が重くって非常に骨が折れるとは不思議なものだ。

おれと山嵐が感心のあまりこの踊を余念なく見物していると、半町ばかり、向うの方で急にわつと云う関の声がして、今まで穏やかに諸所を縦覧していた連中が、にわか波を打って、右左りに揺き始める。喧嘩だ喧嘩だと云う声がすると思うと、人の袖を潜り抜けて来た赤シャツの弟が、先生また喧嘩です、中学の方で、今朝の意趣返

しをするんで、また師範しはんの奴と決戦を始めたところです、早く来て下さいと云いながらまた人の波のなかへ潜りもぐ込んでどつかへ行つてしまった。

山嵐は世話の焼ける小僧だまた始めたのか、いい加減にすればいいのにと逃げる人避けながら一散に馳かけ出した。見ている訳にも行かないから取り鎮しずめるつもりだろう。おれは無論の事逃げる気はない。山嵐の踵かかとを踏んであとからすぐ現場へ馳けつけた。喧嘩は今が真最中まっさいちゆうである。師範の方は五六十人もあるうか、中学はたしかに三割方多い。師範は制服をつけているが、中学は式後大抵たいていは日本服に着換きがえているから、敵味方はすぐわかる。しかし入り乱れて組んづ、解ほれつ戦つてゐるから、どこから、どう手を付けて引き分けていいか分らない。山嵐は困つたなど云う風で、しばらくこの乱雑な有様を眺めていたが、こうなつちや仕方がない。巡查じゆんさがくると面倒だ。飛び込んで分けようと、おれの方を見て云うから、おれは返事もしないで、いきなり、一番喧嘩の烈はげしそうな所へ躍り込こんだ。止せ止せ。そんな乱暴をすると学校の体面たいめんに関わる。よさないかと、出るだけの声を出して敵と味方の分界線らしい所を突き貫ぬけようとしたが、なかなかそう旨うまくは行かない。一二間はいつたら、出る事も引く事も出来なくなつた。目の前に比較ひかくてき的大きな師範生が、十五六の中学生と組み合っている。止せと云つたら、止さないかと師範生の肩かたを持って、無理に引き分けようとする途端とたんに

だれか知らないが、下からおれの足をすくった。おれは不意を打たれて握った、肩を放して、横に倒れた。堅い靴でおれの背中の上へ乗った奴がある。両手と膝を突いて下から、跳ね起きたら、乗った奴は右の方へころがり落ちた。起き上がって見ると、三間ばかり向うに山嵐の大きな身体が生徒の間に挟まりながら、止せ止せ、喧嘩は止せ止せと揉み返されてるのが見えた。おい到底駄目だと云ってみたが聞えないのか返事もしない。

ひゅうと風を切つて飛んで来た石が、いきなりおれの頬骨へ中つたなと思つたら、後ろからも、背中を棒でどやした奴がある。教師の癖に出ている、打て打てと云う声がする。教師は二人だ。大きい奴と、小さい奴だ。石を抛げろ。と云う声もする。おれは、なに生意気な事をぬかすな、田舎者の癖にと、いきなり、傍に居た師範生の頭を張りつけてやった。石がまたひゅうと来る。今度はおれの五分刈の頭を掠めて後ろの方へ飛んで行った。山嵐はどうなつたか見えない。こうなつちや仕方がない。始めは喧嘩をとめにはいったんだが、どやされたり、石をなげられたりして、恐れ入って引き下がるうんでれがあるものか。おれを誰だと思ふんだ。身長は小さくつても喧嘩の本場で修行を積んだ兄さんだと無茶苦茶に張り飛ばしたり、張り飛ばされたりしていると、やがて巡査だ巡査だ逃げろ逃げろと云う声でした。今まで葛練りの中で

泳いでるように身動きも出来なかつたのが、急に楽になつたと思つたら、敵も味方も一度に引上げてしまった。田舎者でも退却は巧妙だ。クロパトキンより旨いくらいである。

山嵐はどうしたかを見ると、紋付の一重羽織をずたずたにして、向うの方で鼻を拭いている。鼻柱をなぐられて大分出血したんだそうだ。鼻がふくれ上がつて真赤になつてすこぶる見苦しい。おれは飛白の袴を着ていたから泥だらけになつたけれども、山嵐の羽織ほどの損害はない。しかし頬ぺたがぴりぴりしてたまらない。山嵐は大分血が出ているぜと教えてくれた。

巡査は十五六名来たのだが、生徒は反対の方面から退却したので、捕まつたのは、おれと山嵐だけである。おれらは姓名を告げて、一部始終を話したら、ともかくも警察まで来いと云うから、警察へ行つて、署長の前で事の顛末を述べて下宿へ帰つた。

## 十一

あくる日眼が覚めてみると、身体中痛くてたまらない。久しく喧嘩をしつげなかつたから、こんなに答えるんだらう。これじゃあんまり自慢もできないと床の中で考え

ていると、婆さんが四国新聞を持つてきて枕元へ置いてくれた。実は新聞を見るのも退儀なんだが、男がこれしきの事に閉口たれて仕様があるものかと無理に腹這いになつて、寝ながら、二頁を開けてみると驚ろいた。昨日の喧嘩がちゃんと出ている。喧嘩の出ているのは驚ろかないのだが、中学の教師堀田某と、近頃東京から赴任した生意気なる某とが、順良なる生徒を使喚してこの騒動を喚起せるのみならず、両人は現場にあつて生徒を指揮したる上、みだりに師範生に向つて暴行をほしひまにしたりと書いて、次にこんな意見が附記してある。本県の中学は昔時より善良温順の気風をもつて全国の羨望するところなりしが、軽薄なる二豎子のために吾校の特権を毀損せられて、この不面目を全市に受けたる以上は、吾人は奮然として起つてその責任を問わざるを得ず。吾人は信ず、吾人が手を下す前に、当局者は相当の処分をこの無頼漢の上に加えて、彼等をして再び教育界に足を入るる余地なからしむる事を。そうして一字ごとにみんな黒点を加えて、お灸を据えたつもりでいる。おれは床の中で、糞でも喰らえと云いながら、むっくり飛び起きた。不思議な事に今まで身体の関節が非常に痛かつたのが、飛び起きると同時に忘れたように軽くなつた。

おれは新聞を丸めて庭へ抛げつけたが、それでもまだ気に入らなかつたから、わざわざ後架へ持つて行つて棄てて来た。新聞なんて無暗な嘘を吐くもんだ。世の中に何



が一番法螺ほらを吹くと云つて、新聞ほどの法螺吹きはあるまい。おれの云つてしかるべき事をみんな向うで並べていやがる。それに近頃東京から赴任した生意気な某とは何だ。天下に某と云う名前の人があるか。考えてみる。これでもれっきとした姓せいもあり名もあるんだ。系図けいずが見たけりや、多田満仲ただのまんじゆう以来の先祖を一人残らず拝ひとりましてやらあ。——顔を洗つたら、頬ほぺたが急に痛くなつた。婆さんに鏡をかせと云つたら、けさの新聞をお見たかなもしと聞く。読んで後架へ棄てて来た。欲しけりや拾つて来いと云つたら、驚おどろいて引き下がつた。鏡で顔を見ると昨日と同じように傷がついている。これでも大事な顔だ、顔へ傷まで付けられた上へ生意気なる某などと、某呼ばわりをされればたくさんだ。

今日の新聞に辟易へきえきして学校を休んだなどと云われちや一生の名折れだから、飯を食つていの一号に出頭した。出てくる奴も、出てくる奴もおれの顔を見て笑っている。何がおかしいんだ。貴様達にこしらえてもらった顔じゃあるまいし。そのうち、野だが出て来て、いや昨日はお手柄てがらで、——名譽めいよのご負傷でげすか、と送別会の時に撲つた返報と心得たのか、いやに冷ひやかしたから、余計な事を言わずに絵筆えびつでも舐なめていろと云つてやつた。するとこりや恐おそれい入りやした。しかしさぞお痛い事でしょうと云うから、痛いたかろうが、痛いたくなかろうがおれの面だ。貴様の世話になるもんかと怒ど鳴りつ

けてやったら、向う側の自席へ着いて、やっぱりおれの顔を見て、隣りの歴史の教師と何か内所話をして笑っている。

それから山嵐が出頭した。山嵐の鼻に至っては、紫色に膨張して、掘ったら中から膿が出そうに見える。自惚のせいか、おれの顔よりよっぽど手ひどく遣られてる。おれと山嵐は机を並べて、隣り同志の近しい仲で、お負けにその机が部屋の戸口から真正面にあるんだから運がわるい。妙な顔が二つ塊まっている。ほかの奴は退屈にさえなるときつとこつちばかり見る。飛んだ事だと口で云うが、心のうちではこの馬鹿がと思つてるに相違ない。それでなければああいう風に私語合つてはくすくす笑う訳がない。教場へ出ると生徒は拍手をもつて迎えた。先生万歳と云うものが二三人あつた。景気がいいんだか、馬鹿にされてるんだか分らない。おれと山嵐がこんなに注意の焼点となつてゐるなかに、赤シャツばかりは平常の通り傍へ来て、どうも飛んだ災難でした。僕は君等に対してお気の毒でなりません。新聞の記事は校長とも相談して、正誤を申し込む手続きにしておいたから、心配しなくてもいい。僕の弟が堀田君を誘いに行つたから、こんな事が起つたので、僕は実に申し訳がない。それでこの件についてはあくまで尽力するつもりだから、どうかあしからず、などと半分謝罪的な言葉を並べている。校長は三時間目に校長室から出てきて、困つた事を新聞がかき出しま

したね。むずかしくならなければいいがと多少心配そうに見えた。おれには心配なんかない、先で免職めんしよくをするなら、免職される前に辞表を出してしまうだけだ。しかし自分が変わるくないのにこつちから身を引くのは法螺吹きの新聞屋をますます増長させる訳だから、新聞屋を正誤させて、おれが意地にも務めるのが順当だと考えた。帰りがけに新聞屋に談判に行こうと思つたが、学校から取消とりけしの手続きはしたと云うから、やめた。

おれと山嵐は校長と教頭に時間の合間を見計みからつて、嘘のないところを一応説明した。校長と教頭はそうだろう、新聞屋が学校に恨みうらみを抱いて、あんな記事のことさらに掲かげたんだらうと論断した。赤シャツはおれ等の行為こういを弁解しながら控所ひかえしよを一人ごとに廻まわつてあるいていた。ことに自分の弟が山嵐を誘い出したのを自分の過失であるかのごとく吹聴ふいちようしていた。みんなは全く新聞屋がわるい、怪けしからん、両君は実に災難だと云つた。

帰りがけに山嵐は、君赤シャツは臭くさいぜ、用心しないとやられるぜと注意した。どうせ臭いんだ、今日から臭くなつたんじゃないやなかうと云うと、君まだ気が付かないか、きのうわざわざ、僕等を誘い出して喧嘩けんかのなかへ、捲まき込んだのは策こだぜと教えてくれた。なるほどそこまでは気がつかなかった。山嵐は粗暴そぼうなようだが、おれより智慧ちえ

のある男だと感心した。

「ああやつて喧嘩をさせておいて、すぐあとから新聞屋へ手を廻してあんな記事をかかせたんだ。実に奸物だ」

「新聞までも赤シャツか。そいつは驚いた。しかし新聞が赤シャツの云う事をそう容易く聴くかね」

「聴かなくつて。新聞屋に友達が居りゃ訳はないさ」

「友達が居るのかい」

「居なくても訳ないさ。嘘をついて、事実これこれだと話しゃ、すぐ書くさ」

「ひどいもんだな。本当に赤シャツの策なら、僕等はこの事件で免職になるかも知れないね」

「わるくすると、遣られるかも知れない」

「そんなら、おれは明日辞表を出してすぐ東京へ帰っちまわあ。こんな下等な所に頼んだって居るのはいやだ」

「君が辞表を出したつて、赤シャツは困らない」

「それもそうだな。どうしたら困るだろう」

「あんな奸物の遣る事は、何でも証拠の挙がらないように、挙がらないようにと工夫す

るんだから、反駁はんぱくするのはむずかしいね」

「厄介やくがいだな。それじゃ濡衣ぬれぎぬを着るんだね。面白おもしろくもない。天道てんどう是耶非ぜかひかだ」

「まあ、もう二三日様子を見ようじゃないか。それでいよいよとなったら、温泉ゆの町で取おとって抑おさえるより仕方がないだろう」

「喧嘩事件けんかじけんは、喧嘩事件けんかじけんとしてか」

「そうさ。こっちはこっちで向うの急所きゅうしよを抑おさえるのさ」

「それもよからう。おれは策略さくごは下手へたなんだから、万事よろしく頼たのむ。いざとなれば何でもする」

俺おれと山嵐やまあらしはこれで分わかれた。赤シャツが果はたたして山嵐やまあらしの推察すいさつ通とりをやったのなら、実にひどい奴やつだ。到底とうてい智慧ちゐ比ひべで勝かてる奴やつではない。どうしても腕力わんりよくでなくつちや駄目だめだ。なるほど世界せかいに戦争せんそうは絶たえない訳わけだ。個人こじんでも、とどの詰つまりは腕力わんりよくだ。

あくる日、新聞しんぶんのくるのを待ちかねて、披ひらいてみると、正誤せいごどころか取り消けしも見えない。学校がっこうへ行いって狸たぬきに催促さいそくすると、あしたぐらい出すでしょうと云う。明日あしたになつて六号活字ろくごうくわくじで小さく取消けが出た。しかし新聞屋しんぶんやの方かたで正誤せいごは無論むろんしておらない。また校長がくしやうに談判だんぱんすると、あれより手続きてんじのしよははないのだと云う答こただ。校長がくしやうなんて狸たぬきのような顔かほをして、いやにフロック張はっているが存外ぞんがい無勢むせい力りきなものだ。虚偽きぎの記き事を

掲げた田舎新聞一つ詫まらせる事が出来ない。あんまり腹が立ったから、それじゃ私  
が一人で行つて主筆に談判すると云つたら、それはいかん、君が談判すればまた悪口  
を書かれるばかりだ。つまり新聞屋にかかれた事は、うそこにせよ、本当にせよ、つま  
りどうする事も出来ないものだ。あきらめるより外に仕方がないと、坊主の説教じみ  
た説諭せつゆを加えた。新聞がそんな者なら、一日も早く打つ潰つぶしてしまつた方が、われわ  
れの利益だろう。新聞にかかれるのと、泥鼈すつぽんに食いつかれるとが似たり寄つたりだと  
は今日こんにちただ今狸の説明によつて始めて承知つかまつ仕つた。

それから三日ばかりして、ある日の午後、山嵐が憤然ふんぜんとやつて来て、いよいよ時機  
が来た、おれは例の計画を断行するつもりだと云うから、そうかそれじゃおれもやる  
うと、即座そくざに一味徒党に加盟した。ところが山嵐が、君はよす方がよかろうと首を傾かたむ  
けた。なぜと聞くと君は校長に呼ばれて辞表を出せと云われたかと尋ねるから、いや  
云われない。君は？ と聴き返すと、今日校長室で、まことに気の毒だけれども、事  
情やむをえんから処決しよけつしてくれと云われたとの事だ。

「そんな裁判はないぜ。狸は大方腹鼓はらつづみを叩き過たたぎて、胃の位置が顛倒てんどうしたんだ。君と  
おれは、いっしよに、祝勝会へ出てき、いっしよに高知のぴかぴか踊りを見てき、い  
っしよに喧嘩をとめにはいっただんじやないか。辞表を出せというなら公平に両方へ出

せと云うがいい。なんで田舎いなかの学校はそう理窟りくつが分らないんだろう。焦慮じれつたいな」

「それが赤シャツの指金さしがねだよ。おれと赤シャツとは今までの行懸ゆきがかり上到底しょうてい両立しない人間だが、君の方は今の通り置いても害にならないと思ってるんだ」

「おれだつて赤シャツと両立するものか。害にならないと思うなんて生意氣だ」

「君はあまり單純過ぎるから、置いたつて、どうでも胡魔化ごまかされると考えてるのさ」

「なお悪いや。誰だれが両立してやるものか」

「それに先だつて古賀が去つてから、まだ後任が事故のために到着とつちやくしないだろう。その上に君と僕を同時に追い出しちゃ、生徒の時間に明きが出来て、授業にさし支つかえるからな」

「それじゃおれを間あいのくさびに一席伺うかがわせる気なんだな。こん畜生ちくしょう、だれがその手に乗るものか」

翌日あくるひおれは学校へ出て校長室へ入つて談判を始めた。

「何で私に辞表を出せと云わないんですか」

「へえ？」と狸はあつけに取られている。

「堀田には出せ、私には出さないで好いいと云う法がありますか」

「それは学校の方の都合つうごうで……」

「その都合が間違まちがつてまさあ。私が出さなくつて済むなら堀田だつて、出す必要はないでしょう」

「その辺は説明が出来かねますが——堀田君は去られてもやむをえんのですが、あなたは辞表をお出しになる必要を認めませんから」

なるほど狸だ、要領を得ない事ばかり並べて、しかも落ち付きはら払つてゐる。おれは仕様がないから

「それじゃ私も辞表を出しましょう。堀田君一人辞職させて、私が安閑あんかんとして、留まつていられると思つていらつしやるかも知れないが、私にはそんな不人情な事は出来ません」

「それは困る。堀田も去りあなたも去つたら、学校の数学の授業がまるで出来なくなつてしまうから……」

「出来なくなつても私の知つた事じゃありません」

「君そう我儘わがままを云うものじゃない、少しは学校の事情も察してくれなくつちや困る。それに、来てから一月立つか立たないのに辞職したと云うと、君の将来の履歴りれきに係るから、その辺も少しは考えたらいいでしよう」

「履歴なんか構うもんですか、履歴より義理が大切です」



「そりゃごもつとも——君の云うところは、一々ごもつともだが、わたしの云う方も少しは察して下さい。君が是非辞職すると云うなら辞職されてもいいから、代りのあるままでどうかやつてもらいたい。とにかく、うちでもう一返考え直してみして下さい」

考え直すつて、直しようのない明々白白たる理由だが、狸が蒼くなったり、赤くなったりして、可愛想になつたからひとまず考え直す事として引き下がった。赤シャツには口もきかなかつた。どうせ遣つつけるなら塊めて、うんと遣つつける方がいい。山嵐に狸と談判した模様を話したら、大方そんな事だろうと思つた。辞表の事はいざとなるまでそのままにしておいても差支えあるまいとの話だつたから、山嵐の云う通りにした。どうも山嵐の方がおれよりも利巧らしいから万事山嵐の忠告に従う事にした。

山嵐はいよいよ辞表を出して、職員一同に告別の挨拶をして浜の港屋まで下つたが、人に知れないように引き返して、温泉の町の柵屋の表二階へ潜んで、障子へ穴をあけて覗き出した。これを知つてるものはおればかりだろう。赤シャツが忍んで来ればどうせ夜だ。しかも宵の口は生徒やその他の目があるから、少なくとも九時過ぎに極つてる。最初の二晩はおれも十一時頃まで張番をしたが、赤シャツの影も見えない。三日目には九時から十時半まで覗いたがやはり駄目だ。駄目を踏んで夜なかに下宿へ帰

るほど馬鹿氣た事はない。四五日すると、うちの婆さんが少々心配を始めて、奥さんのおありるのに、夜遊びはおやめたがええぞなもしと忠告した。そんな夜遊びとは夜遊びが違ふ。こつちのは天に代つて誅戮ちゆうりくを加える夜遊びだ。とはいふものの一週間も通つて、少しも駭げんが見えないと、いやになるもんだ。おれは性急せうかちな性分だから、熱心になると徹夜てつやでもして仕事をするが、その代り何によらず長持ちのした試しがない。いかに天誅てんしでも飽あきる事に變りはない。六日目には少々いやになって、七日目にはもう休もうかと思つた。そこへ行くと山嵐は頑固がんこなものだ。宵よひから十二時過すきまでは眼を障子へつけて、角屋の丸ぼやの瓦斯燈がすとうの下を睨にらめつきりである。おれが行くと今日は何人客があつて、泊とまりが何人、女が何人といろいろな統計を示すのには驚ろいた。どうも来ないようじゃないかと云うと、うん、たしかに來るはずだがと時々腕組うでぐみをして溜息ためいきをつく。可愛想こひぞうに、もし赤シャツがここへ一度来てくれなければ、山嵐は、生涯しょうがい天誅てんしを加える事は出來ないのである。

八日目には七時頃から下宿を出て、まずゆるりと湯に入つて、それから町で鶏卵けいちんを八つ買つた。これは下宿の婆さんの芋責いもせめに應ずる策である。その玉子を四つずつ左右の袂たもとへ入れて、例の赤手拭あかてぬぐいを肩かたへ乗せて、懐手ふところをしながら、枡屋ますやの楷子段かしだんを登つて山嵐の座敷ざしきの障子をあげると、おい有望有望と韋駄天いでてんのような顔は急に活氣ていを呈ていした。

昨夜までは少し塞ぎの気味で、はたで見ているおれさえ、陰気臭いと思つたくらいだが、この顔色を見たら、おれも急にうれしくなつて、何も聞かない先から、愉快愉快と云つた。

「今夜七時半頃あの小鈴と云う芸者が角屋へはいつた」

「赤シャツといっしょか」

「いいや」

「それじゃ駄目だ」

「芸者は二人づれだが、——どうも有望らしい」

「どうして」

「どうしてつて、ああ云う狡い奴だから、芸者を先へよこして、後から忍んでくるかも知れない」

「そうかも知れない。もう九時だろう」

「今九時十二分ばかりだ」と帯の間からニッケル製の時計を出して見ながら云つたが「おい洋燈を消せ、障子へ二つ坊主頭が写つてはおかしい。狐はすぐ疑ぐるから」

おれは一貫張の机の上にあつた置き洋燈をふつと吹きつけた。星明りで障子だけは少々あかるい。月はまだ出ていない。おれと山嵐は一生懸命に障子へ面をつけて、息

を凝らこしている。チーンと九時半の柱時計が鳴った。

「おい来るだろうかな。今夜来なければ僕はもう厭いやだぜ」

「おれは銭のつづく限りやるんだ」

「銭っていくらあるんだい」

「今日までで八日分五円六十銭払った。いつ飛び出しても都合つごうのいいように毎晩勘定かんじよう

するんだ」

「それは手廻しがいい。宿屋で驚いてるだろう」

「宿屋はいいが、気が放せないから困る」

「その代り昼寝ひるねをするだろう」

「昼寝はするが、外出が出来ないんで窮屈きゆうくつでたまらない」

「天誅も骨が折れるな。これで天網恢々疎てんもうかいかいそにして洩もらしちまったり、何かしちや、つま

らないぜ」

「なに今夜はきつとくるよ。——おい見ろ見ろ」と小声になったから、おれは思わずどきりとした。黒い帽子ぼうしを戴いたいた男が、角屋の瓦斯燈を下から見上げたまま暗い方へ通り過ぎた。違っている。おやおやと思った。そのうち帳場の時計が遠慮えんりよなく十時を打った。今夜もとうとう駄目らしい。

世間は半分静かになった。遊廊で鳴らす太鼓が手に取るように聞える。月が温泉の山の後からのつと顔を出した。往来はあかるい。すると、下の方から人声が聞えだした。窓から首を出す訳には行かないから、姿を突き留める事は出来ないが、だんだん近づいて来る模様だ。からんからんと駒下駄を引き擦る音がする。眼を斜めにするとやっと二人の影法師が見えるくらいに近づいた。

「もう大丈夫ですね。邪魔ものは追っ払ったから」正しく野だの声である。「強がるばかりで策がないから、仕様がなない」これは赤シャツだ。「あの男もべらんめえに似ていますね。あのべらんめえと来たら、勇み肌はだの坊っちゃんだから愛嬌あいきょうがありますよ」「増給がいやだの辞表を出したいのつて、ありやどうしても神経に異状があるに相違ない」おれは窓をあけて、二階から飛び下りて、思う様打ちのめしてやろうと思つたが、やつとの事で幸防しんぼうした。二人はハハハハと笑いながら、瓦斯燈の下を潜くぐつて、角屋の中へはいった。

「おい」

「おい」

「来たぜ」

「とうとう来た」

「これでようやく安心した」

「野だの畜生、おれの事を勇み肌の坊っちゃんだと抜かしやがった」

「邪魔物と云うのは、おれの事だぜ。失敬千萬な」

おれと山嵐は二人の帰路を要撃しなければならぬ。しかし二人はいつ出てくるか見当がつかない。山嵐は下へ行って今夜ことによると夜中に用事があるかも知れないから、出られるようにしておいてくれと頼んで来た。今思うと、よく宿のものが承知したものだ。大抵なら泥棒と間違えられるところだ。

赤シャツの来るのを待ち受けたのはつらかったが、出て来るのをじっとして待つてるのはなおつらい。寝る訳には行かないし、始終障子の隙から覗めているのもつらいし、どうも、こうも心が落ちつかなくつて、これほど難儀な思いをした事はいまだにない。いつその事角屋へ踏み込んで現場を取つて抑えようと発議したが、山嵐は一言にして、おれの申し出を斥けた。自分共が今時分飛び込んだつて、乱暴者だと云つて途中で遮られる。訳を話して面会を求めれば居ないと逃げるか別室へ案内をする。不用意のところへ踏み込めると仮定したところで何十とある座敷のどこに居るか分るものではない、退屈でも出るのを待つより外に策はないと云うから、ようやくの事でもうとう朝の五時まで我慢した。

角屋から出る二人の影を見るや否や、おれと山嵐はすぐあとを尾けた。一番汽車はまだないから、二人とも城下まであるかなければならない。温泉の町をはずれると一丁ばかりの杉並木があつて左右は田圃になる。それを通りこすとここかしこに藁葺があつて、畠の中を一筋に城下まで通る土手へ出る。町さえはずれば、どこで追いついても構わないが、なるべくなら、人家のない、杉並木で捕まえてやろうと、見えがくれについて来た。町を外れると急に馳け足の姿勢で、はやてのように後ろから、追いついた。何が来たかと驚ろいて振り向く奴を待てと云つて肩に手をかけた。野だは狼狽の気味で逃げ出そうという景色だったから、おれが前へ廻つて行手を塞いでしまつた。

「教頭の職を持つてるものが何で角屋へ行つて泊つた」と山嵐はすぐ詰りかけた。

「教頭は角屋へ泊つて悪むという規則がありますか」と赤シャツは依然として鄭重な言葉を使つてる。顔の色は少々蒼い。

「取締上 不都合だから、蕎麦屋や団子屋へさえはいつてはいかんと、云うくらい 謹直な人が、なぜ芸者といつしよに宿屋へとまり込んだ」野だは隙を見ては逃げ出そうとするからおれはすぐ前に立ち塞がつて「べらんめえの坊っちゃんた何だ」と怒鳴り付けたら、「いえ君の事を云つたんじゃないんです、全くないんです」と鉄面皮に言訳が

ましい事をぬかした。おれはこの時気がついてみたら、両手で自分の袂を握にぎってる。追っかける時に袂の中の卵がぶらぶらして困るから、両手で握りながら来たのである。おれはいきなり袂へ手を入れて、玉子を二つ取り出して、やっとなしながら、野だの面へ擲たきつけた。玉子がぐちゃりと割れて鼻の先から黄味がだらだら流れだした。野だはよっぽど仰天ぎやうてんした者と見えて、わっと言いながら、尻持しりもちをつけて、助けてくれと云った。おれは食うために玉子は買ったが、打ぶつけるために袂へ入れてる訳ではない。ただ肝癪かんしゃくのあまりに、ついぶつけるともなしに打つけてしまったのだ。しかし野だが尻持を突いたところを見て始めて、おれの成功した事に気がついたから、こん畜生、こん畜生と云いながら残る六つを無茶苦茶に擲たきつけたら、野だは顔中黄色になった。おれが玉子をたたきつけているうち、山嵐と赤シャツはまだ談判最中である。

「芸者をつれて僕が宿屋へ泊ったと云う証拠しやうこがありますか」

「宵に貴様のなじみの芸者が角屋へはいったのを見て云う事だ。胡魔化せるものか」

「胡魔化す必要はない。僕は吉川君と二人で泊ったのである。芸者が宵にはいろいろが、はいるまいが、僕の知った事ではない」

「だまれ」と山嵐は拳骨げんこつを食わした。赤シャツはよろよろしたが「これは乱暴だ、狼藉ろうぜきである。理非を弁じないで腕力に訴えるのは無法だ」



「無法でたくさんだ」とまたぼかりと撲ぐる。「貴様のような奸物はなぐらなくつちや、答えないんだ」とぼかぼかなぐる。おれも同時に野だを散々に擲き据えた。しまいは二人とも杉の根方にうずくまって動けないのか、眼がちらちらするのか逃げようともしない。

「もうたくさんか、たくさんでなけりや、まだ撲つてやる」とぼかんと兩人でなぐつたら「もうたくさんだ」と云つた。野だに「貴様もたくさんか」と聞いたたら「無論たくさんだ」と答えた。

「貴様等は奸物だから、こうやって天誅を加えるんだ。これに懲りて以来つしむがいい。いくら言葉巧みに弁解が立つても正義は許さんぞ」と山嵐が云つたら兩人共だまつていた。ことによると口をきくのが退儀なのかも知れない。

「おれは逃げも隠れもせん。今夜五時までは浜の港屋に居る。用があるなら巡査なりなんなり、よこせ」と山嵐が云うから、おれも「おれも逃げも隠れもしないぞ。堀田と同じ所に待つてるから警察へ訴えたければ、勝手に訴えろ」と云つて、二人してすたすたあるき出した。

おれが下宿へ帰つたのは七時少し前である。部屋へはいるとすぐ荷作りを始めたたら、婆さんが驚いて、どうおしるのぞなもと聞いた。お婆さん、東京へ行って奥さんを

連れてくるんだと答えて勘定を済まして、すぐ汽車へ乗って浜へ来て港屋へ着くと、山嵐は二階で寝ていた。おれは早速辞表を書こうと思つたが、何と書いていいか分らないから、私儀都合有之辞職の上東京へ帰り申候につき左様御承知被下度候以上とかいて校長宛にして郵便で出した。

汽船は夜六時の出帆である。山嵐もおれも疲れて、ぐうぐう寝込んで眼が覚めたら、午後二時であつた。下女に巡査は来ないかと聞いたら参りませんと答えた。「赤シヤツも野だも訴えなかつたなあ」と二人は大きに笑つた。

その夜おれと山嵐はこの不浄な地を離れた。船が岸を去れば去るほどいい心持ちがした。神戸から東京までは直行で新橋へ着いた時は、ようやく娑婆へ出たような気がした。山嵐とはすぐ分れたぎり今日まで逢う機会がない。

清の事を話すのを忘れていた。——おれが東京へ着いて下宿へも行かず、革靴を提げたまま、清や帰つたよと飛び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰つて来て下さつたと涙をばたばたと落した。おれもあまり嬉しかったから、もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだと云つた。

その後ある人の周旋で街鉄の技手になつた。月給は二十五円で、家賃は六円だ。清は玄関付きの家でなくつても至極満足の様子であつたが気の毒な事に今年の二月肺炎

に罹<sup>か</sup>って死んでしまった。死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんのお寺へ埋<sup>う</sup>めて下さい。お墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待っておりますと云った。だから清の墓は小日向<sup>こびなた</sup>の養源寺にある。

(明治三十九年四月)

底本：「ちくま日本文学全集 夏目漱石」筑摩書房

1992 (平成4) 年1月20日第1刷発行

底本の親本：「夏目漱石全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1987 (昭和62) 年10月27日第1刷発行

※底本の注にれば、本作品の原稿には、「そのうち学校もいやになった。」の後に、漱石自身による2字あけの指定があるという。このファイルでは、その情報にもとづい

て、当該の箇所を2字あけとした。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：真先芳秋

校正：柳沢成雄

1999年9月13日公開

2004年2月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫](http://www.aozora.gr.jp/) (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

● 表記について

- ・このファイルはW3C勧告XHTML1.1にそった形式で作成されています。
- ・傍点や圏点、傍線の付いた文字は、強調表示にしました。